－文 芸－

草の丘

第 5 号

2013 年 12 月　印旛文学の会

文芸

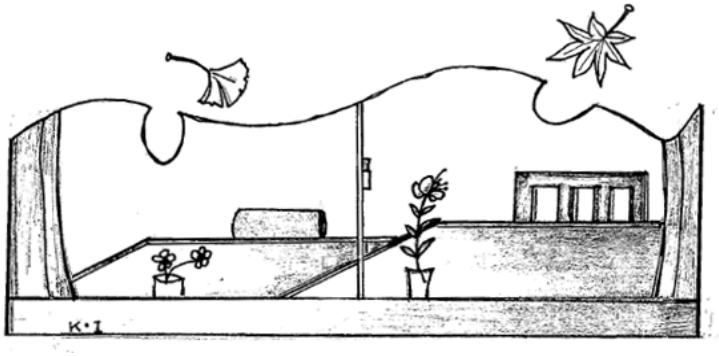
草の丘 第五号（二〇一三年 十二月）

目次　草の丘 第五号

《短編》
シトラスの秘密　中川とら ……一
《創作》
青い実り（第一話・尼僧院）
続・日見子たちの城　唐瀬 光 ……一一
《連載ＳＦファンタジー》
アプとズコ（ＡＰＰＵ ＆ ＺＵＫＫＯ）―第五回―
香取 淳 ……四二
《詩》
無題　中川とら ……六八
冬の日の別れ
《創作》
失われた年月　畑中康郎 ……七十
《創作》
みんな笑え　いんば華子 ……九一
《カット》
高橋より

シトラスの秘密

中川とら



その事は、誰にも話しませんでした。特に、お母さんには絶対言ってはいけない。知ったら、きっと発狂しそうに驚いて、どうなるか分からないと思っていたからです。

私には、三つ離れた一人の姉がいました。名前は「ゆり」。普段は「姉やん」と呼んでいました。

私が小学二年生になった時、両親は私達二人に六畳の子供部屋をあてがってくれました。机を二つ置くと、それだけで手狭になるので、ベッドは入れず、幸い一間の押入れがついていたので、布団を敷くという事になりました。机は、リビングの端にあった姉やんのおさがりが私のものになり、姉には先を見こしてか、今までのものより少し大きめでシンプルなものを父が見たて、私の机のとなりに並べられました。

自分達の部屋ができたことは、人として尊重されたようで嬉しく、時々私は庭に咲いている野の花を摘んではコップに挿し、二人の机の上に飾ったりしました。

夜、姉と布団を並べて敷く時は、何故か心がウキウキして、意味もなくはしゃぎたくなります。一日で一番解放されて楽しい時間がやって来た！　そんな感じだったのでしょう。

お風呂から出た姉やんが、濡れた髪をバスタオルで拭きながら、ふすまを開け入ってくると、いつもきまってなんとも言えない、いい匂いがしました。それが、「シトラス」の香りと知ったのは、まだ先のことです。

思春期の女の子は、やたらおしゃべりで、食いしん坊で、よく笑うものだけれど、姉やんは口数が少なく、滅多に笑わない女の子でした。かと言って、世に言う『ねくら』の雰囲気はなく、いつも背筋をピンとして姿勢よく、やむなく人と話をしなくてはならない時は、真直ぐ相手の目を見、大人びた言葉遣いで要を得た会話ができるのです。卑屈なところがなく、どこか堂々としていて、意地悪でもありませんでした。

ただ、友達がいないというか、私は姉やんから友人の話を聞いたこともなければ、見たこともないのです。携帯だって持っていたはずなのに、着信音が鳴ったのを聞いたことはなく、メールをうっている姿を一度も見かけませんでした。

おしゃれにはあまり感心がある風ではなかったけれど、かと言ってだらしないところは全くなく、いつもきちんとしていました。セミロングの髪を後ろで束ね、茶やグレーの色の服をきたがるので、本当の年齢より上に見られがちでしたが、それが又よく似合っていました。たまに、女の子らしい色の服を母が買ってきても、決して手を通すことがないので、母はよく「張り合いがない」と言い悲しそうでした。

そんな事だから、そのうち母は姉やんの姿が見えないと決まって「心配だわ　本当に」とつぶやくのが口ぐせになりました。小学生の私は、母の心配がどこから来るのか理解できず、多分他の女の子とちょっと感じが違うところかな、ぐらいに思っていたのです。

けれど、ある日の母の話だけは、私の心の中に沁み込んで離れないものになりました。

「もう何度も言いましたが、やっぱり、ゆりはおかしいですよ。お父さん、覚えているでしょう？　あの子が小学校に上がった時、私が、『お友達はできた？　学校は楽しい？』って聞いたら、何て言ったか……。『みんなバカで汚い』って言ったんですよ！　こんな事、小学一年生が言う言葉ですか？　私、一瞬ぞっとして『ゆりちゃん、大丈夫？』って思いましたよ」

自分で言うのも変ですが、私は比較的素直で世話のやけない娘でした。母はこのきわめて平凡で普通な私の前では、何につけ無防備で感情むき出しに父と話をするのです。時々、そばにいる私を気づかって、父は母をたしなめましたが、夢中になるとそれすらも耳に入りません。

「最近は、私が話しかけてもろくに返事すらしないですよ。はるかちゃんのお母さんからも、私は聞いているんです。『ゆりちゃんは、教室でほとんど話をしない。クラスメイトから無視されているって娘が言っていたけど……』って、心配で先生に相談すれば、「ゆりさん自身がもう少し積極的に、クラスの友人に接することができるといいんですけれどね」、それしか返ってこないです。

人をそんな目で見ていたら誰だって寄ってはこないですよね。未だに友達の話を私はあの子の口から聞いたことがありません。いじめられでもしているのか心配だわ……」

「その話は何度も聞いた。もういいかげんにしなさい！　すみれも聞いているじゃないか」

母は私を振り返り、にわかに我に帰って、「すみちゃん　ごめんね」と言いました。途方にくれた母の顔は気の毒な程憔悴して見えました。

「ゆりには、友達の会話が（意味のない話）に思えて、受けいれられないんだと思うよ。さもなくば、苦手なのかもしれないな。いずれにしても、どんな子も通る道だ。人より早熟なのかもしれないし。成長の一つの過程だろうよ。お母さんのように、何でも悲観的に考えたらきりがない。信じて見守るしかないさ」

「そうですか……」

話はいつもここまででしたが、忘れたころに又、繰り返されるのでした。

姉が言ったという「バカで汚い」という言葉は、そのうちに私の中でふたをされ、姉やんに対する思いは特に変わらず、二人はそれぞれに一緒の部屋で大きくなっていきました。

やがて、月日は過ぎ、姉やんが中学二年生になったころ、不思議な事が起こりました。

秋も深まったある夜、いつものようにお風呂上がりのいい匂いをいっぱいさせて、姉やんが部屋に入ってきました。

「明かり　消すね」

「うん」

いつもなら私の方が先におやすみなさいをするのに、何故かその夜は頭がさえて、いつまでも眠れません。毛布をかぶっても、寝がえりを何回してもだめです。部屋の中は次第にしっとり湿った甘酸っぱいいい匂いに満ちていきます。

とうとう諦めた私は、背を向け横になっている姉に声をかけました。普段は、滅多にしないことでした。なぜ？　大概、私の方が先に寝てしまっていたからでしょう。

「姉やん　起きている？」
「なに？」
　返事がすぐに返ってきたことにびっくりした私は、とっさに思いついたことを口走りました。
「私の名前、**れ**を付けて呼んで」
「ん？」
「すみれ」
「あー、そうね」
「すみはいやなの」
　私がそう言うと、姉はすっと布団から出て、明かりをつけたと思うと本棚から国語事典を持ってきて、寝転がりながら何やら調べ始めました。
「済、隅、炭、墨　なるほどね。分かりました、すみれさん」
　私達の名前は、植物が好きだった母がつけました。姉の「ゆり」も私の「すみれ」も母が大好きだった花の名前でした。
　それから姉は事典をそのまま枕元に置き、明かりをつけたまま、珍しく私の方に顔を向け、改めて「ふーん」とつぶやきました。そして、それがきっかけになったのです。
「姉やん、好きな人いる？」

　思わず出てしまった言葉に、私は「しまった！」と思いました。自分の中で「友達、好きな人」は、姉に対しての禁句と思い込んでいたからです。でも言ってしまった言葉は、取り消せません。毛布の中の足が緊張で汗ばんでくるのがはっきり分かります。
「いるわよ」
　間を開けず真顔で答えた姉やんは、少し口元を緩め瞬きをしました。
「昨日も会ったわ」
「え？」
「音楽と革命について二人でディスカッションしたわ」
「え！」
「森の中を散歩しながら」
「へー」
「……」
「どこで知り合ったの？」
「ボン大学で　友達よ」
「……」
「何、驚いているの」
「だって……」
「驚くようなことでないわよ」

私はボン大学を知りません。日本のどこかにそんな大学があるのかと思いました。
「なんていう人？」
「名前？　ヴェートーベン」
「え？　妄想？　それ」
「違うわ！　空想よ！」
姉やんは、力を入れて怒ったように言い切りました。妄想と空想の違いが何なのか、現実と非現実が頭の中で混乱し、私は言葉を失いました。
「明日は、二人でゲーテに会いに行く約束なの」
「……そう」
「もういい？　明かり消すわよ、おやすみ」
姉に背を向けじっとしていると、心臓がドキドキ音をたてているのがはっきりと分かります。カーテンのすき間から晩秋の月明かりがもれて、何時までも何時までも眠れませんでした。
次の日の朝、姉やんは何事もなかったような涼しい表情で起床し、いつものように学校に出かけて行きました。
あんなに楽しみにしていた夜が、その日から不安な時間になりました。
「そうだ。姉やんより早く寝ればいいんだ。昨日のことは忘れて……」
でもだめでした。そう思えば思うほど、頭も目も冴えわたって、話しかけられたらどうしょうと心配になるのです。
安の定、私の勘は当たりました。
いつものあのいい匂いが部屋中に溶けて、布団の上にほんのりそれが降りてきた頃、机で何やらカサカサ紙の音をさせながら、作業らしきことをしていた姉やんが声をかけてきたのです。
「すみれちゃん　いいもの見せてあげる」
一瞬、寝たふりをしようかと思いました。が、だめです。小さい時から姉に対して、とぼけたり、嘘をついたり、反論したり、そういうことをしたことがないというか出来ないのです。
私は、おそるおそる箱らしいものを持っている姉の手元を見ました。姉はその箱を「ほら、きれいでしょう」と言いながら、明かりの真下にもってきました。真っ白で柔らかそうな和紙の上には、真っ赤な紅葉の葉と染みひとつない鮮やかな黄色い銀杏の葉が何枚かのっていました。
「きれいだね」
「こうして見るのもいいわ」
姉やんはそれぞれの葉の元をやさしく指でつまみ、目を細めて明か

りに透かし、うっとりしています。
「赤の色素はアントシアニン、黄色の色素はカロチノイド。秋は空気が澄んで気温が下がり、緑のクロロフィルが分解して葉の色が変わるの。ステキね」
「うん。この紅葉はうちの庭の？」
「そう」
「銀杏は？」
「街路樹よ」
「ふーん」
「ゴッホに見せてあげたかった。日本の紅葉、きっと感動したと思うわ」
　そう言って姉は箱にふたをして机の引出しへそれをしまいました。それからいつものように、「明かり消すね」といって布団に入ると、めずらしく、小さい声でゆっくり話しを続けたのです。
「ゴッホは、日本の浮世絵が好きだったのよ。苦しみながら絵を描き続けたけれど、生きている間に一枚の絵も売れなかったんですって。可愛いそうなゴッホ。でも、今は世界中の子供から大人まで、ゴッホの絵を一枚も知らないという人はいないと思うわ。すみれちゃん知っている？」
「うん。ひまわり、はね橋……、教科書にのってた」
「そうね」
　姉やんの話が、そのあともつづいていたのかは、覚えていません。おそらく不安が解消して安心し、そのあたりで私は眠ってしまったのでしょう。
　そして、不思議なことにその日以来、姉やんは何かがふっ切れたかのように、いろいろな話しをしはじめました。途方もなく現実離れした話は意外に少なく、初めて聞く内容のめずらしさは、得も言えぬ魅力があって、次第に私は引き込まれていきました。
　世界遺産の水の街、中国雲南省「麗江」や、長江支流の桃源郷シャングリラ、それらの美しい自然、太陽が四ヶ月も沈む世界最北端、最果ての地スバールバル諸島、想像を絶する厳しい自然の次の日は、日本一水のきれいな仁淀川、そしてその川沿いの桜並木を情感豊かに語るのです。
　アンデスのウユニ塩原やインド、ダージリンのヒマラヤ鉄道も興味深いものでした。
　姉の口から語られる一つ一つの場所や人々は、あたかも自分が実際そこにいたかのような錯覚をおこさせながら、ハイビジョンの映像となって、私の頭の中に映し出されていきます。

時に、「モーツァルトはあまり好きではないわ。馬車に乗って疾走しているようで疲れるの」と言ったかと思うと、アンパンマンのマーチを「いっしょに歌おう」と私をさそい、歌い終わると（何のために生まれて　何をして生きるの　答えられないなんてイヤだ！）って、今の私の気持ちそのものよ」と言ったりしました。

ある日、私は姉やんが、どうしてこんなにもいろいろな事を知っているのか聞いてみたくなりました。当然、何もかも作り話ではないはずなのです。

すると姉やんは、「本よ　新聞も時々読むわ。あとはよく観察して考えるの。それだけ。図書館には絵本もＣＤもＤＶＤもあるから、あなたも行くといいわ」と即答しました。

姉の話には、たんたんとした説得力があり、気負いや見栄は感じられませんでした。

それに今まで気がつかずにいた新しい発見もありました。姉やんの話は知識が豊富なだけでなく、聞き入ってしまう何かがあって楽しいのです。それが何なのかは分からないのですが、両親や友達と話した後には感じることがない別の何かであることは、幼稚な私にも分かりました。

その上、声もいい、高からず低からずいつも心地よく耳に入ってくるのです。

そう言えば、おかしな癖も見つけました。眠る時、必ず仰向けになり片足を真っ直ぐ持ち上げるのです。すると、いく分だぶついたパジャマの裾がスルスルと下がって、暗がりの空間に色白で形のよい脛が浮かび上がります。

血液が下っていくのが気持ちがいいらしく、そのままの状態で深呼吸を二、三回すると、それから布団を抱きかかえ、背中とお尻を出して横になる。これが姉やんの儀式のような睡眠スタイルでした。

ある夜、いつものように足を上げた姉やんが言いました。

「血がひいた人間の肌って、本当に白いね。乳白色の肌に似ているわ」

「乳白色？」

「藤田画伯の描いた（白い肌）よ」

「ふーん」

「そうだ、殺人事件があったのよ」

「……空想？」

「事実よ！　おばあちゃんが生きていた頃、聞いたい事件だから」

おばあちゃんは、私が三歳の時に病気で亡くなりました。と言う事は、姉が六歳になる前の話です。そんな幼い頃の事を記憶しているなんて、姉やんらしいと思いました。

「五丁目のお寺知っているでしょう？」
「うん」
「あの向かいに昔、古い下駄屋があったの」
「そう」
「お店は、腕のいいおじさん手造りの高級下駄が揃っていたけど、いつもしかめっ面の恐い顔で仕事をしているもんだから、お客さんが寄りつかなかったらしい。おばさんは働き者で、毎日狭いお店の中をピカピカに拭き掃除して、店先にはいつも打ち水もされてきれいだったって。でもひどい愛想なしで「いらっしゃいませ」の一言も言わないから、「そのうちあの店は、つぶれるよ」って近所の人達は、噂さしたそうよ。
　おばあちゃんはおしゃれな人だったから、時々お店に入って、鼻緒の色や柄を見たり、下駄の重さや形を品定めするのが楽しみだったって言ってた」
「ふーん」
「そうそう、まだお嫁に行かない一人娘がいたらしいんだけど、滅多に顔を出すことがないので、見たことがある人はほとんどいなかったようね」
「ふーん」
「ところが！」
　姉やんはここで少し声を低くおとし、つづけました。
「ある冬の日。その日は一日中冷たい風が止むことがなく吹きつづけ、やがてザワザワと木々の葉が騒々しくなった深夜、その店に泥棒が入ってね、三人とも殺されてしまったの！」
「キャー！」
　私はあわてて布団をかぶり「もういいよ！」と何度も叫びました。
「最後まで聞いて！　翌朝、警察が来て、部屋を調べると、中は血の海でお金も大部取られていたということよ。近所の人は、『こんな結末になるとはね～、やっぱりお寺の傍には住むもんじゃないわ』なんて、訳分からないこと言っていたそう。おばあちゃんは、『災難とは言え気の毒だね。それにしても、もっと明るく生きられなかったんだろうかね、あの人達は自分達で不幸を呼びよせたような気がするよ』って言ってた」
「犯人は見つかったの？」
「ううん、何年たっても見つからなかった。お店は買い手がつかず、気味悪がられてそのうち壊されたのよ」
「おわり？」
「ええ」

長い話はやっと終わりました。手足の先が冷たくなって、心底怖いと思いました。姉やんは、もう何も言いません。久しぶりに目が冴えて、私は眠ることができません。

どの位たったでしょう。おしっこがしたくなりました。でも怖くて、とても真っ暗な部屋の外へは出られません。がまんしてがまんして限界に達して、私は姉やんに声をかけました。

「おしっこ、まんできない。姉やん一緒に行って」

返事がありません。あんな怖しいことを話して、平気で寝ている姉の気がしれません。

「姉やん！」

私は姉をゆさぶりました。

「なに？」

「おしっこ」

「えっ？」

「怖いから　一緒に行って！」

「あー」

姉やんは、いやな顔一つせずだまってついて来てくれました。

長い用を足しスッキリして布団にもぐると、不思議に怖さは遠ざかっていきました。

「人間の膀胱ってスゴイんだね。あれだけのオシッコをためることができるなんて、感動した、私」

「ばかね。病気になるわ」

私達は、布団から目だけ出して、クスクスとしのび笑いをしました。

その後、姉やんは塾へも行かず、希望していた公立高校へすんなり進学し、私も中学生になりました。

母は、久しく「心配だわ」を口にしなくなりました。

夏休みになると、姉やんはアルバイトを始め、それは三年生までつづきました。父からは門限を厳しく言われていたので、すべり込むように帰宅すると、食事もそこそこにお風呂に入って寝る。そのくり返しの毎日でした。

相変わらず足を上げるクセは直りませんでしたが、疲れ果て、私に話しかけてくることはめったになく、気がつくと寝息をたてているのでした。図書館には時間を見つけ通っているようで、本当の意味でそこは姉やんの学習の場所になっていたのです。

ある日、私は初めて、携帯で話をしている姉やんを見ました。

「はい、分かりました。山下さん、私が出ますから、大丈夫です。お大事にしてください」

話の内容は、バイトの交代のようでしたが、やさしく相手を気づかう姉やんは、いつもとちょっと違う別人のような感じがしました。そしてその時、私は分かったような気がしたのです。

姉やんは確かに、友達がいなかったかも知れない。自分の思いや考えを共感し合い楽しめる友人が。おそらく、人と馴染みにくいちょっと異質な存在だったのだろう。が故に、それが嫌われる原因になっていたのかもしれない。

ならば、いやな思い、寂しい思いも沢山あったのではないか。泣いたり、引きこもったりしないから、本当のことが判かりにくかったけれど、今思えば、体操服がなくなったことも、ノートの表紙にソースの染みがベットリ付いていたことも、鞄の苺飾りが引きちぎられていたことも、全て陰湿ないじめだったのだ。孤独、それに近い感情を味わった日々であったかも知れない。だから本を読み、自然を観察し、世界に目を向け、過去の偉大な人々から力を得ようと必死だったのだろう。そしてそこから自分の生きる道を捜し、創ろうとしてきたんだ。試練と闘いそれに打ち勝ったヴェートーベンやゴッホは、おそらく大切な心の友であったにちがいない。妥協せず、ひたむきに、自分自身の青春を強い意志で生き抜いてきた姉やんを、私は心から立派だと思いました。

めずらしく、姉やんのバイトの休みがつづいた初秋のある夜、私達はいっしょに床につきました。

姉やんの濡れ髪から、いつもの甘酸っぱくさわやかな香りが広がってきます。

「いい香りだね、それってなーに」

「シトラスよ、柑橘類の香料。この爽やかな香りが落ち着くの。だからずっと同じシャンプーを使っている……」

「そうだったんだ」

「お母さんやすみれに使われたくないから、お風呂場には置かなかったのよ」

そう言うと姉は、布団をかかえ背中を向けました。姉やんの丸くてちょっとふっくらしてきたお尻の曲線が、いつもと違って見えます。

「いつか、その香りが好きだって言う人が現れるかも……」

「……どういう意味？　おませね」

話はそこで終わりました。

私はなんだか安心して、いつまでもニヤニヤしながら、姉やんの後ろ姿を眺めていました。

そうなってほしい。そういう姉やんも見てみたい、そう思いながら。

〈了〉

青い実り（第一話・尼僧院）

続・日見子たちの城

唐瀬　光

プロローグ

考え方も感じ方も、まるで男と同じ。なのに、身体は女。いつも自分自身が、なにか別の肉体に閉じ込められているような気がする。物心ついた時からずうっとそうだった。

幼い頃から女の子みたいに着飾ることもせず、スカートも嫌がって穿かなかった。遊び仲間は男の子ばかり。自分を『おれ』とか『ぼく』と言い、相手を『おまえ』、『きみ』と呼んだ。それでも小さい頃は、あまり違和感なく過ごせた。だが小学校も高学年になるにつけ、周囲との違いを強く意識するようになった。同級の男子からは『オトコ・オンナ』と呼ばれ、レイプまがいの激しいイジメを受けた。

（自分は、なにかおかしい……）

親に相談しても、あいまいな答えしか返って来なかった。

事情を知ったのは小学校も卒業が近づいていた頃、池袋の大きな書店で一冊の医学書を手にしたのがきっかけだった。普段は学術コーナーなんて見向きもせずに通り過ぎるのだが、この時は『性同一性障害……』というその背表紙に目が惹きつけられ、急いで棚から抜き出して立ち読みした。

『目からうろこが落ちる』とはこのことをいうのだろう。難解な医学

用語にもかかわらず、なぜかすらすら頭に入った。千五百円もするその本を買うと今日の小遣いはなくなるが、迷わずレジに持って行った。

そこから得た知識によると、人間には男と女の二種類あるが、その形態は身体ばかりでなく脳の構造も違うのだそうだ。脳の仕組みが違えば感じ方考え方が異なり、当然その言動も別のものとなる。男には男の、女には女の行動様式があり、それは誕生後の学習によるものではなく、持って生まれた遺伝情報（本能）のなせる技だと。

だが、まれに男の身体だけど脳は女、反対に女で男の脳、という人がいる。それは胎児だった頃のホルモン異常が原因らしい。それを『性同一性障害』というのだそうだ。この症状を持つ人は、性の自覚が自分の身体と違うことに強い違和感を覚える。そして苦しみの末に自殺に走る人も多い。これを治すには、現在の医術では脳の構造を変えることはできないから、手術により身体の方を脳に合わせて形成するしかない。

その事実を知った時に、自分は障害者なのだと落胆するより（なんだ、こういうことだったのか）となぜかすっきりした気分になった。

それ以後、他人との違いを意識し、無用な摩擦を起こさないように気をつけるようにした。

中学校に上がる時には、スカートを穿かなくてもよい服装の自由なところを選んだ。そのせいか、そこでの生活はかなりよかった。女子にはモテたし、親友と呼べる友達（こちらは男子）も二人できた。

高校は、彼らと一緒に制服のないところに行くはずだった。だが、別の学校に入れたいと思っていた親父の計略にかかって、肝心の入学試験に落っこちてしまった。それは試験日の前夜、親父にあおられて大好きな酒をたらふく飲んだせいだ。臭い消しを飲んでなんとか試験は受けたが、頭は二日酔いで真っ白。結局友人は合格したが、ぼくはダメだった。

そこで、親父の『昔の親友』が理事長をしているというこの私立高に入るしかなかった。ところが、ここがなんと女子校。それも全寮制。

初めてこの［舞鶴（まいづる）女学園］の寮に入る時、ぼくはいつもの黒いキャップ帽に丸いサングラス、こげ茶の革ジャンにだぶだぶのGパンという姿でやって来た。ところが、女の子目当てに侵入した変態男と間違えられ、激高した女生徒たちの袋叩きに遭った。

その時、息も絶え絶えのぼくを助けてくれたのが伊東葵（いとうあおい）という人だった。黒い瞳に卵型の顔、小麦色の肌。たちまち魅了された。だが、彼女は二年生で生徒会書記。所属する体育系クラブの柔道部では最強の二段、おまけに文化クラブの園芸部でも庭師の腕前を持つという学園アイドル。とても新入生のぼくが近づける相手ではなかった。

なんとか注意を引きたいと思っていたところ、講堂裏の築山で植木の手入れをしている彼女と話す機会があり、念願の友達になることができた。だが、ぼくの望みはそれよりもっと上にあるのだ。

この学校には理事長の小村正美（こむらまさみ）以外、男という者が存在しない。勤務する教師や職員たちも皆女性。ここは男子禁制の隔離社会なのだ。

外の男と交際しようにも、校外に出るには学校の許可が必要。生徒会役員でもない限り、これを取るのは難しい。無断外出しようにも、学園の敷地は寮も含めて丈高いコンクリートの塀に囲まれている。

ここは男の存在しない女だけの世界なのだ。勢い恋する乙女心は同じ女生徒に向かい、女だけの親密なカップルを作るものが多い。

そこでいつから始まったのか、この女生徒同士の繋がりを公表し、世間（校内）に認知させる制度（慣習）がある。それは聖婚（せいこん）と呼ばれるもので、一種の同性婚であろう。

式は廃園となっている西洋庭園の中に建っているギリシャ神殿（レプリカ）で、祭礼研究会の巫子により執り行われる。ここで誕生したカップルを『日見子（ひみこ）』といい、『日子（ひこ）』が男役、『見子（みこ）』が女役となる。

この聖婚が恋人たちの究極の目標で、ぼくも葵さんとぜひ日見子の関係になりたいと思っているのだ。

なお、この慣習には学校当局は一切関与しないという。

尼僧院

1

「シン、制服なんか着て。校外にでも出かけるの？」

日曜日の朝、ぼくがいそいそとセーラー服に着替えているのを、ルームメイトのお雪（ゆき）がいぶかしげに眺めている。

「ん……校外じゃない」

そっけなく答える。

「そう、でも、デートでしょう。葵様と」

彼女はツインテールの髪を左右に揺らしながらすぐ傍までやって来た。そして首をかしげて、ぼくの顔を不思議そうに見上げる。

「葵さんから、今日は制服に白いソックスで来るように言われたのさ。『自分も同じにするから』だって。理由は教えてくれなかった」

「おかしいわね、あの方はジャージ党なのに。シンと二人でセーラーペアでもするのかしら？」

彼女は自分で言った「セーラーペア」がおもしろかったとみえ、「きゃ！」と片手を口に当てた。

「言ってたよ、森の中に正装でなくちゃ入れない所があるんだって。

今日はそこへ行くって。でも変だなぁ、あのうっそうとした森の中に、高級レストランでもあるのか？」

それを聞いたお雪はしばらく首をひねっていたが、「わかった！」とポンと手を打った。そして「ふふん、ふふん」と一人でうなずく。

「なんだ、知ってるの。どこ？　教えてよ」

詰め寄ると、彼女はパッと飛び下がって、「秘密、秘密」と人差し指を唇に立てた。

「まあ、行けばわかるわ。竜宮城みたいなとてもいい所よ。おいしいお菓子もあるし。乙姫様は少し老けていらっしゃるけど……」

そばかすを散りばめた丸い顔には、奇妙な薄笑いが浮かんでいた。それから「あたしも、部活があるから」とか言って制服に着替える。そして箪笥（たんす）から紬（つむぎ）の和服を取り出すと、大きな紙袋に入れた。

「着物なんか、どうするんだ？」

「もちろん部活に使うのよ。今日は本番。お師匠様の前でやるの。ああっ緊張するわ。じゃ、あんたもガンバッテね」

お雪は張り切った顔で部屋を出て行った。ドアを閉める時、チラッとぼくを振り返って「くふっ！」と変な声をもらしたのが、なんとなく気になったが。

（おおげさな。たかが花を飾るのに着物だの師匠だのと。そういえば、あいつ生け花なんか持って来たことないなあ。同じ部屋になって、もう二か月になるのに）

見回すと、青いつぼみをつけた水仙の鉢が、本棚の上にポツンと置いてあるきりだ。花を挿す瓶一つない。この寮にいる同じ華道部の子なんか、部屋いっぱいに生け花を飾っているというのに。

頭に（？）マークを浮かべながら、壁に立てかけてあるお雪のドレッサーを覗く。そこには、すらりと背の高いショートカットの美少女がこちらを見ていた。黒地に白線を一本引いた襟立ての下には、かわいい二つの膨らみ。プリーツスカートにおおわれた腰回りは、ふっくらと柔らかく、裾からは白いなめらかな足が二本突き出ている。もちろん男のように、ごわごわしたすね毛などない。

（これ、オレ？）

いつものように違和感がつきまとう。

まあ、なぐさめといえば、その胸や腰の膨らみは、同年齢の女子に比べて目立つというほどでもない。男の服装をすれば、まず女だと見破られることはない。やはり心が男だと体形もそれに習うのだろうか。

ぼくは彼女に向かってこぶしを突き出し、「やっ！」と威嚇した。すると鏡の少女も同時に拳を突き出す。しばらく鏡の子とにらめっこしてから、寮の部屋を後にした。

待ち合わせの講堂裏に着いたのは十時少し前だった。葵さんはまだ来ていない。講堂の中からは、なにかを朗読する声が聞こえた。窓に近づいて中を覗くと、台本らしきものを持った女生徒たちが、身振り手振り、一生懸命なにかを表現しようとしている。演劇部が芝居の練習をしているのだろう。

その無理に感情を込めたような声を聞きながら、苦むした地蔵の前でぶらぶらしていると、葵さんの優雅な姿が築山の向こうに現れた。今日は黒い制服をすらりと着こなしている。セーラー服がこれほど似合う人は、学園中探しても少ない。ぼくを見つけると、その面長の顔にいたずらっぽい笑みを浮かべた。

ぼくは女の子がするように、右手を胸の前で小さく振った。とたんに彼女が「ぷっ！」と吹き出す。

「似合わないことをするのね」

彼女は口元に手を当てて、笑い出すのをこらえている様子。

「似合いませんか」

「似合わない、似合わない。竹が葉っぱを振っているみたい」

辛辣な言葉は彼女の十八番。

「ひどぉい！　竹だって」

思わずムッと来た。

「竹の棒に、セーラー服が引っかかっているよう」

「ますますひどい。葵さん、喧嘩売りに来たんですか」

「喧嘩？　それもいいね」

葵さんは、小麦色の顔をゆがめてカラカラと笑う。

「なんなら、ここでお相手しようか。もう、この前みたいにはいかないよ」

彼女は両手を広げて腰を落とす。先日柔道の練習試合で、ぼくの秘策にかかって一本負けしたのを、いまだに根に持っているらしい。

もちろんその策とは姦計（かんけい）といえるもので、つまり、皆にわからないように相手の懐に手を突っ込み、乳房をつかんで動揺した隙に技をかけるという、実に汚い手を使ったものだから、カンカンに怒った葵さんに校庭中を追い回された。後で和睦したものの、ことあるごとにあの時のことを言い出す。よほど悔しかったのだろう。柔道では学園内に敵う者のない彼女が、反則とはいえ、白帯の新入生に一本背負いで投げられたのだから。

「それじゃあ、ご指導お願いいたします」

こちらも腰を落として両手を前に突き出す。

ふざけて睨み合っていると、講堂の方から「きゃ！」とか、「うっそ

お！」とかの声が上がった。振り向くと、十人ばかりが窓に張りついてこちらを眺めている。どの顔にも嬉々とした好奇心が浮かんでいた。どうやら芝居の練習は中止らしい。

ぼくは急いで葵さんの腕を取ると、森の方に歩き出した。

2

広く深い学園の森。遠くには外界（校外）との境に設けられた城壁のような高い塀が見え隠れし、その向こうには高尾山の青い稜線が間近に連なっている。

「これから、どこに行くんですか」

葵さんの後をついて歩きながら、なにか変だと思った。どこまで行ってもレストランがない。

彼女は森を抜けキャンプ場を通り、尼寺のある築地塀に沿って歩いて行く。塀の上には寺院の屋根が頭を出し、その隙間から学園を取り巻く壁の先端が見える。人の五、六倍の高さを誇るその重厚な壁は、この寺院をも丸ごと学園の敷地に取り込んでいるのだ。もっともこの寺と学園は一体。歴代の理事長には、ここの住職一族が就いている。

「ここよ」

彼女は築地塀の切れた所を指差した。

そこには屋根のついた古い門があった。門柱には［翔鶴院］と墨書した厚い板の表札がかかっている。

「えっ、ここが竜宮城？」

ぼくは蔦のからみついた山門を見上げて首をひねった。どう見てもここに高級料亭があるとは思えない。

「竜宮城？　なに、それ」

葵さんがけげんな顔で振り向く。

そこで今朝お雪から聞いた話をした。すると彼女は身体を二つ折りにして笑い転げた。立っていられないとみえ、芝生に膝をつき、背中をひいひい波打たせている。

「あはっ！　お雪ちゃん、そんなことを。確かにお菓子は出るけど、乙姫様も一応いらっしゃるけど……。少し老けてるって。ぎゃーっ、はははっ！」

葵さんはひとしきり笑い続けてから。ようやく立ち上がるとスカートについた埃（ほこり）を両手で払った。

「アレ、嘘だったんだ。やっぱり」

（お雪のやつ、からかいやがって！）

「まあ、ひとくちに嘘とも言えないのでは。とにかく行けばわかるよ」

彼女は笑いながら、門柱の脇にある小さなボタンを押した。
しばらく待つと、木戸が開いて一人の若い尼僧が出て来た。
「伊東様とお連れの方ですね。お待ちしておりました」
ぼくたちが中に入ると、彼女は門を閉め建物の方に案内する。
「ちょっと、ここでなにをするんです？」
広い境内を歩きながら、急に不安になった。
「日曜には、ここでお茶会があるの。わたしは今日招待されているのよ。大丈夫、あなたのことも頼んでおいたから」
彼女はチラッとぼくの目を覗いた。
「えっ、お茶会？　それって茶道ですか。おれ、茶の作法なんて知りませんよ」
「たかがお茶じゃない。ただ飲めばいいのよ。飲めば」
こともなげに言う。
「ただ飲めばいい、つうたって……」
先導していた尼僧が、白い頭巾の下でクスリと笑った。
「みんな来ているかしら」
葵さんは庭園の小道を歩きながら、楽しそうにつぶやいた。
「みんなって？　ほかに誰か来るんですか」
「そう、ここは茶道部の修行所よ。なんたって道を極めたお師匠様に教えてもらうのが一番でしょう」
「えっ、茶道部。お師匠様」
とたんに憂鬱になった。二人だけのデートとばかり思っていたが。
「久しぶりにショウカクイン様にお会いするの、なつかしいわぁ」
彼女はうれしそうに周りの景色を眺めながら、飛び石伝いに歩いて行く。その腰まで届くおさげの髪。あまり長いからか、ところどころゴム紐で留めてある。その二つの束が左右に揺れて彼女のうきうきした気分を表していた。その髪に目をやりながら、ふと疑問に思った。
「翔鶴院って、この寺のことでしょう。門に書いてありましたけど」
葵さんは「バカねえ」と、人を小馬鹿にしたような顔で振り返った。
「ここの住職はね、代々お寺の名前を継ぐの。今の方は、確か三十八代目だと思うよ」
「三十八代……。それって、すごく古いですね」
「そう、四百年続いているって」
「四百年！　江戸時代からなんだ」
「この前お会いしたのは、ちょうど去年の今頃。もう八十を超えたお婆ちゃんだけど、とてもしっかりした気さくな方よ」
彼女はそう言うと、幼い女の子みたいにスキップを始めた。

しばらく歩くと簡素な木造の建物があった。
「ここは待合(まちあい)といって、お茶会に招かれた客が集まる所よ」
彼女は手首から腕時計をはずすと、スカートのポケットに入れた。
「あなたもして」
「なぜです？」
「お茶の席では飾り物は一切ダメ。たとえ腕時計でも」
「なんだか肩が凝りそうだなあ」
ぼくは肩を揉み揉み、木と漆喰で作られたその建物を見上げた。
「いい、茶道とはね、侘(わ)び寂(さ)びを味わうものなのよ」
「はっ、ワビ？　サビ？　なんですか、それ」
「なんですか、と聞かれてもねえ……」
葵さんは「うーん」と考え込む。
「新古今和歌集に、こんな歌があるの。『見渡せば　花も紅葉(もみじ)も　なかりけり　裏の苫屋(とまや)の　秋の夕暮れ』……こんな感じかな」
彼女は（わかった？）というようにぼくの顔を覗いた。
「こんな感じ……？」
頭に（？）マークを浮かべながら、葵さんの顔を見つめる。
「あなたには、まだ無理か。まあ体験すればわかるでしょう」
彼女は肩をすくめると、尼僧が開けてくれた格子戸をくぐった。

ぼくは入り口でちゅうちょしていたが、彼女が手招きするので、しかたなく中に入った。玄関には茶道部の連中が履いて来たのだろう黒いローファーが四足、隅の方に置いてあった。その脇には竹皮を編んで作った真新しい草履(ぞうり)が並んでいる。露地草履(ろじぞうり)というのだそうだ。

部屋は八畳ほどの和室で、着物姿の若い女が四人、行儀よく正座していた。一人が床の間に近く、残り三人がその人に対面して。葵さんは下座の三人に並んで正座する。ぼくも彼女にならう。一人一人の前には、黒塗りの盆が置かれ、一本の扇子(せんす)と白い和紙が乗っていた。
「遅かったねえ、葵」
上座の人から声がかかった。
（あっ、ろくろ首！）
前髪を少したらし、残りを後ろに束ねたその人は、長い首をこちらに向けていた。学園内でこんなに首の長い人はただ一人、生徒会の会計長をしている中里美巳(なかざとみみ)。理事長を首班に、主だった者で構成する学校運営委員会のメンバーで、生徒会長や寮長とともに生徒側代表としてこの会に加わっている。ペーペーのぼくなんかより、ずうっと偉い人なのだ。なんだか近寄りがたい感じがする。
「遅れて申し訳ございません。美巳様」

葵さんは両手をついて、丁寧に頭を下げる。
すると美巳様、顔を歪めて「わっはっはっ！」と豪快に笑った。
「葵、いつからそんな他人行儀になったの？　元同級生に『美巳様』もないものだわ」
それでも葵さんは、うつむいたまま続けた。
「でも、ここは神聖なお茶の席でございます。元同級生といえども、あなた様は今や三年生。わたくしは二年。身分の違いはわきまえております」
それを聞いた美巳様、涙をにじませて身体をひねる。
「あの真面目一方の葵が、いつの間にかこんな冗談を言うようになった。病気で一年休んだとはいえ、かなり心境の変化があったのだねえ」
彼女は感心したようにうなずいてから、ぼくの方に目を移すと、「こちらが、例の新しい客人？」と聞いて来た。
葵さんがぼくの耳に「ほら、挨拶なさい」とささやく。
ぼくは状況について行けず一人ポカンとしていたが、指名されて反射的に立ち上がると、あわてて自己紹介を始めた。
「今年入学しました。立花芯（たちばなしん）です。シンは漢字で草花の『芯』を当てます。本当は『こころ』が住民票の読みなのですが、だれもそうは呼んでくれません。みんな『シン』で通しています。友達も、兄弟も、名付けた親さえも」
とたんに「わっ！」と笑い声が起こった。葵さんを除いて、みんな大口を開けてこちらを見上げている。ぼくは早く切り上げようと残りを手短にまくし立てた。
「趣味は絵を描くことと喧嘩すること。部活は柔道と美術。よろしくお願いしまあす」
言い終わると、すばやく元の位置に座る。緊張のあまり顔がぽかぽか火照ったので、盆に置いてある扇子を手に取るや、サッと開いて襟元をパタパタと扇（あお）いだ。
座の者は皆あっけにとられていたが、すぐ静かな庭園に爆笑が響き渡った。
美巳様なんぞ畳に転がって手足をばたつかせ、ヒイヒイ涙を流している。葵さんは両手を畳についたまま、真っ赤な顔をしていた。ぼくの挨拶がそんなに恥ずかしかったのだろうか。いや、よく見るとセーラー服の襟が震えている。一生懸命笑うのをこらえている姿だ。
葵さんの隣も同じような姿勢をしていた。それに、その子はどこかで見たような気がする。ぼくは首を傾けて彼女の横顔を覗いた。
「あっ、おまえ、お雪！」
和服を着て、ツインテールの髪をほどいていたので気づかなかった

が、まぎれもなくルームメイトの尾鈴美雪だ。
「なんで、おまえがここに……。華道に行ったんじゃないのか」
お雪は赤い顔で「ぐふ、ぐふ」と口元をゆるめていたが、急に真面目な顔になって、ぼくを睨みつけた。
「あんた、茶道の『サ』と華道の『カ』を聞き間違えたんじゃない。それにね、お茶会の扇子は閉じて使うものなの。あたしに恥をかかせないでよ、バカ！」
彼女はぼくから扇子を取り上げてパチンと閉じると、その先でぼくの頭をコツンと叩いた。
「えっ、扇子って、扇ぐものだろう？」
面食らって周りを見回したが、誰一人扇子を開いている者はいない。
みんなが大笑いしていると、「賑やかじゃねえ」と声がして、玄関から一人のお婆さんが入って来た。首に木綿の手ぬぐいをかけ、絣のモンペを穿いている。
「あっ、翔鶴院様」
美巳様がサッと姿勢を正した。ほかの三人もすぐそれにならう。葵さんも笑うのをやめて座り直す。
ぼくが膝を崩したまま呆然としていると、葵さんに睨まれた。
「きちんとしなさい、シン！」
あわてて正座すると、そのお婆さんは部屋に上がり込んで、美巳様の隣に座った。
「いや、畑で桑を植えていたらの、笑い声が聞こえたから来てみたのじゃが、あんな大きな声は、なん十年ぶりかのう……」
お婆さんは皺だらけの顔をゆるめて、みんなを見渡した。
「申し訳ございません！」
いきなり葵さんがガバッと頭を下げた。
「わたしの連れが、とんだ非礼をいたしました。この静かな場をお騒がせいたしましたこと、まことに恥ずかしい限りでございます」
言うが早いか、いきなりぼくの頭をつかんで畳みに押しつけた。わめいてジタバタしたが、彼女は手に力を込めて顔を上げさせない。
「翔鶴院様、この者は軽薄にして短慮。常に周りに騒動の種を振り撒いております。そこで、茶の作法でも覚えれば少しはマシになるかと思い、連れてまいりました。願いますれば、どうかこの者に侘び寂びの心をご教授いただきたく、伏してお願い申し上げます」
彼女は必死に懇願している様子。するとお婆さんのしわがれた声が聞こえた。
「これ、ヨネちゃん、乱暴はおよしなさい。かわいそうでしょうが」

「はっ、ヨネちゃん？」
葵さんのけげんな声が聞こえた。
「ヨネちゃんは、卒業するとすぐ結婚でしょうが。もっと穏やかにせんと、旦那さんに嫌われるえー」
お婆さんの小さく笑う声がした。
「翔鶴院様……？」
葵さんは驚いたのか、ぼくの頭から手を離した。おかげで「ほーっ」と一息つくことができた。
「翔鶴院様、わたしは米子（よねこ）ではありません。その娘の葵です」
彼女はまじまじと、そのお婆さんを見つめた。
「なに言ってるの。わたくしはアオイなんて知りませんよ。人をからかうのはおよしなさいね」
「翔鶴院様……」
葵さんが絶句していると、玄関の戸がそっと開いて、一人の尼僧が入って来た。黒い法衣に茶色の袈裟（けさ）。白い頭巾から覗いている面長の顔はもう若くはない。
「菖蒲尼（しょうぶに）様！」
美巳様がホッとしたような声を上げる。
尼僧はお婆さんの姿を見つけると、安堵したように上がり框（かまち）に両手をついた。
「翔鶴院様、こちらにいらっしゃったのですか。ずいぶんお探しいたしました」
ところが、お婆さんは不思議そうに顔をかしげてその人を見上げた。
「あんた、誰かえ？」
その言葉に、尼僧は「ふぅ～っ」と疲れたような溜息をもらした。
「先ほどお尋ねになりましたのに、もうお忘れですか。菖蒲でございますよ」
「ショウブ？　知らないねぇ」
お婆さんは相変わらずけげんな顔をしている。
「菖蒲でおわかりにならなければ、正子（まさこ）でございます。あなたの娘ですよ」
「正子？　あんたが、正子ですって？　そんなバカな。正子なら、ほれそこに、ヨネちゃんの隣に座っているじゃろぅが」
お婆さんは血管の浮き出たかさかさの手を伸ばして、ぼくを指差した。
みんなポカンとして、こちらに目を移す。ぼくも同じように口を半開きにしていた。
菖蒲という尼僧も驚いた様子でぼくを見つめた。だが、すぐお婆さ

んに目を向けると、困ったように首を傾けた。
「お母様、その方は正子ではありません。さあ、わたくしと一緒に庫裏へ戻りましょう」
彼女は幼子を諭すように優しい言葉をかけた。
『戻りましょう』って偉そうに言う、あんたは誰なんだい」
お婆さんは疑わしそうに尼僧をねめつける。
「なんども言いますが、娘の正子です。今は、お母様の代わりにこの院を任されております」
「任されている……。するとこの家は、あんたのものかえ？」
お婆さんは驚いたように顔を上げた。
「まさか、ここはお母様のお寺ですわ。わたくしは、ただ管理をしているだけで……」
それを聞いたお婆さん、つと立ち上がるとササササッと部屋の真ん中を横切り、尼僧の前にやって来た。そして、やおら正座して畳に手をつくと、深々とお辞儀をする。
「そうですか、ここはあなた様の家ですか。じゃあ、どうかわたくしをここに置いてもらえませんか。お頼み申します」
そう言って、なんどもなんども頭を下げる。
「お母様、おやめ下さい。生徒さんたちの前でございますよ」
彼女は座敷に上がり「さあ、早く帰りましょう」とお婆さんの肩に手を回して立たせようとする。
「じゃが、桑も植えんとのう」
老婆は嫌がって動こうとしない。
そこで尼僧はそっと耳打ちした。
「お母様、桑畑は逃げやしません。それより、そろそろマサミが帰って来る頃です。早く行ってあげないと」
「マサミ！」
お婆さんは「おお、そうじゃったぁ」となにかを思い出したかのように立ち上がる。
「マサミ、マサミ、かわいそうにのう。毎日いじめられて、泣いて帰りよるが。それも、みんなわたしが悪かったのじゃあ。男だったのに、女にしてしもうて」
そう言って、声をあげておいおい泣き始めた。
「ですから早く、お母様」
彼女は泣きじゃくるお婆さんを抱くようにして、玄関に脱いであった下駄を穿かせる。それから部屋にいる生徒たちを振り返った。
「皆様、お待たせしてごめんなさい。わたくしこういう事情なので、お茶会が少し遅れます。準備ができましたら使いの者を伺わせますの

で、今しばらくお待ちください」
彼女はそう言って、お婆さんを抱いたまま格子戸を開けようとする。それを見ていた美巳様が、あわてて玄関に走る。走りながら「お雪！」と呼んだ。
お雪はもうその時には、彼女のすぐ後ろについていた。三人でお婆さんをかかえるようにして表に出る。お雪はそのまま付き添って行き、美巳様は部屋に引き返して来た。
葵さんはこの成り行きを呆然と見守っていたが、ふと我に返ると、美巳様に向かって叫ぶように詰問した。
「美巳！　これはどういうこと？」
今度は『様』を抜かして呼び捨てにしている。
「見てのとおりよ。あの方は認知症（にんちしょう）になられたの」
「認知だって？　この前、お話しした時は、とてもしっかりして……」
「一年前でしょう、葵がお会いしたのは。その前から少し変だったけど。暮れに玄関で転ばれてね、骨折して入院されたの。それから急に悪くなられたのよ」
「そんな、あんな立派な方が……」
「しかたがないよ、なにせ脳の病気だから。記憶がどんどんなくなるの。それに判断力もね。どんな偉い人でも、赤ん坊みたいになるわ」
美巳様はため息をついて元の位置に戻った。
葵さんはまだ呆然自失の様子。ぼくはそんな彼女に、噛んで含めるように言い聞かせた。
「しかたないですよ。脳細胞は、いわばコンピューターのメモリですからね。メモリが壊れるとコンピューターは狂って来る。それと同じですよ」
「なにが、同じなの！」
葵さんはキッと振り返って、やおらぼくのスカーフをつかんだ。
「あんたの頭が狂ってるのはわかるよ。だけど、翔鶴院様のような方がボケるなんて許せないの」
「な、なんですって！」
ムカッと来て、こちらも彼女の腕に手をかけた。
「なんで、おれの頭が狂うのはよくて、あの方がボケるのは許せないんです？」
「許せないから、許せないの！」
葵さんはまなじりを吊り上げて、ぼくを睨みつける。
お互いに額をくっつけるようにして睨み合っていると、パンパンと音がして「はい、そこまで」と声がかかった。
見ると美巳様が手を叩いている。ほかの子たちも笑いながらこちら

を見ていた。ハッと我に返って、つかみ合っていた手を離す。
「なかなかおもしろい夫婦漫才だけど、残念ね、そろそろお茶会の時間よ。翔鶴院様も落ち着かれたようだし」
玄関にはいつ戻って来たのか、お雪が呆れたような顔でこちらを見ていた。

3

「では！」
美巳様は「こほん！」と一つ咳払いをした。
「そういう訳で、お茶会は菖蒲尼様が亭主になられます。客はここにいる六人です。正客は、わたくしこと茶道部副部長の中里美巳が、お詰は一年生とはいえ茶道になじみの深い尾鈴美雪が務めます」
彼女は（いいですね）と念を押すようにお雪に目をやる。うなずくお雪の顔が心持ち赤くなっていた。
「茶事には正式なものと、略式のものがあります。今回は新入生の初試みということで略式の方で行います。また湯は薄茶、茶菓子は干菓子になります」
（テイシュ？　ショウキャク？　オツメ？　なんのこっちゃあ？）
頭に（？）マークを飛ばしていると、美巳様にジロリと睨まれた。
「特に今日は飛び入りが二名います。まあ葵はいいとして、そこの案山子！」
彼女は扇子の先でピシリとぼくを指した。
「茶道の『サ』の字も知らないと見えますが、いかが？」
『いかが？』と聞かれても、その通りだから答えようがない。首をひねっていると、彼女は「しかたないね」と片手で前髪を掻き上げた。
「まあいいわ。あなたにはお雪をつけるから、よく言うことを聞いて非礼のないようにするのよ」
それを聞いた葵さん、またぼくの頭を畳に押しつけるや深々とお辞儀をした。
「ありがとうございます。この者の振る舞いにつきましては、わたくしが責任を取りますゆえ、どうかよろしくお願いいたします」
先ほど『美巳！』と呼び捨てにしたあの迫力はどこへやら、借りて来たネコのようにおとなしくなっている。
すると美巳様、「ううっ！」と身体を震わせ、意地悪そうにニヤリと笑った。
「葵に頭を下げられるのは嬉しくてゾクゾクするよ。責任を取ると言ったね。では、この坊やがなにか作法を間違えたら、あなたに罰ゲー

ムをやってもらうからね」
「バ、罰ゲーム？」
葵さんほか一同、困惑の表情になる。
美巳様はかまわず続けた。
「制服を着たまま、逆立ちで校庭を一周するなんてどう？」
「ええっ！」
葵さんの顔が青くなる。
「嫌ならいいよ。『葵はウソつき』だって言いふらすから」
「そ、そんな！」
葵さんは青くなったり、赤くなったり。さてどうしたものかと考えている。
そのやり取りに我慢できなくなったか、お雪が憤然と立ち上がった。
「それはあんまりです。葵様をいじめて、なにが楽しいのですか！」
キッ！　と上座の人を睨むその顔は鋭く、いつもの切れのいいお雪に戻っていた。
腹心の部下に非難されて、美巳様はちょっと、いや、かなりうろたえたように見えた。
「まあ、そこまではやらないよ。サディストじゃあるまいし。でも、それなりの責任は取ってもらうから。これ、葵が言い出したことだからね。お雪もそこまで言うなら同じね。共同責任よ、共同責任！」
彼女は額に皺を寄せて「ふん！」と横を向いた。
その時、ぼくたち二人をここに案内した尼僧が入って来て、お茶会の準備が整ったことを告げた。それを聞いた美巳様がみんなを見回す。
「これから茶室に向かいます。みなさんは、これまで教わった通りに振る舞ってください。ハイ、そこの案山子。扇子と懐紙を忘れない！」
彼女はぼくを一睨みしてから、滑るように玄関に向かう。その後から生徒たちが次々と立ち上がり、出口に置いてある露地草履に足袋を履いた足を通して行く。ぼくと葵さんは洋装なので白いソックスに草履をつっかけて外に出た。ひんやりとした竹の感触が足裏に心地よい。
最後にお雪がついてくる。（ははあ、お詰めとは隊列の最後。つまり、しんがりだな）と、この時、謎の一つが解けた。
飛び石つたいに歩いて行くと、待合所みたいな小屋があった。片屋根になっていて正面に壁はなく、後ろは粘土で固めてある。そこには厚い幅広の板が架かっていた。生徒たちは端から順に腰掛ける。
「ここは腰掛待合。亭主、つまり茶会の主催者ね。その方の迎えがあるまで、周りの風景を眺めながら待っている所よ」
お雪がささやくように小さな声で説明する。

庭は一面、緑の苔（こけ）におおわれていた。苔の間から、大小さまざまな古い石が顔を覗かせている。立ち並ぶ木々は奇妙にねじれ、周囲のすべてが静寂に包まれている。なんだか異界にでも迷い込んだような、妖しい雰囲気になって来た。

ぼくは桑を植えていたという、さっきのお婆さんを思い出した。

「なあ、どこに桑畑があるんだ？」

隣のお雪に尋ねる。

彼女は「しっ！」と口元に人差し指を立ててから、「ないわよ、そんなもの」と小さな声で言った。

「えっ、でも、あのお婆ぁ……いや、翔鶴院様が」

「ずうっと前にはあったと聞いたわ。でも十五年前、本校がここに移って来た時に潰したとか。あの方は、昔と今がごっちゃになってるの」

「しっ、静かに。あなたたち、私語は慎みなさい。ほら」

葵さんが腰掛の端をあごで示す。

そこには長い首をもたげて、こちらを覗っている美巳様がいた。

苔むした地面に、灰色の飛び石が木立の向こうまでくねりながら続いている。その木陰に簡素な建物が見える。あれが茶室だと、お雪が教えてくれた。やがてその方から、飛び石伝いに一人の尼僧がやって来る。

（さっきの人だ。確か、菖蒲尼様とか言ってたっけ……）

こうして見ると、なんと優雅な人か。あのお婆さんの娘なら、もう五十歳前後だろうが、まだ四十ぐらいにしか見えない。その柔らかそうな腰まわりには淡い色香が漂っていた。

菖蒲尼様の姿を認めると、座っていた客（生徒）が一斉に立ち上がる。そして、美巳様を先頭に飛び石を踏みながら彼女の方へ歩いて行く。茶室との中間ぐらいまで来た所で、お互いに立ち止った。菖蒲尼様に相対しているのは美巳様だけで、後の客たちはその後ろに連なっている。ぼくに見えるのは葵さんの背中だけだ。

すると、みんな一斉に頭を下げた。この時、初めて列の前方が見えた。菖蒲尼様も頭を下げているので、お互いに挨拶を交わしているらしい。あわててお辞儀をすると、挨拶を終えて顔を上げようとしている葵さんの背中にゴツンと頭をぶつけた。振り返った彼女にギロッと睨まれる。お雪の「きゃっ！」という笑い声が後ろに聞こえた。

菖蒲尼様は首を横に伸ばして、ちょっとこちらを覗ったが、すぐに目を伏せ、今来た道を引き返して行く。客たちは回れ右をして、今度はお雪を先頭にぞろぞろと腰掛に戻る。

ぼくは、この苔におおわれた侘びしい庭を眺めながら、今朝お雪が

話したことを思い出して、一人毒づいた。
（なにが竜宮城だ。お雪のやつ、人をおちょくりやがって。乙姫様だって？　どこにいるんだ、そんな者。ん、待てよ。少し老けているって。……まさか）
急いで菖蒲尼様の歩いて行った方に目を移したが、もうそこに彼女の姿は見えなかった。
横を向くと、お雪と目が合った。彼女はぼくの思考を読んだのか、「キキキッ」と子猿みたいな声を発すると、肩を震わせてうつむいた。
やがて茶室の方からバシャ！　と水でも掛けるような音がした。それが合図だったのか、美巳様が立ち上がり、飛び石伝いに茶室の方に歩き出した。ほかの客たちもそれに続く。ぼくも急いでついて行く。

茶室の手前に、一抱えもありそうな石の鉢が、水の涸れた小川のような所（枯流れというのだそうだ）に置いてあった。そのすぐ脇には竹の柄杓が置いてある。
先頭を歩いていた美巳様が、その前で立ち止まる。そして柄杓を右手で取ると、鉢の水をすくって左手にかけた。次に左に持ちかえ、右の手にかける。それから再び水をすくって左手に受け、その水で口をすすいだ。最後に柄杓を立て、流れ出た水でその柄を洗う。
一連の動作を終えた彼女は、次の子に柄杓を渡して茶室の方に歩いて行く。これは、さしずめ、お茶会を始める前の儀式らしい。
「ここは蹲よ。この鉢は手水鉢といって、この水で手と口を清めるの。さっきバシャと音がしたでしょう。亭主役の菖蒲尼様が、この鉢に水を入れたの」
すぐ後ろから、お雪が小さな声で解説する。
美巳様の後、一年生二人が順番に清めの儀式を終え、葵さんに柄杓が渡った。
「よおく、見てなさいよ」
葵さんは幼子に教えるように、前の三人が行った動きを丁寧にやって見せ、「わかった？」と念を押してから、柄杓をぼくに渡した。そして茶室の方に向かうと思いきや、傍に立ってジイーッと見ている。ぼくが間違えそうになったら、すぐ注意するつもりのようだ。なにせ、自分の罰ゲームがかかっているのだ。心配でしかたがないのだろう。
ぼくは額に汗をたらしながらも、なんとかその儀式をやりとげると、今度は茶室の方へ連れて行かれた。
「さあ、ここから席入。すべて、わたしのする通りにする。いい」
怖い顔で睨まれた。
（楽しいデートのはずが……）

頭痛ばかりか、目眩(めまい)までして来た。

さて茶室への入口だが、これがなんと狭い穴であることか。にじり口というそうだが、人ひとりがやっと屈んで入れる大きさだ。ぼくは葵さんがやったように、扇子を穴の奥に置き、膝をにじるようにしてもぐり込んだ。

茶室はさっきの待合よりも広く、向かいに床の間があった。そこには掛け軸があり、なにやら大きな文字がくねくねと描いてある。部屋の左手には小さな囲炉裏(いろり)のようなものが置いてあった。先に入った三人はすでに下座についており、横目でぼくと葵さんを眺めている。

ぼくが葵さんの傍までにじり寄って行くと、彼女は正面を向いたまま口だけを動かした。

「これから、床の間に行って挨拶するよ。特に足の動きには注意すること。右足、左足、間違えないように」

彼女は右足でスッと立ち上がり、左足から踏み出して、床の間まで歩き、その前に正座する。そして扇子を膝の前に置くと、掛け軸に向かって深々とお辞儀をした。それからおもむろに顔を上げると、両手を畳についたまま感じ入ったように軸の文字を見つめ、丁寧に頭を下げてから下座に向かった。

ぼくの頭は（？）マークでいっぱいだったが、それでも同じようにお辞儀をして掛け軸を見上げ、（ほうっ！）と感嘆した様子を示した。なんと書いてあるか、さっぱり読めなかったが。

それから両手を揃え、掛け軸様にうやうやしく頭を下げてから、そうと立ち上がり、右足左足間違えないように、ひたすら下座の方に退いた。無事葵さんの隣にたどり着くと、「ふうっ！」と安堵のため息がもれた。その音が意外に大きくて、思わずヒヤリとした。

最後にお雪が床の間に挨拶して、すべるようにぼくの横に座る。その流れるような動作にいたく感心していると、奥の襖が開いて菖蒲尼様が入って来た。

彼女は、まず正客の美巳様と挨拶を交わす。

「今回は、初めてお会いする方がいらっしゃいますね」

「はい、葵とお雪を除いて、お茶会は初めての者たちです。こちらの和服を着た三人が、新しい部員です」

美巳様が、お雪とほかの二人を紹介する。

「今はこれだけですが、夏までにはもう少し増えるかと思います」

「なんだか少しずつ寂しくなりますね。でも、このお茶の道はすばらしい芸術です。ここでは宗教や主義主張の違う人でも、同じ席で楽しめるのです。茶道部の人でなくてもかまいません、ぜひ参加してくだ

さい。今日は『お茶会はまったく初めて』という方もいらっしゃるようで、とてもうれしゅうございます」
菖蒲尼様は優しそうな視線を、ぼくの方に移した。
それから彼女は次の客に挨拶する。一年生の二人は初めて声をかけられたのだろう、いずれも顔を紅潮させている。次は葵さん。
「葵さん、お元気そうですね」
彼女はにこやかな顔で、そう切り出した。
「ええ、すっかり。この度はお招きくださいまして、ありがとうございます」
葵さんも懐かしそうに微笑み返す。
「こんな機会でもなければ、なかなかお会いできないですものね。久しぶりに、ゆっくりしていってください」
いよいよ、ぼくの番だ。緊張で顔が引きつる。あわててお辞儀をして、自分の名前を言った。
「初めまして。立花シンと申します。よろしくお願いします」
顔を上げると彼女は、なぜか、ぼくの顔をジーッと見つめていた。それも、かなり真剣に。
「あなたが、葵さんの新しいお友達ですか？」
「あっ、はい。新しいオトモダチです」
我ながら、ぎこちない声だ。
「ずいぶん、背が高くなったのですね」
（えっ？）
彼女の言い方に、なにか引っかかるものを感じた。
（まるで、小さい頃のおれを知っているような……）
でも、すぐ思念を断ち切って返事を返す。
「いえ、単に胴が長いだけです。さっき竹の棒みたいだと、誰かさんに言われましたよ。ハハハハッ！」
その時横合いから、その『誰かさん』の手が伸びて、脇腹をつねられた。『いて！』と声を出すのを、かろうじてこらえる。
「ゆっくりしていってください」
彼女は着物の袖で口元を押さえながら、次のお雪に移った。ぼくは額に汗が流れるのを覚えた。
菖蒲尼様は一通り挨拶を終えると、一旦部屋を出て行った。そして次に現れた時には、木製の盆を持っていた。
彼女はまず美巳様の前に、それを差し出す。中には淡い緑色の干菓子がいくつか入っていた。
美巳様は盆に両手を添えて、軽く一礼する。そして懐（ふところ）から白い和紙を出すと、干菓子を一個取って、その上に置いた。次に隣に回す。

やがて、ぼくに回って来た。みんなと同じようにお菓子を取る。それからお雪に渡そうとして、ふとその盆を眺めた。それは、ほんのりと温かみのある漆器(しっき)で、黒地に鮮やかな紅葉がとても美しい。(底は、どうなっているんだろう)と、頭の上に持ち上げようとしたとたん、脇腹をつねられた。

(な、なんだあ。二回もつねって!)

頭に来て葵さんを睨みつけた。

すると彼女は声を出さずに、唇だけを動かした。

『モチアゲルナ、バカ!』

バカと言われて、ついに切れそうになった。

『バカ、バカと言うな。バカ!』

こちらも唇だけで伝える。

それを見た葵さんのまなじりが吊り上る。

二人で睨み合っていると、肩をチョンチョンとつつかれた。振り向くと、お雪が(早く回して)というしぐさをしている。ハッと我に返って、持っている盆を彼女の前に置く。部屋の隅から、美巳様が長い首をもたげてこちらを覗っている。危ないところだった。

一通り行き渡ると、正客の美巳様がお菓子を食べ始める。すると皆、彼女に倣って神妙に手に取る。ぼくは緑色の菓子をつまむと、パクッと口の中に放り込んだ。それは甘い味を残してすぐに溶けてしまった。

美巳様は菖蒲尼様に「この菓子の素材はなにか」とか「盆の絵は誰の作品か」などと質問していたが、ぼくにはよく理解できなかった。つうか(なぜ、そんなどうでもよいことを聞くのか)と思ったりした。でも、みんなに合わせて首を縦に振り、感心している様子は見せた。

さて、いよいよお茶の出る場面になったが、これをどうやって飲めばよいのやら。お菓子の食べ方ひとつにも、面倒な作法があったのに、今度はなにがあるやら。これをクリアする自信はまったくなかった。だが、できなければ葵さんが罰ゲームにかけられる。そんなことになったら、もう彼女から相手にされないだろう。それは困る。

藁にもすがる思いで、隣のお雪に目移すと、彼女は唇だけ動かして『マネルノ』と言った。

しかたがない、みんなの一挙一動を注視することにしよう。美巳様から葵さんまで四人の動作を頭に叩き込んで、さあ行くぞ!

ぼくは立ち上がると、ソソソッと畳みの上を滑るように歩いた。菖蒲尼様の傍に行き正座すると、畳の上に置かれた茶碗を取った。右手、左手、間違えないように。

「くすっ」
小さな笑い声がした。
顔を上げると、菖蒲尼様がおもしろそうにぼくを見つめている。
「硬くならなくてもいいのよ。気楽に、気楽に」
それは、ぼくにだけ聞こえる小さな声だった。
茶碗を落とさないように、そろそろと自分の席に戻ると、お雪との間にそれを置き、手順通りに「お先に」と言った。この時、彼女が「いいえ、私が先よ」と言ったらどうしようとか、あり得ないことがチラッと頭の隅をよぎった。
前の人たちの動作を思い浮かべながら、慎重に、慎重に、ことを進める。みんなの視線をヒシヒシと肌に感じた。手が汗ばみ、声がうわずる。右手左手、注意しながら、やっとの思いで飲み終える。その淡い緑色の液体は、少しの苦味を残して、すっと胃袋に収まった。
今度は茶碗を眺める作業だ。碗の外側には、濃い緑に黄色い銀杏の葉があざやかに描かれていた。
（すばらしい！）
目の高さに持ち上げようとして、ふと思いとどまった。そうと葵さんを振り向くと、横目で睨んでいる。彼女の指が脇腹のところまで来ていた。あわてて碗を畳の上に置く。「ふうーっ」という吐息が部屋のあちこちから聞こえた。どうやら峠を越えたらしい。
すべてが終わり茶室を出た時には、膝はがくがく、足はしびれて歩くのが困難な状態だった。それでも最後の気力を振り絞り、泳ぐように飛び石を渡った。ようやく最初の待合にたどり着いたが、その間ずうっと、背後にお雪のグフグフ笑う声が聞こえた。きっと、太古の昔初めて二足歩行を始めた原人のような歩き方をしていたに違いない。
待合に戻ると、みんなホッとしたのか、これまでの上品さがうそのように、ワイワイガヤガヤおしゃべりを始めた。
「残念だったねえ」
美巳様一人が悔しがっている。
「その坊やが、必ずボロを出すと思ったのにぃ」
それを聞いて、ぼくはついに頭に血がのぼった。
「美巳様、あなたは、そんなに葵さんが嫌いなのですか。茶道をやる人とも思えません！」
すると彼女はその長い首をこちらに回した。瞬きしない目でじっとぼくを見据える。
「別に嫌いじゃないよ。むしろ私は葵を尊敬している。でも、本当はねたましいのかも知れないね。葵の困った顔を見るのが、たまらなく

うれしいの。ゾクゾクするわ」
そう言うと、彼女は懐から腕時計を取り出した。
「あら、もうこんな時間。今日はずいぶんお邪魔したようね。そろそろ帰りましょう。みんな、すぐ着替えて」
美巳様始め着物姿の四人は立ち上がって隣の部屋に移った。
襖が閉まると、そっと葵さんに尋ねた。
「ねえ、なぜ美巳様にねたまれているんです？」
彼女はギロッとぼくを睨むと「知らない」とそっけなく答えた。
「でも、あの人が……」
しつこく聞き出そうとすると、「知らないものは知らない。美巳が勝手に思い込んでいるだけでしょう」と、取りつく島もない。
やがて隣の部屋から、制服に着替えた生徒たちが出て来た。全員、元の位置に正座する。
セーラー服になると、とたんに少女に戻ったようだ。お雪はいつものツインテールに結い直していて、中学生くらいにしか見えない。美巳様だって、先ほどのまでのような威厳は感じられない。
その彼女が「こほん！」と咳払いして、「では、これにて……」と言いかけた時、玄関の戸が開いてさっきの若い尼僧が入って来た。
「お帰りのところ申し訳ありません。伊東様と立花様にお願いがあるのですが」
（イトウ、タチバナって誰？）
みんな一瞬そんな顔をした。この学園ではお互いを名字で呼ぶ習慣がないので、すぐピンと来ないのだ。
「はい、わたしとこの者ですか？」
葵さんがためらいがちに手を上げた。片方の手をぼくの頭に置く。
「菖蒲尼様が、お二人にお話しがあるそうです。別棟までご足労願えませんでしょうか」
「えっ？　それは構いませんが」
葵さんは、ぼくの都合も聞かずに答えた。
「それでは、外でお待ちいたしております」
尼僧は丁寧にお辞儀をすると、玄関を出て行った。
このやり取りを見ていた美巳様が「ほぉー」と、うれしそうな声を上げた。
「さすが菖蒲尼様、私にわからなかった坊やのミスを見ていらっしゃったんだ。二人ともこってり絞られるよ。下手したら、出入り禁止ね」
「まさか、あの方はそんな人じゃない。きっと、なにかほかの用があるのよ」
葵さんは否定したが、いくぶん声が小さかった。

「まあまあ、行ってのお楽しみよ」
美巳様は思わせぶりな顔をして、また「こほん」と咳払いした。
「それでは、これで今日のお茶会を終了します。葵と坊やを残して、これから学校の部室に戻ります」
そう言うと、彼女は一年生三人を引き連れて玄関を出て行った。
お雪は出て行く時、ぼくに小さく手を振ったが、心持ち心配そうな顔をしていた。
みんなが行ってしまうと、葵さんは「あなた、なにかミスった？」と聞いて来たが、「わからない」と答えるしかなかった。
「ならいい。さあ、行きましょう」
彼女は立ち上がって玄関に向かった。ぼくもあわててついて行く。

4

外には案内の尼僧が一人立っていた。茶道部の乙女たちは、もう寺の門を出て行ったとみえ、誰の姿も見えない。
ぼくと葵さんは彼女に導かれるまま、広い境内を奥の方へと歩いた。どこへ行くのか、建物をいくつも通り過ぎ、とうとう築地塀に突き当たった。
そこには、ぼくたちが最初に入ったのと同じような山門があり、門をくぐると古い農家のような建物があった。周囲を背丈ほどの竹垣が取り巻き、敷地には藁葺（わらぶ）きの大きな母屋と、離れらしい小ぶりの家が建っている。庭の隅には菜園があり、黒い土から幼い芽がちょこんと顔を出していた。そこに立っていると、なんだかとてもなつかしい気持が湧いて来た。
（ずうっと昔、ここに来たような……）
デジャヴというのか、周りの風景が潜在意識からなにかを呼び起こそうとしているような気がした。
「ここは住居ですね？」
葵さんが尼僧に尋ねている。
「ええ、学園が男子禁制になるまで、庭師の一家が住んでいたそうです。今でも、よそから客人が見えますと、ここにお泊めすることがございます」
「男子禁制になる……。十五年も前ですね」
葵さんは確かめるように彼女の顔を覗う。
「そう聞いています。でも、わたくしは、詳しいことは……」
尼僧はけげんな顔をして、葵さんを振り向いた。
「そうですか……では、菖蒲尼様はあの家に？」

葵さんは腰を屈めて、薄暗い母屋の中を覗くようにした。
「いえ、そこではございません」
僧衣を風に翻しながら、彼女は母屋を通り過ぎ、離れの方に向かった。やがて、その小さな家の前に立ち止る。
「ここは人が住めるようになっています。当時、庭師の御子息が自分の勉強部屋に使っていたそうです。菖蒲尼様はこの中でお待ちです」
彼女は入口の戸を小さく叩いた。やがて引き戸が横にすべって、菖蒲尼様が姿を現した。なんだか先ほどより顔つきが硬いような気がする。案内の尼僧は一礼して、寺の方に引き返して行った。
菖蒲尼様は両手を前に揃えて丁寧にお辞儀をした。葵さんも同じように挨拶を返す。ぼくもピョコンと頭を下げた。
「よく来て下さいました。どうぞお入りください。茶でも煎じます」
『茶』と聞いて反射的に腰が引けた。
それを見た彼女は「くすっ」と笑う。
「茶会ではありませんよ。ただのお茶です」
「ありがたく頂戴いたします」
葵さんが答える。
家の中はこざっぱりしていた。玄関を入ると、そこは土を固めた土間になっており、奥の方に小さな流しがついていた。土間に続いて黒光りのする板の間があり、中央に囲炉裏を構えている。その向こうには障子に囲まれた六畳ほどの座敷があった。部屋の隅にはトイレらしきドアも見える。なるほど、人ひとりが生活するのに充分な設備だ。
囲炉裏にはヤカンが吊るされ、赤い炭火の熱でシューシューと湯気を立てていた。縁にはイ草で作った座布団が三つ置いてある。菖蒲尼様は草履を脱いで板の間に上がると、その一つに正座した。ぼくたち二人も彼女にならう。ぼくの正面は菖蒲尼様。横には葵さん。囲炉裏を挟んで『コ』の字形になった。
ぼくは改めて菖蒲尼様をしげしげと眺めた。白く優しそうな顔、柔らかな物腰。まるでマリア様のようだ。いや、ここは仏教寺だから観音様と言うべきか。
彼女は慣れた手つきで白い磁器の急須に煎茶を入れ、ヤカンのお湯を移す。しばらく待って湯呑に注ぎ、まず葵さんに渡した。葵さんはそれをぼくに回す。やがて囲炉裏の縁に湯呑が三つ置かれた。
菖蒲尼様が「どうぞ」と言うので、ぼくは湯呑に手をかけようとして、ハタと困った。
（右手、左手、どっちだったかな……？）
そうっと葵さんを盗み見ると、あきれたような顔でぼくを見ていた。
「普通に飲めばいいの。お茶会じゃないからね」

彼女は湯呑を持つと、あおるようにグイッとひと口飲んだ。
「あなたって、おもしろい方ね」
菖蒲尼様の、笑いをかみ殺したような声が聞こえた。そちらに目を向けると、彼女は口元に袖をあてている。
「ええ、みんなにそう言われます。自分では、まじめにやってるつもりなのですが」
そう答えながら、横目で葵さんを見ると、こちらはうつむいて「ヒヒヒヒッ」と含むような声をもらした。
ようやく飲み終わって一息ついたところで、菖蒲尼様は「お父様はお元気ですか」と聞いて来た。
(お父様って、誰の?)
質問があまりに唐突だったので、答えあぐねて首をかしげた。
「もちろん、あなたのお父様ですよ」
その顔は、もう笑っていなかった。真剣な表情で見つめて来る。
「えっ、おれ……いや、自分の父ですか?」
「立花豊(たちばなゆたか)さんは、あなたのお父様でしょう」
「あっ、はい、確かに豊は父ですが、知っているんですか」
「ここは、豊さんのアトリエだったのです。あの方は、ここから八王子の美大に通っていました」
「えっ! じゃあ、庭師というのは?」
「もちろん、あなたのお祖父様よ」
意外な話に頭が混乱した。横から葵さんがぼくの顔を注視している。
菖蒲尼様は、後ろの手文庫から一枚の写真を取り出して、葵さんに渡した。彼女はしばらくその写真を見つめていたが、なにも言わずにぼくに回した。
淡いセピア色に変色したその写真には、三人の人物が写っていた。右の二人は、ここ舞鶴女学園の制服を着た少女。左端は紺のセーターにジーンズを穿いた青年。その男は一目でぼくの親父だとわかった。書斎のアルバムに、同じような姿の写真があったのを覚えている。
そして右端の女生徒は、ぼく。
(……なワケないか。親父の若い頃だもんな)
さらにその背景には、この家が写っていた。言葉もなく見入っていると、菖蒲尼様の声がした。
「その一番右はわたくし。真ん中が妹のマサミです」
(マサミ……マサミって、さっき、お婆さんが言っていた)
そこまで考えて「あっ!」と声を上げた。
「まさか理事長の小村正美!」
「そう、今は男のなりをしていますが、一つ違いの妹です。豊さんを、

とても慕っていました」
彼女は意味ありげな表情をして、じっとぼくを見つめた。
「でも、父がここに住んでいたなんて、誰からも聞いてない」
（親父が理事長のことを『昔の親友』と言ったのは、こういう事情があったのか。彼はこの学園をよく知っていたのだ）
親父の言動がいまいち腑に落ちなかったが、いやがるぼくを是が非にでもこの学校に入れようとした意図がわかったようで、なんとなく気持ちが落ち着いた。
「じゃ、理事長は女なのですね。なぜ男の格好なんかしているんです？」
学園の中を一人で歩いている理事長の姿を思い浮かべた。小柄な身体にいつも高価なスーツをピシッと着こなしている。完全男子禁制の女の園を闊歩（かっぽ）できるただ一人の男。それは彼がこの学園の経営者だからとばかり思っていたが。
「正美は生まれた時、ふたなりだったのです。つまり両性具有ですね。そこで手術をして男性機能を取り、女として育てました。ところが、あの子の脳は男だったのです。ご存知と思いますが、脳の構造が違えば、考え方、感じ方が異なります。男と女は、その身体ばかりでなく、思考がかなり違います。もちろん趣味や遊びも。そのせいで、子供の頃はずいぶん苦しんだようです。大人になって性転換手術を受けましたが、現在の医学では完全な男になることはできません。男でも女でもない。それが今の正美なのです。あの子の特異な思想、『この世から男を消滅させ、女だけの社会を作る。子孫は卵子同士の単為発生（たんいはっせい）で残すから、人類の存続にはなんの影響もない』は、この苦しみの中から生まれたものなのです。
話し終えると、彼女はホッとしたのか穏やかな表情になっていた。
その後、この寺の由来などをいろいろと話してくれた。ぼくは、この母親みたいな年齢の人にとても親しみを覚えた。いつまでもこうしていたかったが、すでに西日が玄関のガラス戸を通して射し込んでいる。ぼくは葵さんにうながされ、ここを辞することにした。
帰りは正門でなく、この屋敷の潜り戸から外に出た。菖蒲尼様は屋敷の外に出て見送ってくれた。
「いつ来てもいいのよ。またお会いしましょう」
彼女は、なにかが吹っ切れたような、すがすがしい顔をしていた。

5

それから葵さんと二人、お寺の築地塀に沿って南の方に歩いた。途中キャンプ場を通り過ぎたが、もう人影もまばら、芝生を敷き詰めた

緑の広場では数人の生徒が、きゃあきゃあ騒ぎながらサッカーボールを蹴り合っているだけだ。それらに目を向けながらも、ぼくの頭には菖蒲尼様の姿がこびりついて離れなかった。

気がつくと、いつの間にかうっそうと茂る森の小道に足を踏み入れていた。しばらく行くと木立が途切れて、荒れはてた西洋庭園がぽっかりと現れた。正面の小高い丘の上に、聖婚の式場、ギリシャ神殿が夕日を浴びて黄金色に輝いている。丈高い草の合間には白い大理石の石像がぽつりぽつりと顔を出していた。ミロのビーナスやメドゥーサなどもいる。その中をくねくねと続く細い道には、至る所に雑草が吹き出しており、両端には車のわだちが盛り上がっていた。

葵さんも黙りこくって、なにか考え事をしている。そのうち、いきなりわだちに足を取られてバランスを崩した。あわてて彼女を支える。

「ボーッとして、なに考えていたんです？」

抱き寄せるようにして彼女の顔を覗いたが、恥ずかしそうに笑うだけでなにも答えてくれなかった。

「でも、あれですね。菖蒲尼様って素敵な方ですね」

彼女も、あの方を考えていたのだろうと思って話題に持ち出した。

「そうぉ……」

彼女は、ぼくを横目で見ながら、黒い前髪を掻き上げた。

「わたしと、どっちが素敵？」

「さあ、どちらとも言えませんねえ」

「どちらとも言えないって。あの方は五十よ。五十のオバサンよ」

彼女の顔が険しくなった。

「葵さんは、いくつです？」

「十七に決まってるじゃない！　あなた、オバサン好みだったの？」

（おっ、いつもの調子に戻って来た。もうひと押し）

「いやそうじゃなく、『人として素晴らしい』っていう意味で」

「わたしが、ダメ人間だと言いたいワケ？」

「そんなこと言ってないでしょう。その『ああ言えば、こう言う』みたいなの、やめた方がいいですよ。だから美巳様に乗せられるんです」

「いつ、美巳に乗せられたって？」

「ほら、罰ゲームですよ。あんなもの聞き流しておけばよかったのに」

「聞き流せないでしょう。あなたが追い出されるかも知れないのに」

（別に追っ払われてもよかったのに。お茶会なんて）

そう思ったが、彼女の真剣な様子に言い出せなかった。

「ほんとうに罰ゲーム、やるつもりだったのですか」

「やるしかないじゃない。あの雰囲気じゃあ」

「逆立ちなんかできるんですか」

「簡単よ、そんなの」
「歩けるので？」
「歩けるに決まってるじゃない。校庭一周は無理だけど」
葵さんは誇らしそうに胸を張った。
「じゃあ、やって見せてくださいよ。そこまで言うのなら」
ぼくは半分バカにしたような言い方で、彼女を挑発した。
「いいよ、やってやるよ」
葵さんは草の生えていない地面を選んで両手をつく。でも制服のスカートが気になるとみえ、すぐに立ち上がった。スカートの裾を太ももの間に挟み込もうとするが、うまくいかない。そのうち、ふと自分の長いおさげに目を止めた。髪を縛っている輪ゴムを二つ三つはずす。そして大きく広げた輪っかに両足を入れ、裾まで持ち上げた。逆立ちした時にスカートがめくれるのを防ぐつもりなのだろう。
「ご期待に添えなくて残念だね」
彼女はニッと笑うと、両手を地面につけ「やっ！」と足を蹴った。始めはふらついたが、すぐ腕を伸ばして真っ直ぐに立った。
「上手い！」
パチパチと拍手する。
葵さんは（どうだ！）と言わんばかりの顔をしている。
「そのまま歩いてみてくださいよ」
注文を追加する。
「歩くの？」
下から、彼女のためらうような声がした。
「さっき『歩ける』って、言ったじゃないですか」
「も、もちろん、歩けるよ」
葵さんは両手を動かして、よちよちと歩き始めた。一歩二歩と行くうちに、身体がぐらりと揺れた。あわてて体勢を立て直そうとした時、縛っていた輪ゴムがパチンと弾けた。スカートがバサッとめくれて、お尻が丸見えになる。白いショーツの花弁から、小麦色の雌しべが二本突き出した。彼女は「きゃ！」と叫んで逆立ちをやめる。
「なにさせるの！」
葵さんはパッと立ち上がると、こっちにすっ飛んで来る。
「シン、あんたって美巳なんかより、よっぽど性悪！」
興奮した顔が目の前に来た。思わず両手を彼女の背中に回す。
「なっ！」
彼女の目がまん丸になった。紅い唇が目と鼻の先にある。ぼくは彼女を強く抱きしめながら、その唇に自分の唇を重ねた。
葵さんは抵抗しない。予想外の出来事に、どう反応していいかわか

らないのだろう。柔らかい感触が口の中に広がる。ぼくは永遠にそうしていたかった。
やがて彼女はハッと我に返ったようにぼくの手を振りほどいて、飛び下がった。そして顔を真っ赤に染めて「バカ……」とつぶやいた。

ここの日没は早い。赤い大きな日輪が、今まさに西の峰に姿を隠そうとしている。周りの木々は沈む夕日に照らされ、鮮やかな紅色に染まっていた。葵さんの姿も女神のように輝いている。
ぼくは優しい言葉をかけようとして、彼女に近づいた。そうっと手を取り指と指をからませる。
が、その時いきなり腕を取られた。あっと思う間もなく身体が宙を回転し、地面に叩きつけられた。背中に激痛が走る。（投げられた）と気づくまでに数秒かかった。地面から見上げると、彼女は（してやったり！）という顔をして、パンパンと両手の埃を払っている。
「な、なにするんですか。いきなり！」
跳ね起きて直ちに抗議する。
「ふん、これでおあいこ。わたしを口説きたかったら、卑怯な真似はしないことね。この女たらし！」
「女たらし？　おれ、あなた以外に好きな人いませんよ」

彼女がなぜそんなに怒っているのか、理解できなかった。
「うそ、うそ、お茶の席で、あなた見てたじゃない。着物を着てる子の胸とか、腰とか」
「そりゃ、目に映るんだから、しょうがないじゃないですか。そんなんで、『女たらし』なんて言われちゃかないませんよ」
「へーえ、そうぉ、目に映るだけね。映らないところまで、想像してなかった？」
「えっ、そんな。それは、その……」
「してたんでしょう！」
彼女は両手を腰に当て（ほら、ごらんなさい）とあごを突き出す。
「それに、初めてじゃないね。つき合っている子がいるんじゃない？」
（うーむ、鋭い。女の勘ってやつか）
「まあ、中学の頃はいましたよ。でも、別れて今では音信不通です。ほんとうに。神に誓って」
ぼくは両手を合わせて、神様（特定の神ではない）に誓うポーズをとった。
「ふうん、それってどこまでいったの？　Bとか、Cとか」
「なあんだ、嫉妬してるんですか。相手は中学生、ほんのガキですよ。せいぜい手を繋ぐ程度です。プラトニックですよ。はっはっはっ！」

「そうぉ、それにしちゃ、さっきの、慣れてるような気がしたけど」
「キスなんて誰でもできます。テレビや映画で見てるじゃないですか」
「そう、まあいいわ、信じましょう。で、その子とどうして別れたの？」
（なんてしつこい人だ。でもここは肝心。これからも起こり得ること）
「それは、自分が女の身体だからです。彼女は結局、本物の男になびきました。別れの言葉がこうです。『やっぱり男の人がいいの。だって、あなたとは結婚できないでしょう』って」
　葵さんの黒い大きな目が、ぼくを見つめている。
「それでいいのかも。女は子を産むのが最大の幸せですから。でも、自分には産ませてあげられない。卵子同士の掛け合わせで子供を作れる単為発生という技術があるそうですが、これが世間に認められることは決してないでしょう」
「結婚や子供だけが人生じゃないよ」
　彼女は怒ったような顔で言い返した。
「中にはそういう人もいるでしょう。でも、ほとんどはそうじゃない。あなただって、きっと子供がほしくなる」
「だから、なんなの。先のことなんてわからないよ。わたしは今が大事。今こうしてあなたといる。これだけでいいの」
　葵さんの真剣な目がぼくを見上げる。
（これって、告白……）
　思わぬ展開に心臓がドキドキした。ぼくは片手でそうっと葵さんの手を取り、もう一方を肩に回して抱き寄せた。
　彼女は半分目を閉じ、されるがままになっている。その赤い唇にぼくのを重ねようとしたまさにその時、〈ピピピー　ピピピー〉と無遠慮な音が響いた。
　音は葵さんのスカートから聞こえている。彼女はあわててスカートのポケットから白い携帯電話を取り出した。それは『学内ケータイ』というやつで、学校で働く大人や生徒会役員などに配られている。学園の中には、一般の携帯電話やスマホなどは持ち込み禁止なのだ。
〈葵、なにしてるの！　生徒会が始まるよ〉
　声は副会長の美里（みさと）様だ。かなりイラついている様子。愛嬌のあるタヌキ顔を真っ赤にして怒っている彼女の姿が目に浮かぶ。
「あっ、忘れてた！」
　葵さんは、たちまち現実に引き戻されたようにうろたえた。
〈忘れてたぁ？　書記のあなたが、そんなんでどうするの。みんなもう集まってるよ。葵、あなたシンくんとのデートでのぼせてんじゃない。えっ、どうして知ってるかって。美巳が教えてくれたからよ。彼女、今ここで手を叩いて笑ってるよ。いつまでも、いちゃついてんじ

やないの。すぐ来てよ。すぐ!〉
今までのいい雰囲気が、たちまちどこかへ吹き飛んだ。
「シン、ごめん……」
葵さんが済まなさそうに見上げる。ぼくは気が抜けたような表情をしていたに違いない。
「いや、いいです。早く行ってあげて。みんな待ってるようですから」
すぐ気分を変えて愛想よく彼女をうながす。
「じゃあ、ここで」
葵さんは今にも走り出そうとしていた。あわてて彼女の腕をつかむ。
「ねえ、来週も会えませんか。二人だけで」
ぼくは真摯な気持で彼女を見つめた。
「いいよ。どこで待ち合わせる?」
「それじゃあ、あそこ。あのメドゥーサの前。午後一時に」
ぼくは頭にうじゃうじゃ蛇を宿らせたメドゥーサの像を指差した。
「変な所で待ち合わせるのね。そのうちヘビ女になって化けて出るよ」
「葵さんの幽霊じゃ怖くないですよ。つうか、毎晩待ってたりして」
「おお、言ってくれるじゃない。今夜さっそく夢に出るから。寝ぼけて寮の中、走り回らないでよ」
彼女は手首を幽霊のように下に曲げて「コワイゾー」とおどした。
「では約束ですよ。遅れたら罰ゲーム。いいですね」
「わかった。あなたこそ遅れないでよ」
葵さんはそう言い残すと、セーラーカラーをひるがえし、スカートの裾をバタつかせながら、森の小道を駆けて行った。

（第二話へ続く）

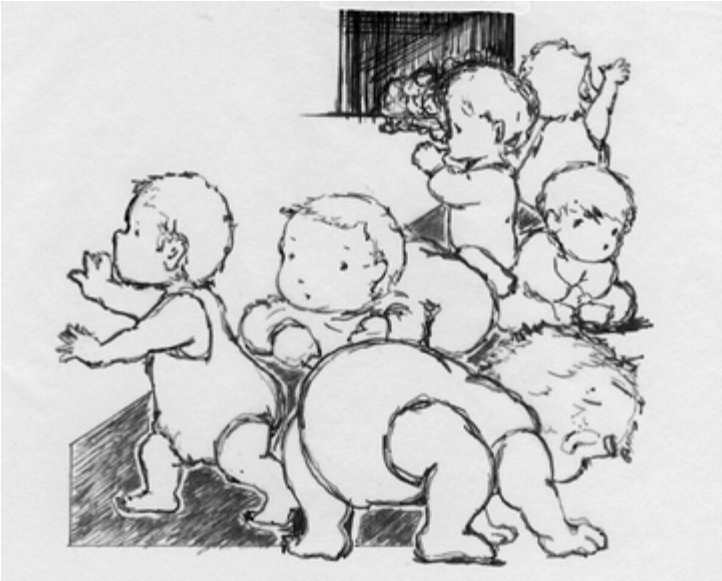
印旛文学の会　会員名簿

（あいうえお順）

いんば　華子　bulldog_dolla_mon@hotmail.com
香取　淳　katorijun27@gmail.com
唐瀬　光　effect_fact_mouth_karase@yahoo.co.jp
中川　とら　nakagawatora1@gmail.com
畑中　康郎　ktakasug@am.em-net.ne.jp
土方　杏　nykkmgs@moon.email.ne.jp
（イラスト）
高橋より　junko328p@softbank.ne.jp

アプとズコ（Appu & Zukko）　―第五回―

香取　淳



《前号までのあらすじ》

ときは二五世紀、舞台は下北半島とその南部の地域。およそ三百年前に勃発した世界戦争で、人類は地上から消滅した。世界中の主要都市に原水爆が投下されて、おびただしい数の人間が命を落としたのである。戦争が終結した後も地上は放射線汚染のために、人は住めない状況が続いた。僅かに核シェルターや洞窟に逃げ込んだ人たちが、地下に居住区を建設して細々と生き残った。

時を同じくして、惑星の爆発で住処を失った宇宙生物のイカタック星人が、下北半島の陸奥湾沿いに到来した。イカとタコを合わせたような風貌の侵入者たちは着陸した土地に『イカタックシティ』という首都を築き、そこから地上のいたるところに新たな都市を建設していった。

核戦争の終結から四半世紀ほど経過して、地上の核汚染が収まってくると、地下に潜んでいた人間たちが地上に現れた。しかし、すぐに人間はイカタック星人に捕えられて、今では羊のようにおとなしい「ホサピ」という家畜に品種改良されていた。

ホサピには労務やハウスキーパー、ナースなどの役割があり、それぞれ決まった色の服があてがわれる。中にはエンタテイメント用のホサピもいて、それらには紫色のコスチュームが与えられた。イカタッ

ク星人はギャンブルを好み、競馬ならぬ『ホサピレース』が盛んであった。そのレーサーとして、十歳のときにパーリオ夫妻に買い取られたのが「アプ」と「ズコ」である。通常、ホサピは十五、六歳までホサピの増産所で家畜としての躾や訓練を受ける。しかし、エンタテイメント用は十歳から取引が可能で、買い取られたホサピには特殊な技能や芸が仕込まれた。

飼い主のパーリオは現在、イカタックシティにあるホサピ増産所の理事長の職にあるが、かつてはホサピの品種改良を手掛ける有能な技師であった。ホサピレースが大好きなパーリオは、「足が速くて、ここぞというときに勝てるホサピを」と強く望んだ。そして、イカタック星人の掟を破って、品種改良（遺伝子操作）を施さないアプとズコを作り出したのである。

アプとズコは、最初に出走したホサピレースで期待通りにワンツーフィニッシュの好成績を収めた。レースが終わった夜に、パーリオは密かに二人を食糧倉庫に連れて行き、出生の秘密を明かした。そして、二人にホサピに成りすまして生きるように命じる。イカタック星人はもとより、仲間のホサピにも気づかれないようにと。そのパーリオの命令を忠実に守る代償として、アプとズコには自由が与えられた。

アプとズコはトレーニングの合間に、谷川の奥に地底湖がある洞窟を発見する。二人が恐る恐る中に入ると、そこには年老いた老夫婦の天原源蔵と千佳が『最後の人間』として生き残っていた。老夫妻は生きる希望も目的もなく、心身ともに衰弱し切っていた。しかし、アプとズコに出会った二人は、生きる希望と活力を取り戻す。老夫妻は、幼い二人に読み書きや人類滅亡の歴史を教えながら、イカタック星人から地球を取り戻す計画を練って、一歩一歩実行に移していく。

最初に手掛けたのは、アプとズコが、イカタックシティにあるホサピの増産所に潜入することである。シーズンオフの冬場に、アプとズコはパーリオに頼み込み、スポーツ施設が充実した増産所で合宿することを願い出た。首尾よく増産所に入り込んだ二人は、トレーニングの空き時間に、増産所のホサピの育児を手伝うことになった。育児のかたわら、増産所の中をくまなく偵察した二人は、ホサピの品種改良のからくりを突き止める。

冬季の合宿から戻った二人は、地底湖のある洞窟に通い、老夫妻と共に作戦を練った。そして二人は、次の冬に増産所を訪れたとき、人間を家畜化する遺伝子操作を阻止して、千人を超える『人間の子』を作り出すことに成功する。

増産所では年に一万頭のホサピを地上のあらゆる都市に出荷していた。その増産所の巨大な乳児舎や幼児舎にはおびただしい数のホサピ

の子が飼育されている。その中から人間の子を選び出し、イカタック星人に人間であることを見破られないように育てるにはどうしたらよいか。さらに、千人もの子たちに言葉や文字を教えるためにはどうしたらよいか……、アプとズコには難題が待ち受けていた。

12

アプとズコは紫色のジャージに身を固めて宿舎を飛び出しました。下北半島の冬は厳しくて、寒さというより痛みが首や手足に突き刺さってきます。その寒さを吹き払うように、二人はテンポの速いピッチ走法で増産所に向かいました。パーリオの仕事場である理事長室と駐車場を繋ぐ廊下もまた冷え冷えとしています。二人は素早くハウスキーパー用の黄色い衣装に着替えて、増産所の玄関に入ります。

真っすぐな廊下を突き当たりまで進み、妊婦棟と周産期棟とのあいだを通り抜けました。二人はまず、手前にある乳児舎の中を覗いてみます。横一列にベビーベッドが三十ほど並び、その列が遥か先まで続いています。おびただしいベッドの間には、黄色い衣装のホサピが何頭もいて、乳児にミルクを飲ませたり、オムツを取り替えたりしていました。

「三月に離れたときと、何も変わってはいないわね」

アプが、隣に立つズコに言いました。

「うん、でもこんなにたくさんの子が、毎日産まれてくるんだ！」

ズコが、感動を込めて答えます。

「生まれてきたって、思考力や感情も抜き取られた家畜よ。イカタック星人には好都合でも、惨めな子たちだわ」

アプが表情を曇らせて言います。

「でもね、あの子たちは違うよ！」

ズコはそう言って、体の向きをくるりと変えました。そして、乳児舎の隣に立つ幼児舎へと向かいます。アプも彼の後を追い、二人は乳児舎の先に並び立つ体育館のような建物の一つに入ります。そこは乳児舎とは違って、入口の近くにベビーベッドは見当たりません。広いフロアの真ん中に申し訳程度の遊具が置かれ、這い這いをする子や、よちよち歩きの幼児が数え切れないほど遊んでいます。その数は数百人、いや、もっと多いかも知れません。

「アプ、この子たちの生年月日を調べよう」

二人は近くにいる子を抱き上げて、耳たぶの後ろに刻まれた刺青を調べます。アプが抱き上げた子には、IC2413.11.23.08とあります。ズコの膝にまとわりついてきたよちよち歩きの子はIC2413.11.03.21、

次に彼が抱き上げた子はIC2413.11.17.29でした。
「アプ、みんな十一月生まれだ」
「そのようね、私が調べた子もみんな十一月だわ」
「この子たちは今月で満一歳、ということはいるんじゃない？　僕らの仲間が」
　ズコに問われて、アプはポケットからメモ書きを取り出しました。
「最初は八月二九日、最後は一二月六日になるわ。予定日が一、二週間ずれることもあるから、八月中旬から一二月中旬ということになるかしら」
「ふーん、アプは詳しいねぇ」
「千佳婆さんから教えられたの。女の子だから予定日の計算方法は覚えておきなさいって」
「そうなんだ、納得。とすれば、ここにはかなりいるわけだ」
　ズコは、足もとに這ってきた子を抱き上げ、頬ずりをしながら言います。
「どれどれ君はどうですか？　十六日生まれの七番目。賢そうだから、仲間だよね、きっと」
　二人は、マットを敷きつめた床に座り込み、しばらく幼児たちと戯れていました。広い建物の左右には、高さが三十センチほどの長テーブルとその半分の高さの腰掛けが奥に向かって連なります。テーブルの長さは三メートルほどあるでしょうか。恐らく食事の時には大勢の子たちがテーブルをかわいらしく囲むに違いありません。長テーブルの後ろにはベッドが並んでいます。しかし、それはベッドと言うより巣穴に近い形をしていました。左右の壁に向かって緩やかに傾斜したスロープに、ホサピの子たちが潜り込むのに程よい穴が五段になって連なっています。その巣穴が建物の奥まで、百個ぐらい並んでいるのです。
「ふーん、五段×百で五百人、左右で千人の収容能力か」
　ズコが、蜂の巣を連想させる寝穴を眺めながら言います。
「入口の近くと奥には手洗い所やシャワー、所々に子供用のトイレもついているわ」
　アプとズコは、この施設に何度か来たことがあります。しかし、いつも足早に通り過ぎて、建物の中を丁寧に観察したことはありません。改めて見直すと、間口が四十メートル、奥行きが六、七十メートルはあるでしょうか。その建物の中には、いろいろな設備が設えてあったのです。
「この先は、十月生まれの建物かしら？」
　アプは、幼子のあいだをかき分けるように奥へと進みます。ズコも

幼児たちの頭を撫ぜたり、柔らかい頬に触れたりしながら、彼女の後に続きます。突き当りの板戸を右手に開けて、二人は短い渡り廊下から隣に聳え立つ建物に入りました。

二番目の建物の中も、最初の施設とほぼ同じ構造です。軟らかなマットの上では、数え切れないほどの幼児が遊んでいました。大抵の子はよちよち歩きで、這い這いをする子は幾分減っているようです。

「オーよしよし、いい子ですねー」

ズコが、膝に掴まってきた子を抱き上げます。

「僕は男の子ですねー。十月十五日の三番目ですか」

その男児を床に降ろすと、ズコは次の子を抱き上げます。アプも床に座って、周囲で遊ぶ子の耳たぶの後ろを観察しています。そして、「十月十三、二番目」、「十月ゼロ四、十一番目」、「十月二七、九番目」と節(ふし)をつけて歌うように読み上げます。

「アプ、もういいよ。みんな十月生まれだから」

「私ね、この子たちの多くは、きっと仲間だと思うわ」

「どうして？」

「だって一月から二月にできた子たちでしょう。その頃に集団でアレさせた日が一番多かったから」

アプが、少し恥ずかしそうに言いました。

「そうかぁ、アプの記憶力は凄いね」

「だって、毎回、カップルの数をメモしていたもの」

そういって、アプも気恥ずかしい表情を隠すかのように、足もとにいた子を高く抱き上げました。

短い廊下でつながった次の建物には九月生まれの子たちが収容されていました。さらに、その奥には八月生まれの子たちです。

「さっきの話だと、ここまでだね」

「そうよ。この中から、早く仲間を見分けなければ」

「アプの気持ちは分かるけど、無理だ。みんな同じに見えるもの」

ズコも嘆かわしい声を出しました。

二人は八月生まれの施設をめぐった後で、九月生まれの建物に引き返します。さらに、幼子にぶつからないよう注意しながら、十月生まれの建物に入って行きます。昼食時間になったのでしょうか、黄色い服のホサピたちが手押し車でプラスチックの箱を運んできました。その大きな箱の中には棒状に固められた昼食が入っていました。

フロアの真ん中で幼子たちと遊んでいた保母役のホサピが、幼子たちを左右のテーブルに集めています。そして、箱の中からソーセージに似た灰色の棒を取り出し、幼子たちに渡しました。行儀のよい子はテーブルの椅子にちょこんと座ってかじりつきます。しかし、大抵の

子はテーブルを離れて歩きながら、あるいは床に座って食べています。
「食べさせるのが大変だから、固形食か」
ズコが立ち止まって言いました。
「多分、ソーセージのようなあの棒の中には、成長に必要な栄養が含まれているんでしょうね」
そう言いながら、アプは箱に近づき、棒状の昼食を取り出してテーブルに並べます。握った棒を噛みきれない子もいるようです。そのような子には、保母のホサピが手を添えて一口の大きさに千切って与えています。棒状の主食のほかには、チューブに入った液体もあるようです。棒を食べ終えた子には、チューブが与えられます。ズコも、チューブの飲み口の栓を千切って、近くにいた子の小さな手に握らせました。
しばらく一歳と一カ月になる子たちの食事を手伝っていた二人は、幼児舎の出口に戻ってきました。
「十二月生まれはまだ乳児舎だけど、その中にも何人かいる計算だよね」
ズコがアプに問いかけました。
「十二月は六日生まれまでだから、いるとしてもわずかよ」
アプが、先ほどのメモを取り出して答えます。
「これから、その子たちも見に行こう」
そう言うと、ズコは隣の乳児舎に向かって駆けだしました。アプは表情を変えて、その後を追います。
「ズコ、待って！　速すぎるわ！」
「何で、ゆっくりだろ」
「バカねえ、ズコはレーサーじゃないのよ」
「あ、そうか！　ハウスキーパーだったね、いまは」
「当たり前でしょ！」
アプに諭され、ズコはスピードを落としました。そして通路をノロノロとした鈍い動きで乳児舎に近づきました。
乳児舎の妊婦棟や周産期棟に近い建物には新生児が収容され、成長するにつれて奥のベッドへと移動してゆきます。そして、六ヶ月を過ぎると診療所を挟んでUの字形に建てられた向かい側の棟に移り、誕生日前には新生児のベッドの隣の位置まで戻ってくる仕組みです。アプとズコは、その誕生日前、生まれて十一ヵ月になる子たちが収容されている施設に入って行きます。
「ここはまだ、這い這いの子が多いね」
ズコが、ベッドに取り囲まれた床を見渡して言いました。
「遊べるスペースも狭すぎるようね」

「ウン、中に入って行くのはすこし気が引けるな」
ズコは、入口の近くに立ったまま躊躇しています。
「もうすぐ隣に移されるんだから、無理することはないわ」
アプもそう言って、ズコの袖を引っ張ります。二人は体の向きをゆっくり変えて、乳児舎の建物を出ました。
理事長室と駐車場とを結ぶ暗い廊下で、アプとズコは紫のジャージに着替えました。何時ものことながら、理事長のパーリオは不在です。二人は、外に出ると勢いよく体育センターに向かって走ります。広大な体育センターの中では、二つのグループが授業を終えて引きあげるところでした。一つのグループは小学五、六年生ぐらいのホサピでしょうか。緑の服装の教師役の後を、白い服の生徒たちが四、五十頭、鈍い動作で歩いて行きます。もうひとつのグループは、小学二、三年生ぐらいで、隊列から遅れた児童のお尻を、緑のホサピが押すように出て行きます。
アプとズコは、児童たちが立ち去った広いフロアに入ります。最初に入念な屈伸運動をして、フロアをゆっくり走りだします。ここではさほど気を使う必要はないものの、それでも監視カメラは廻っています。ホサピに似せたフォーム、アプは首をグルグル回しながら、ズコは首と肩を左右に揺らしながら走ります。二人とも十歳のときから練習してきたので、いまでは無意識にそのようなフォームで走れるのです。
「ねえ、ズコ。何から始めたらいいのかしら？」
アプが、となりを走るズコに話しかけます。
「まず、ターゲットは幼児舎の入口から五つの建物」
「そう、その大半は九月から十一月生まれの部屋にいる」
「だから、その中から見分けること、仲間たちを……」
二人は息を切らせながら、思いつくことを呟きます。
「見分けること、分けること。区別すること、自分と他人とを……。そうか、名前、名前がいる！」
ズコが、小さな声で叫びました。
「そうよ、名前だわ！」
アプも、息を詰まらせ同調します。
「だけどアプ、大変だよ。千人もの名前をどうしたらいい？」
ズコが、肩をアプ側に大きく揺らして訊きます。
「いまあるのは耳たぶの後ろの刺青だけよ」
「ウーン、生年月日と生まれた順か」
「さっき私、節（ふし）をつけてやってみたのよ。ゼロ九、ゼロ一、ゼロ一さん。十、ゼロ五、十三くん……、これじゃ、ちょっと」

「ウーン、難しい」
ズコも困って言葉が出ません。二人は無言のまま、体育センターのフロアを何周も何周も走りました。

次の朝、いつもの場所で黄色い衣装に着替えたアプとズコは、幼児舎に向かいます。心は、「もっと早足で」と急くのですが、そうするわけにはいきません。ホサピの動作は緩慢で、歩き方もぎこちなく……、という事情がありますので。
「アプ、僕は昨夜、いいことを思いついたよ」
「なに？　それって」
アプは下を向いた姿勢を崩さずに答えました。ホサピの場合、仲間同士で話すことは殆どなく、話す言葉の数も乏しいのです。
「ここではちょっと目立つから、建物に入ってから話すよ」
ズコも俯いた姿勢で応えながら、妊婦棟と周産期棟の間を通り抜けました。
「アプ、乳児舎を覗いていく？」
「そうね、まんべんなくお手伝いを……、というスタンスが大切かも」
そう言ってアプは、ズコと共に乳児舎の建物に入りました。今朝もまた、周産期棟から新生児が運ばれてきたようです。赤い服のナースホサピが、黄色い服の保母たちを集めて申し送りをしていました。その光景を横目で睨みながら、ベッドの間を一巡した二人は、乳児舎を出て幼児舎に入ります。
「どの部屋から始める？」
アプが、ズコの顔を見て訊きます。周囲には黄色い服を着た保母役のホサピが沢山働いているので、アプとズコの動作はもう目立つことはありません。
「生まれた順では八月だけど、九月からかな」
「そうね、九月の部屋には仲間がいっぱいいるわね」
二人は、建物の連なりの三つ目、一歳と二ヶ月を過ぎた子たちがいる部屋に向かいました。少しでも早く生まれた子の方が、人間とホサピとの見分けがつきやすいのではないかと考えたのです。
「さっき、いいことを思いついたって言ったわね」
「ウン、名前さ。千人の子に千個の名がすぐにつく」
「本当に？」
「ああ、簡単な方法を編み出したから」
「でも、つけたってすぐに忘れてしまうわ、とても覚えられない」
「それが大丈夫。一度つけたらアプも本人も忘れはしない」
「そんなにうまい話ってあるかしら？」

二人は短い廊下を渡って三番目の大きな建物、九月生まれの子たちがいる部屋に入りました。目の前のフロアにはよちよち歩きの子が、何人もいます。歩き始めて日が浅いため、両手を広げてバランスを取りながらの歩みです。ズコは、膝に掴まった子を抱き上げて言います。

「これから君に名前を付けてあげるからね」

そう言ってズコはポケットから小さなカードを取り出しました。

「九月二十一日の九番目ですね。それでは君の名前をこれから発表します、ジャジャジャジャ、ジャーン」

「ズコ、もったいぶらないで！」

「ハイ、君の名はナリセ、男の子だからナリセくんです」

そうズコに呼ばれても、幼子はよだれを流して、キャッ、キャッと奇声を上げるばかりです。

「ナリセ？　その名前が何故、私にも分かり、覚えられるの？」

アプが不満顔で訊きます。

「ウン、昨夜考えたんだけど、このカードがあれば簡単さ」

そう言ってズコは、手のひらに載せたカードをアプに見せました。

「この子たちの刺青から、生年月日と同じ日の生まれ順が分かるよね。でも、数字の羅列では長すぎるし音（おん）も似ている。だからこのカードのように、月は英語、誕生日はあいうえお、生まれ順はいろは……に変換するんだ。それで幾つかのケースに当てはめてみたけど、月が頭にくると名前の区別がつきにくくなるから、生年月日、生まれ順、生まれ月の順にすれば良いことに気付いたわけ」

誕生月	誕　生　日			同一誕生日の順番			
8月	1　あ	11 さ	21 な	1　い	11 る	21 な	31 け
Aug ~~お~~あ・う	2　い	12 し	22 に	2　ろ	12 を	22 ら	32 ふ
9月	3　う	13 す	23 ぬ	3　は	13 わ	23 む	33 こ
Sep せ・ぷ	4　え	14 せ	24 ね	4　に	14 か	24 う	34 え
10 月	5　お	15 そ	25 の	5　ほ	15 よ	25 ゐ→じ	35 て
Oct お・く	6　か	16 た	26 は	6　へ	16 た	26 の	36 あ
11 月	7　き	17 ち	27 ひ	7　と	17 れ	27 お	37 さ
Nov の・べ	8　く	18 つ	28 ふ	8　ち	18 そ	28 く	38 き
12 月	9　け	19 て	29 へ	9　り	19 つ	29 や	39 ゆ
Dec で・	10 こ	20 と	30 ほ	10 ぬ	20 ね	30 ま	40 め
~~せ~~ディ			31 ま				

（ズコが考案したカナ文字への変換カード）

ズコが表の見方を一気に説明しました。そのアイディアに感心して、アプは膝下にいた子を抱き上げて言いました。

「この女の子は九月十八日の四番目よ、どうなる？」
ズコはカードを見ながら一字ずつ読み上げます。
「あなたの名前はつ・に・せ、ツニセです」
「フーン、カードの誕生月の欄に二つの文字があるのは？」
「ウン、三文字の語尾はあまり重要ではないから、ゴロが悪い時は変えてもいいことにする。また、八月の**お**と十月の**お**がダブってしまうから、八月は**あ**に、同じく十二月の**せ**は**ディ**に、さらに生まれ順の**ゐ**は使われていないから**じ**に変更、という訳さ」
「フーン、よく考えついたわね」
「ウン、僕はこんなことが好きなんだろうな。朝まで寝ないで考えたんだ」
「この変換表を使えば私たちの名前もできるかしら」
「できるさ、やってみる？」
「じゃ、私の名前は？」
そう言ってアプは右手で髪を掻き上げ、耳たぶの後ろをズコに見せます。
「西暦二三九九年十一月二七日十一番目ということは、ひ・る・の、ヒルノですね」
「変な名前。でもアプとかアプ号よりはましかもね」
「僕の名はどうなるのかな、自分で訊くのは変な話だけど」
「それでは、私、ヒルノが付けて差し上げましょう」
ズコの耳たぶの後ろには、青黒くて小さな文字で IC2400.01.14.13 と刻まれています。
「**せ・わ**、までは決ったけど、一月が表にないわ」
アプは、最初の二文字を発音した後で詰まってしまいました。
「一月は Jun. だから**ジャ**かな」
「そうか、ズコの名前はセワジャ、セワジャでーす」
「セワジャかぁ。悪くはないな。それにイカタック増産所の IC を付ければ、僕は、アイシー セワジャ ということになる」
「私は、アイシー ヒルノという訳ね」
「うん、ここにいる子たち全員に名を付ければ、みんなアイシー姓の兄弟か親戚のような感じになるね」
「でも、私はアプ。ちょっと悲しいな」
アプが、顔をゆがめて言いました。
「だったらアプ、僕らも名前を変えようよ」
「ズコ、それは駄目、私たちはホサピなのよ。もし、ホサピでないことがばれてしまったら、その場で殺処分されてしまうの。それを忘れちゃだめよ、ズコ！」

「そうか、名前は封印、封印だね」
「そうよ、私たちがホサピの真似をしなくてもいい日が来るまでは、固く封印するしかないのよ」
そう言ってアプは近くの子を抱き上げ、名前を付けます。名前が決まると、その名で何度も呼びかけ、「私はアプ、アプお姉さんだから覚えてね」と自分の名を教えています。ズコはカードをもう一枚用意していたので、そのカードで抱き上げた子に名を付けます。そして「僕はズコ、ズコだからよろしく」と語りかけました。

朝から午後の三時頃まで増産所で子育ての手伝い、その後は体育センターでトレーニングを積む日が続きました。アプとズコは増産所では目立たないように振る舞いましたが、仲間のいる幼児舎では行動を変えます。床のマットに座り込んで、近くにいる子に話しかけます。
「あなたのお名前何かしら？　チホセ、チホセ、チホセちゃん。私はアプ、アプですよ」
彼女はしばらく目の前の子に話しかけて、抱き締めたり、よちよち歩きに歩を合わせたりして遊びます。しばらくすると相手の子を変えて「アリセ、アリセ、あなたはアリセ。私はアプ」と身振り手振りで話しかけます。

フロアの少し離れたところでは、ズコが幼子と遊んでいます。やはりマットに座り込み、近くの子に、ウノセとかネハセとか名を何度も呼び掛け、自分の名を教えます。
アプとズコは、一時間ほど九月生まれの部屋で過ごしました。二人合わせて百人近くの子たちと遊んだでしょうか。少し疲れも感じますが、幼子はかわいらしいし、この子たちが仲間になる期待もあります。ふたりは隣の十月生まれの建物に入り、再び幼子に話しかけます。
「あなたはアイオ、女の子だからアイクの方がいい？　そうね、アイクにしましょう」
二人は、幼子たちにまんべんなく名前を覚えさせるように、マークした建物を順繰りに回りました。

すぐに年が明け、西暦二四一五年を迎えました。アプは既に十五歳、ズコももうすぐ同じ歳の誕生日を迎えます。しかし、そのようなことは気にも掛けず、アプとズコは子育てに夢中でした。かわいらしい幼子との遊びやその後のトレーニングで充実したな日々を送っていました。ただ、宿舎から増産所までの片道二キロ余りの道のり、そのランニングが寒くて辛く感じられるときもありました。とくに、吹雪いたときのランニングは大変です。寒さに加え、吹雪で視界が閉ざされて

しまうこともあります。色一色に塗り潰された世界で、方向を間違えたら命も危くなりかねません。アプとズコはそんなとき、互いに手をつなぎ合って吹雪に立ち向かいました。

その厳しい下北の寒さも幾分和らぎ、彼岸が近づいてきました。明日で冬季合宿が終わり、パーリオの屋敷に戻る日がやってきました。アプとズコは幼児舎のマークした部屋に入り込み、成長が著しい子たちと遊んでいました。「高いたかい」をしていた子を床に下ろしたアプに、しっかりした足取りで近づいて来る子がいます。

「あーぁ、あーぁ」

その子は、舌足らずの声を掛けてきます。

「そうよ、あーぷ、アープ、私はアプよ、アプです」

そう言いながらアプは、その幼子を抱き上げました。

「あなたはチホセ、チホセちゃんだわね」

アプは、うろ覚えの名に間違いがないか、幼子の耳たぶの後ろを見て確かめます。

「ちぃー、ちぃー」

「そう、チホセ、あなたはチホセ、チホセちゃんでーす」

アプは、自分の顔を指さして「アプ」、次に幼子の鼻先に指を当てて「チホセ」と何度も繰り返します。幼子もアプに合わせて「アープ」、「チィーセ」と口真似をしています。

「チホセちゃん、あなたは間違いないわね。早く大きくなるのよ」

そう言って、アプはその子を強く抱きしめて床に下ろします。同じフロアの奥では、ズコが同じように名前を教えていました。

「コナセ、君の名はコナセ。僕はズコ、ズコですよ。コナセちゃんはもう一歳半です。大きくなりましたねー」

二人はこの冬最後の日も幼子たちと共に過ごして、夕方近くに体育センターに移動しました。紫のジャージ姿で道路を駆けながらアプが言います。

「だいぶ分かってきたわね」

「ウン、僕らに関心を示す子は、まず間違いないと思うな。口真似で名前を覚えたり、いろいろなことに興味を示したりするから」

「でも、来シーズンまで会えなくなってしまう、さびしいな」

「うん、三ヶ月と少しでだけでは短すぎるよ」

「そう言ったってズコ、明日からはパーリオ様のお屋敷よ」

「仕方ないさ、逆らうことはできないもの」

二人は体育センターでのトレーニングを軽くこなして、センターに併設された宿舎に戻ります。そして、身の回りの品をスーツケースに詰めて、明日の移動に備えました。

13

パーリオ邸に着いた二人は、屋敷内のホサピ舎に落ち着きました。十歳でここに買い取られた時には粗末な部屋でしたが、いまでは見違えるほど立派になりました。世間体があるので、外観は何の変哲もない小屋ですが、中は高級ホテル並みの造りです。なにしろアプとズコの稼ぎは巨額で、パーリオの年収を遥かに上回っていたのですから。

「明日から早速、野外トレーニングに出かけます」

アプとズコは、ホサピ舎を出て屋敷に戻る飼い主に告げました。

「熱心だな、一日ぐらいは休んだらどうかね」

「有難うございます。でも、僕は休んだらコンディションが乱れてしまいますので」

ズコが答えました。

「アプもそうかね？」

「ハイ、パーリオ様。走らせて下さい」

「そうか、好きなようにしてもいいが、怪我だけはいかん。怪我をしないように注意すること、いいな」

「ハイ、分かりました」

そう言い含めたパーリオは屋敷に戻って行きました。

翌朝、アプとズコは紫のコスチュームに身を固めてパーリオの屋敷を出ました。市街地を抜け出し、草の生えた旧道に入ります。そして、谷川を遡（さかのぼ）り、地底湖のある洞窟に入りました。

「ただいま帰りました。アプです、ズコです」

地底湖のほとりに立ち、アプとズコは代わる代わる挨拶をしました。その声が洞窟の中でこだまして、しばらく余韻を残します。

「お帰り、二人とも無事に戻ってきたね。今すぐ行くから」

闇の中から源蔵爺さんの声が響いてきました。

十分ほど待つと、地底湖の奥が仄かに明るくなってきました。その明かりはモーターボートのライトで、近づいてくると操縦席に源蔵爺さんの姿が見えます。ボートは、アプとズコの目の前で止まり、平たい岩にピタリと接岸しました。

「二人とも元気でよかった。さあ、早く乗りなさい」

源蔵爺さんの隣の席にズコが、後部座席にアプが掛けます。

「千佳婆さんがいないけど、お元気なんですか？」

アプが操縦席に首を伸ばして訊きます。

「ああ、元気だよ。今朝も早くから研究室に籠っているが、ボートが着くころには出てくるだろう」

「前に言っていた研究ですね、イカタック星人と戦うための」

「そうだよ、もう寝食を忘れて没頭、という状態さ。お陰で炊事洗濯、掃除などはワシの仕事に回ってきてな」

源蔵爺さんはボートを操縦しながら近況を話します。口ではぼやいているものの、表情は嬉しそうに見えます。

対岸にボートを係留して、彼らはゴツゴツした岩場に降り立ちます。ホールのように広いその岩場から、源蔵爺さんたちが住むリビングに入ります。何時もは千佳婆さんが用意してくれたバスタオルは、源蔵爺さんから手渡されました。そのタオルで濡れた足を拭っていると、温かいスープがテーブルに並べられます。やはり源蔵爺さんが作ってくれたのです。

「まあ、二人とも元気で。よく戻ってきたわね！」

リビングの入り口から、千佳婆さんの声です。

「ただいま。これからまた、お世話になります」

「ご面倒をおかけしますが、よろしくお願いします」

「あらあら、二人ともそんな大人びた挨拶を」

千佳婆さんはアプとズコの成長ぶりに目を見張って言いました。彼女の目は深く落ち込んではいるものの鋭く光り、鼻や頬が少し出っ張った感じに見えます。乱れた銀色の髪を後ろに束ねて縛った容貌は、獲物を狙う鷹（たか）のようです。

「お婆さんの研究は順調に進んでいますか？」

「はい、とお答えしたいところだけど、そう簡単にはいかないのよ」

アプの質問に千佳婆さんは優しく答えました。

「トライアンドエラー、その連続と言えるわね。でも、自分が描いたゴールに確信があったら、くじけないこと。諦めないこと。それが研究者の生き方なのよ」

「かっこいいな、私も研究者になろうかな」

「そうね、だったらアプは沢山勉強をすることよ。研究者は新しいことを発見したり、発明したりするのが役割だから、いままでの研究についてすべてを知る必要があるわ。そのうえで、誰も発見していないことや作ったことがないものに挑戦するの」

「へー、凄いね。探検家みたいだな」

「そうなのよ、ズコ。未知の世界に果敢に切り込んでいくのが本当の研究者だと言えるわね」

千佳婆さんは紅茶を飲みながら、研究者の心構えを熱く語ります。

「ところで、イカタックシティの方はどうだった？　変わったことはなかったかしら」

「ハイ、僕らの生活はともかく、仲間と思われる子たちがずいぶん大きくなりました」

「誕生日はもう過ぎているわね」
「はい、年長の子たちは一歳半になります」
「そう、何か違いは出てきましたか？」
「はい、口真似をして僕らの名を呼んだり、自分の名前を言ったり」
「……えっ、名前だって！　彼らには名前があるのか？」
キッチンから源蔵爺さんが現れ、会話に加わってきました。
「はい、僕らが勝手につけたのですが」
そう言って、ズコは例のカードを取り出して老夫婦に見せます。アプも加わり、数字をカナに変換する方法を説明しました。
「フーム、よく考えついたな」
「勝手なことをして、いけなかったですか？」
アプとズコは神妙な顔つきで、源蔵爺さんに訊きます。
「いや、構わんよ。イカタックに生まれた子たちは、みんなアプとズコが造り出した子たちだから。その子たちが大きくなって新しい人間の世界が到来したときには、君たちはアダムとイブ、日本でいえばイザナギノミコトとイザナミノミコトのような存在になる」
「そうですか、問題はないですね」
「ああ、問題はない。いずれ名前は必ず必要になるからな」
そう言って、源蔵爺さんは何度も頷いています。

「ただ…、少し早すぎるかも知れないわよ」
千佳婆さんが意見を挟んできました。
「幼い時からいろいろなことに興味を示したり、言葉を話したりしたら、怪しまれるんじゃないかしら」
「ホサピとは違うって？」
「そうよ、放っておけば分からないけど、名前をつけて言葉を教えたら違いが目立ってくるわよ」
千佳婆さんの鋭い指摘で、三人は腕を組んで考え込んでしまいました。
「名前や言葉より先にやることってなんだろう」
ズコは目を上げて、ゴツゴツした岩の天井を睨みます。
「私たちはどうだったかしら？　ここで真っ先にやったことって」
ズコは、天井を睨んだままでアプの問い掛けに答えます。
「ホサピの真似、ホサピになること」
そう言うと、ズコは視線を戻してみんなの顔を見回しました。
「ズコが言うとおりだわ、それで私たちは生きのびているわけだから」
アプも、大きく頷いてズコに同意します。
「意見はまとまったようだな。教育とは、まず生きることの大切さ、次にどのように生きるか、その術（すべ）を教えることだと思うな。このこと

はいずれアプとズコにはゆっくり話すつもりだがね」
「でも、現実の問題として、幼子たちにどう教えたらいいのかしら？」
アプが、源蔵爺さんの言葉を遮（さえぎ）るように言いました。
「まだ言葉も通じない幼い子たちに、どうしたら……、いっそのこと何もしないで放っておく？　そういう手もありますよね」
ズコが皆の顔を見回しながら、言いました。
「でも、放っておいたらホサピとの区別はつかないし、将来、君たちと共に立ち上がることも望めなくなるよ」
源蔵爺さんが厳しい口調で言います。その言葉で、テーブルを囲んだ四人は腕組みをして考え込んでしまいました。

アプとズコはレースに出場する日やそのための移動日以外は欠かさず野外トレーニングに出かけました。そして、地底湖のある洞窟に入り込み、スクールで勉強をしたり源蔵爺さん、千佳婆さんとのミーティングに加わったりしていました。月に二、三度、出場するホサピレースでは、二人はパーリオの指示どおりに走ります。パーリオは、二人に勝つことばかりではなく、ときには負けることも指示します。あるレースでは、ゴール直前で転げて、優勝を逃すことも演じました。そのように自然体を装いながら、アプとズコは確実に賞金獲得額を増やしていきました。ですから、パーリオとその妻ペクールの信頼は深まるばかりで、アプとズコの行動に疑いが掛けられることはまったくありませんでした。
またたく間に時が過ぎて、再び下北での冬季合宿に出かける日が迫ってきました。シーズン最後のトレーニングに出かけた二人は、老夫妻に別れの挨拶をします。
「源蔵爺さん、千佳婆さん、それでは行ってきます」
「身体には十分気をつけてね、風邪などひかないように」
千佳婆さんもこの日は研究室に籠らず、二人に声を掛けます。
「アプとズコ、いろいろと作戦を練ってきたが、気を付けて。決して無理はしない、無理をしてはいけないよ」
源蔵爺さんは、二人の手を強く握って言い含めました。

アプとズコは、パーリオが運転するワゴン車で再びイカタックシティの増産所にやってきました。体育センターに併設された宿舎の前では、世話係のペリーゼがピンクの洋ダルに納まって出迎えです。
「パーリオ理事長さま、ようこそ。長距離の運転、お疲れ様でした」
仰々しく挨拶をするペリーゼを尻目に、アプとズコはワゴン車からスーツケースを取り出し、忘れ物がないか、車内を見回します。

「ペリーゼさん、この冬もお世話になるがよろしく頼むよ」
「ハイ、承知いたしました。理事長さまの大切なホサピですもの」
「ホー、アプとズコの活躍ぶりを知っているのかね？」
「勿論でございます。二頭はこの増産所の生産ホサピで、冬季の調整もここで行っていることは、私どもの誇りでございますわ」
「それが分かっていたら安心だ。風邪などひかせないように頼むぞ」
「ハイ、細心の注意を払いますが、そのためにはいろいろと……」
「おぉ、そうか、そうか。いろいろとな」
そう言って、パーリオは吸盤に覆われた手を洋ダルの中に差し込み、十枚あまりの紙幣を取り出しました。
「これはペリーゼさんへの心付けだ。アプとズコに、何か要るようなことがあったら、すぐに相談しておくれ」
「あれっ、パーリオさま。そんな意味で言ったのでは……。でも、せっかくのお心遣いですから、喜んで」
「ウン、それでいい。よろしく頼んだよ」
パーリオは、洋ダルがぶつかるぐらいまで近寄ってきたペリーゼに紙幣を握らせました。そして、アプとズコに視線を移して言います。
「それではアプとズコ、春までしっかり精進するんだよ。何か困ったことがあったら、何でもペリーゼさんに相談するように」
そう言い残して、パーリオはワゴン車の運転席に戻っていきます。アプとズコ、それにペリーゼは、遠ざかるパーリオの車を見送った後で、宿舎に向かいます。
「さあ、アプ号とズコ号、宿舎に入りましょう」
「ハイ、ペリーゼさん」
「この―ッ、生意気ホサピ！　付け上がるんじゃないわよ。ペリーゼさまと呼べ、ペリーゼさまと」
「ハイ、ペリーゼさま。申し訳ございません」
ズコが、ペコペコ頭を下げます。
「ホサピはホサピ、幾ら稼ぎが良くても家畜は家畜だ。身分をわきまえて口を利きなさい」
「済みません、ペリーゼさま」
いつもとは勝手が違いますが、ここはパーリオの屋敷ではありません。アプとズコは首をうなだれ、何度も謝罪を繰り返します。
「もういい、受付が済んだから部屋に入りな」
この冬も、宿舎での世話係はチロロという中年のホサピでした。彼女はアプとズコとの再会を喜んでいるようですが、ペリーゼに気兼ねをしてか、表情には出しません。そのチロロが荷物の一部を手に取って、二人を部屋に案内しようとしたときです。

「あ、それから欲しいものがあったら何でも私に言いなさい。私がお前たちのご主人様に取り次いでやるからさ」
ペリーゼがアプとズコに言いました。彼女は、パーリオから貰った心付けに気をよくして、これからも利用できると考えたようです。
「それからお前たちの飼い主は出世して、来年から本庁の長官に任命されるよ。後任が決まるまでは理事長も兼任するそうだけど、忙しくてここにはほとんど来なくなると思う。だからお前たち、これからはこのペリーゼ様を頼りにしなさい、分かった」
「ハイ、有難うございます。よろしくお願いします」
アプとズコはペリーゼに何度も礼を言うと、チロロと共に自分の部屋に引き揚げて行きました。

翌朝、アプとズコは紫のジャージ姿で、宿舎を勢いよくとび出しました。理事長室の脇にある廊下で黄色い服に着替えて、増産所に向かいます。玄関を入り、研究所に沿った廊下を奥に進みます。珍しいことに、イカタック星人が二人並んでこちらに来ます。洋ダルのキャスターが転がる音と、二人の会話が聞こえてきました。アプとズコは壁に向かって身体をピタリと寄せ、通路を広く開けます。そして二人が背後を通り過ぎると、再び向きを変えました。

突きあたりの妊婦棟の前で右に折れ、授産所や周産期棟との間を過ぎます。そして、新生児が収容されている乳児棟の様子を探り、次に奥隣にある一歳児の棟の一つに入りました。
「アプ、春先と変化はないね」
「なにも変わってはいないわ。もう四、五十数年も続いている畜産所だから、変わる筈もないでしょうけど」
アプとズコは、幼子の世話をする素振りで幾つかの部屋をめぐって、外に出ました。乳児棟と一歳児の棟との間は狭くて、芝生の庭しかありませんが、その奥に連なる二歳児の棟との間は広く開いています。そこにはテニスコートぐらいのグランドが連なり、隅にすべり台やブランコなどの遊具が見えます。グランドとグランドの間にはウサギやニワトリなどの飼育小屋があり、茶色い服を着たホサピが餌をやったり、金網の中を掃除したりしていました。
「あの茶色の服は農夫のホサピ？」
「そうよ、ズコは気付いていなかったの。トレーニングで外を走っているとき、遠くの農園で働いていたのに」
「僕はいつも前を向いて走っているからね。それに黄色に近いから」
「あれが黄色ですって！　呆れた」
アプは、色彩感覚が鈍いズコを小馬鹿にするように言います。やは

り、色彩感覚は女性のアプ方が鋭いようです。
「それでは二歳児の棟に入るわよ、ズコ」
「了解、まずは**の**組の子からだね」
「**の**組ってなに？」
「ん、棟の最初の建物はノベンバー生まれの子たちでしょう。だから**の**組の子じゃないか」
「そうかぁ、ズコって頭いいんだ」
「頭じゃないよ、センス。センスがいいって言ってほしいな」
そんな会話を交わしながら、二人はフロアで遊ぶ幼児の群れに入って行きます。そして、耳たぶの後ろの刺青と、持参したカードを見て、名を呼びました。
「あ・い・の、あなたの名前はアイノちゃん。この部屋の中で一番早く生まれた子ですね」
アプが一日生まれの一番の子を見つけて、興奮気味に名を呼びます。ズコも少し離れた場所で、久々に対面した子たちと戯れていました。三十分ほどしたとき、ズコがアプに声をかけました。
「次は**お**組だ、**お**組の子」
「分かったわ、**お**組の建物に行きましょう」
二人は、周囲に群がる幼子たちの間をかき分けるように奥に進み、短い廊下を渡って隣りの建物に移りました。**お**組の次は**せ**組、さらに**あ**組の子たちともしばらく過ごした二人は、二歳児の棟を後にしました。
午後の三時過ぎに、アプとズコは紫色のジャージに着替えて、体育センターに向かいます。そこで軽く走り込んだ二人は、センターに隣接した宿舎に引きあげてきました。玄関にある受付で、アプがペリーゼに頼みごとがあることを伝えます。丁度、仕事を終えて帰宅する時間であったため、連絡を受けたペリーゼはすぐにやってきました。そのペリーゼを玄関で出迎えたアプとズコは、ロビーに落ち着いたペリーゼに話します。
「ペリーゼ様、お忙しいところを誠に済みません」
アプとズコは、恐る恐る、という表情で切り出しました。
「お前たち、私がとっても忙しいことは、よく分かっているようだね。それで用件は？」
「あのーお、紙とクレヨンがあったらいいなぁ……と」
「フン、ホサピのくせに、紙とクレヨンだって。一体どうすると言うのさ」
「あのー、走るときのフォーム、前傾姿勢や手の振り方なんかを紙に書いて、少しでも速くなれるようにと思いまして」

「そんなこと、自分の体で覚えるものでしょ」
「ハイ、おっしゃる通りですが、中々身につかないものですから……。もしかして、良いときのフォームを画用紙に書き留めておいたら役に立つかと思いまして」
アプとズコが代わる代わる言う言葉を、ペリーゼは聞いてはいませんでした。端（はな）からホサピの言うことなど聞く気がなかったからです。しかし、彼女は別のことを考えていました。アプとズコの望みをかなえてやれば、幾らぐらい稼ぐことができるかと。
「お前たちの言うことはよく分かった。もっと速く走れるようになって、賞金を稼ぎたいということだね」
「ハイ、ペリーゼさま。もっとご主人様のお役に立ちたいと」
「そうかい、その言葉を聞けばパーリオさんはさぞ喜ぶだろうさ。明日にでも掛けあってやるから、待ってなさい」
そう言うと、ペリーゼはキャスター付きの洋ダルの向きをクルリと変えて、宿舎を出て行きました。
それから二、三日たった夕方、アプとズコが宿舎に帰ると、分厚い画用紙と二十四色のクレヨンが二セット届いていました。受付のイカタック星人の女に聞くと、昼過ぎにペリーゼが持ってきてくれたとのことです。
「たまには親切にしてくれるんだ、ペリーゼさんも」
ズコが、クレヨンの箱を手に嬉しそうに言いました。
「ズコって、単細胞！　彼女が親切なわけ、ないでしょ」
「ということは、打算？」
「そうよ、先日もパーリオ様からお金をせしめていたもの」
「そうか。でも、僕らの欲しいものが手に入れば、どうでもいいや」
「まあ、そうね。それでは、早速描いてみましょうか」
アプは、ロビーに数脚並ぶテーブルの一つに画用紙を広げ、クレヨンの箱を開けます。ズコも、四角いテーブルの向かい座って、画用紙を広げました。
「イカタック星人の肌は透明に近いから、描きにくいなぁ」
ズコは、クレヨンの箱を開きながら言います。
「なにを言ってるのよ！　まさかここで描くわけじゃないでしょ」
「エッ、ここじゃ駄目？」
「当たり前でしょ、周りにいるのは誰？」
「そうか、駄目だね」
「私たちは走るフォーム、走り方を研究するのよ」
「そうです、そのための紙とクレヨンです」
ズコは青いクレヨンを手に取り、画用紙の最初のページにヒトの姿

を描き始めました。丸い頭に棒状の胴体、それに手足をつけてゆきます。胴体を表す棒は前に傾き、手を勢いよく振っているランナーのフォームです。アプも赤いクレヨンを手に、ランナー像を描きます。二、三枚を描いたところで、アプが顔を上げて言いました。

「ズコのフォームは前傾過ぎるわ、体の軸は垂直に近い筈よ」

「そうかなぁ、スタートのときはもっと前屈みだろう」

「スタートだけよ。それから腕も前に振り過ぎ。肘が体の真横から前に出たら駄目なの」

「そうかなぁ、僕は納得できないな」

ズコは普通に描いたつもりですが、アプの批評は辛辣(しんらつ)でした。

「明日ね、そのフォームで走ってごらん。すぐに分かるから」

ズコは、アプの絵を何度も見直して、「実際にはこんなものかなぁ」と呟きます。そこに世話係のチロロがやって、二人に耳打ちをしました。夕食の時間が過ぎてしまうので、早く食堂に来るようにとの催促です。

「あっ、ズコ、大変だ。早く行きましょう」

「ウン、だけどこの絵は？」

「ここに置いて貰いましょうよ、夕食が済むまで」

アプはそう言って、受付にいる若いイカタック星人の女に画用紙とクレヨンをテーブルの上に置く許可を取り付けました。

二人は素早く夕食を済ますと、ロビーに戻ってきました。そして、テーブルに置いた画用紙とクレヨンの箱を抱えて、夫々の部屋に戻って行きました。

翌日もアプとズコは体育センターでの走り込みを早めに切り上げ、宿舎に帰ってきました。そして、夫々の部屋から画用紙とクレヨンを持ってきて、ロビーのテーブルに広げます。

「走ってるときって、ほぼ垂直だね。今日確かめてみたけど」

「そうでしょ、注意しないと後ろに反り返ってしまうこともあるわよ」

ズコは画用紙の新しいページに、黒いクレヨンで走行フォームを描き直しています。昨夜とは違って、体の軸はほぼ垂直になりました。アプも、ランナー像を描いて、その絵の所々にコメントを書き込みます。しばらくして二人は、洋ダルに籠った受付嬢の目がないことを確かめ、画用紙の前の頁に戻ります。

「いいんじゃない、ズコ。とてもよく特徴を掴んでるわ」

「そう、それじゃ今夜、紐をつけておくから」

「私が描いたウサギちゃんも可愛いでしょ」

「ウン、うまいよ。臆病な感じがよく出てる」

二人は、夫々が自室で描いてきた絵を見せ合って、その出来栄えに

満足しています。やがて夕食の時間が近付くと、二人は画用紙とクレヨンを部屋に戻して、食堂に向かいました。

翌朝、アプとズコは紫色のジャージ姿で元気よく宿舎を出ました。耳を覆う防寒帽と手袋にマフラーを巻いた姿は変わりありませんが、少し反り気味で腕の振りもいつもより小さいようです。見方によっては長距離ランナーに似たフォームで増産所に着いた二人は、いつものように暗い廊下で黄色い服に着替えました。そして、二歳児の収容された棟に一直線に向かいます。

「どの部屋から始める？」

アプが、前を向いた姿勢を変えずに訊きました。

「棟に入って四番目の**せ**組かな、目立ちにくい位置だから」

「いいわ、九月生まれの年長さんということもあるし」

二人は、はやる気持ちを抑えて、棟の一番手前にある**で**組の施設に入って行きます。広いフロアには、おびただしい数のホサピの幼子が遊び、白いベビー服に交じって、黄色い服の保母ホサピが幼児の面倒を見ています。多くの子たちは、元気に歩いたり這ったりしていますが、泣きじゃくる子もいました。中には床にふんぞり返って、大声を上げる子も見受けられます。

そのような施設の中を縫うように進んで、アプとズコは目的の**せ**組の建物に入りました。そして、建物の右隅、壁沿いに巣穴に似たベッドが並ぶスロープの脇で、黄色い服の前ボタンをひとつずつ外してゆきます。

「皺（しわ）にならなくてよかった！　アプの方は？」

入口側の壁に向かって前ボタンを外していた彼女も、小さく膨らんだ乳房の間から一枚の絵を取り出して言います。

「大丈夫、ウサギちゃんは健在よ」

「それじゃ、早速やってみようか」

「そうね、私はこの位置で踊るから、ズコは入口の方からよ」

「分かった、それでは始めるよ」

ズコは、服の下から取り出した二枚の画用紙を手に、入口の方に歩いて行きます。十メートルほど離れた位置で立ち止まり、手に持った紙を身に着け始めました。一枚は縦縞の模様が描かれた絵で、それを腰に巻きつけ、もう一方を顔に付けました。それはイカタック星人のお面で、光背のようなひし形の耳の真ん中に円い顔と二つの緑の目、タコのように円く尖がった口があります。色はベージュと肌色の中間で、縁を目立つようにエビ茶色で強調してありました。腰に巻きつけた絵は、ねずみ色の洋ダルで、下端にキャスターの車輪が小さく描かれています。

早くも数人の幼児が、ズコの周りに集まってきました。ズコが、床に膝立ちになると背丈は百二十センチか百三十センチ、それは誰の目にもイカタック星人であることが分かる出来栄えです。二歳の誕生日を過ぎた幼児たちが次々に集ってきて、ズコの周りを二重三重に取り囲みました。ズコは、両手の肘から上を洋ダルから突きだすかのように挙げて、「悪い子はいないかーッ」と低い声で叫びます。その声で、周りを取り囲んでいた子たちが二、三歩後ずさりをしました。

一方、アプの方は隅っこで楽しげに飛んだり跳ねたりのパフォーマンスを続けていました。こちらにも何人もの幼子が寄ってきて、彼女を取り囲んでいます。中にはアプを真似て、手足をぎこちなく動かす子も出てきました。しかし、イカタック星人に扮したズコの叫び声を合図に、彼女は楽しげな動きをピタリとやめました。そして、奇妙な声を発します。

「ババババババ、ババババ……」

周囲でアプの真似をしていた子たちは戸惑いました。どうしてよいかわからず、立ち尽くしています。

「ババババババ、ババババ……」

アプは、膝立て姿勢で近づいてくるズコの方を指さして、なおも奇声を続けます。そして、ズコが扮するイカタック星人が四、五メートルに近づいたとき、床に置いたウサギの絵を取り上げました。そのウサギは、背中を折り目に対象形に描かれていて、左右どちらから見ても臆病なウサギに見えます。アプは、その絵を背中に被り、床に額をつけて蹲（うずくま）ります。周囲できょとんとしていた数人の幼児も、アプのまねをして床のマットに腹這いになりました。

ズコは、ウサギのポーズで床にうずくまるアプと幼児のすぐ近くで、もう一度「悪い子はいないかーッ」と叫びます。リアルなお面に膝立ちの窮屈な姿勢でモゾモゾと移動する姿は、イカタック星人を彷彿させるものがあります。ズコは、周囲を威嚇するポーズを保ちながら向きを変え、入口に向かって戻って行きます。ウサギのポーズで蹲っていたアプは、ズコが扮するイカタック星人が数メートル先まで去って行くと、顔だけを挙げて、また奇声を発しました。今度は、先ほどのババババとは違った奇声です。

「グググググ、グググ……」

さらに、イカタック星人の後ろ姿が遠ざかると、アプは起き上がりながら、グググ……を言い続けます。そして、ズコがお面と洋ダルの絵を身体から取り去るのを見届けると、グググ……という発声を止めました。

アプは、再び楽しげに飛んだり跳ねたりする踊りを始めました。周

りで腹這いになっていた幼児たちも起き上って、アプと一緒に体をぎこちなく動かします。ズコが扮したイカタック星人を観察していた子たちも寄ってきて、アプの動きを真似ていました。

「最初のパフォーマンスとしては上出来だったかな？」

ズコが、アプの近くにやってきて訊きます。

「よかったんじゃない、ここにいる子たちには通じると思うわ」

アプはパフォーマンスを止めて、近くにいる子の頭を撫ぜたり、抱き上げたり。ズコも、近くにいる子を抱き締め、両手で高く抱え上げてキャッキャーッと喜ばせていました。

アプとズコは、イカタック星人が近づいてくるとババババ……という声で危険を知らせ合い、ウサギのようにおとなしく振る舞うこと。そのイカタック星人が遠ざかるとグググ……という声を合図に警戒を解く。そして、自由に飛んだり跳ねたりして過ごすことを教えようとしていました。危険を知らせる合図については、最初にダダダ……を考えましたが、この発語はホサピたちが日常的に発しています。そこで、bad のババババに変更しました。危険が去ったときのグググは、good に由来していることは申すまでもありません。

アプとズコの寸劇に似たパフォーマンスは、開始から終了までに十分か十五分もあれば足ります。そこで二人は、入口の右隅でパフォーマンスを演じた後は、施設の左奥隅で再演しました。その次は入口の左隅、最後に右の奥隅です。

何故、施設の隅だけで演じるかというと、それは四隅が監視カメラの死角になっているからです。かつて、ズコは乳児舎の診療所で、監視カメラの映像を見たことがあります。そのとき、カメラの設置台数と撮影画像を詳しく調べ、最も見えにくい位置を把握していたのです。

アプとズコは、**せ**組の建物でのパフォーマンスが済むと、隣の**お**組の部屋に移動しました。その広い施設の四隅で寸劇を演じた次には、**の**組の部屋です。そして、**で**組の建物の中でも……と思いましたが、ときは午後の三時を過ぎています。その日はそこで切り上げ、翌朝、二人は**で**組から演技を開始しました。次の**あ**組で仲間のいる施設を一巡。そして、**せ**組の施設では、二回目のパフォーマンスを演じました。

このようにして、アプとズコのパフォーマンスは途切れることなく続けられました。しかし、このパフォーマンスに関心を示す幼児は決して多くはありませんでした。床に座って、ただひたすら自分の指をしゃぶっている子、絶え間なく垂れてくる鼻汁を舌で舐(な)める子、マットの上をフラフラと歩き回る子など、その行動は千差万別です。黄色い服を着た保母役のホサピでさえ、アプとズコのパフォーマンスには無関心でした。保母たちは、幼子が床に残した吐物や便などを清掃し

たり、泣きわめく子をあやしたりする作業に追われていたのです。

二月末の寒い日のことです。アプとズコはお組の建物の中で、例のパフォーマンスを演じていました。入口右手での演技が済んで、左奥で二回目を始めようとしていたときです。突然、入口に二人のイカタック星人が現れました。洋ダルに納まった二人は、後に青い服の労務用ホサピを数人従えています。ホサピたちは、大型の清掃用具を抱えているので、月に一度の大掃除が始まる模様です。通常、大掃除と疫病を防ぐ施設内の消毒は、月の初めに行われていました。恐らく何らかの都合で日程が変更されたのでしょう。

アプとズコは、すかさずババババババ……の合図を発しました。施設の中は騒々しくて、数十メートルも先にいるイカタック星人には聞こえる筈はありません。二人は、かなり大きな声でババババババ……を言い続けます。しかし、近くにいる子たちはポカンと口を開けて二人を見上げているだけです。僅かに二、三の幼子だけが、ババババババ……と口真似をするだけでした。

しばらく奇声を発していたアプとズコは、イカタック星人が部屋の中ほどまで来たところで発声をやめました。そして、壁際のスロープに向かって蹲り、できるだけ目立たない姿勢を取りました。奇声を真似た子たちも、二人の隣で腹ばいになってウサギのポーズです。

二人のイカタック星人は、施設を縦方向に半分に分け、その片側を開けるように命じました。その命令に従って、黄色い服のホサピが幼子たちを施設の左側に誘導しています。言うことを聞かない幼子は抱き上げて、左の壁際まで運んでいます。幼子たちが居なくなった場所から大掃除が始まりました。マットに洗剤と水がまかれ、青い服のホサピたちはモップが回転する大型の掃除機で洗浄して行きます。その作業は施設の入口から中ほどに進んできました。アプは、隣でウサギのポーズをしている子に小さい声で呼び掛けます。

「アイクちゃん、向こう側に移るわよ」

そうです、隣でウサギのまねをしているのはアイクという女の子で、もう自分の名前が分かるのです。そのアイクと、もう二人の男の子の背に軽く手を添え、彼らは施設の左側に移動しました。そして、再び壁際のスロープに向かってウサギのように動かないことを言い聞かせます。

アプとズコは、アイクと二人の『人間の子』を安全な場所に誘導し終えると、建物の真ん中に出て行きました。そして、これから清掃するスペースで遊ぶ子たちを抱きあげ、左側に運ぶ作業に加わります。

再び入口に二人のイカタック星人が現れました。彼らは、新たに数

頭の労務用ホサピを従えて来ました。その青い服のホサピたちは、温風が吹き出す乾燥機を操作して、洗浄と消毒が済んだスペースを乾燥させています。またたく間に床の四分の一の作業が完了して、左側に集められたホサピの子たちは、今度は右手に移動させられます。

アプとズコは、清掃作業を手伝いながらイカタック星人の動きを注意深く観察しました。彼らは二人のペアで行動し、労務や保母役のホサピに仕事を命じるほかは何もしません。指示した作業が始まると建物の外に出て行って、作業が終わるころに戻ってきます。そして、次の作業を指示するだけでホサピの子たちには目もくれませんでした。

一時間と少しで清掃が終わり、イカタック星人と青い服の労務ホサピは部屋から出て行きました。少しだけ消毒液の臭いが残っていますが、室内は清潔になっています。アプとズコは、部屋の奥にいるアイクともう二人の男の子、サチオとフリオにバイバイと手を振って**お**組の建物を後にしました。

「ズコ、さっきは突然のことでびっくりしたわね」

アプが、狭い廊下で黄色い服を脱ぎながら言いました。

「でも、これまでの成果が検証できたんじゃない」

ズコも、アプに背を向けた姿勢で着替えながら答えます。彼の目の前は、寒々とした駐車場のコンクリートの床です。最近は男女の体つきの違いが気になって、二人は背中合わせで着替えをする習慣になっていたのです。

「でも、結果は散々だったわ。たったの三人ですもの」

アプが、紫のジャージの袖に腕を通しながらぼやきました。

「僕は大きな成果だと思うよ。だって、あの子たちはまだ二歳と少しなんだから」

「ズコの見方って、私とは逆ね」

「それにあの時はたまたま近くにアイクとサチオ、それにフリオしかいなかった……、ということだってあり得るし」

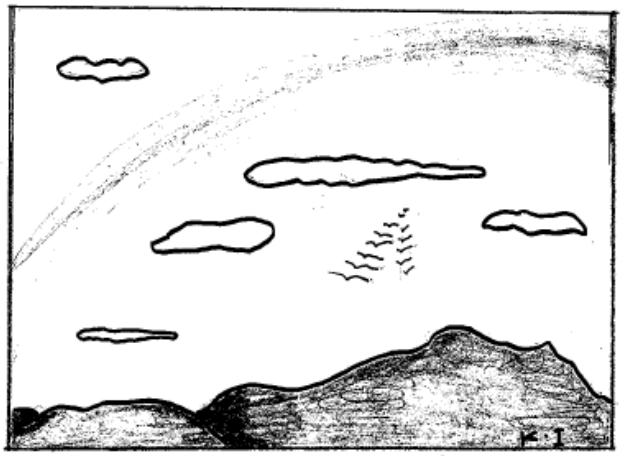
「むしろ順調、と言うわけね」

「そう考えたいんだよ。アプ。あの子たちはこれから三歳、四歳と成長して言葉も分かるようになるさ。だから、きっとうまくいく。大丈夫だよ」

着替えが済んだ二人は、イカタック星人のお面やウサギの絵を黄色い服の下に包み込み、理事長室と駐車場を結ぶ暗い廊下から外に出ました。昨夜から降り続いていた雪もいまは止んで、雲の切れ間から陽が差しています。純白の新雪に降り注ぐ眩しい陽光は、下北の地に春の訪れが近いことを告げていました。

（以下、次号）

詩



中川とら

無題

あなたが
あまりに健気だから
雨上がりの空に
七色の虹を　架けてあげましょう　と
言ってあげたい

◇

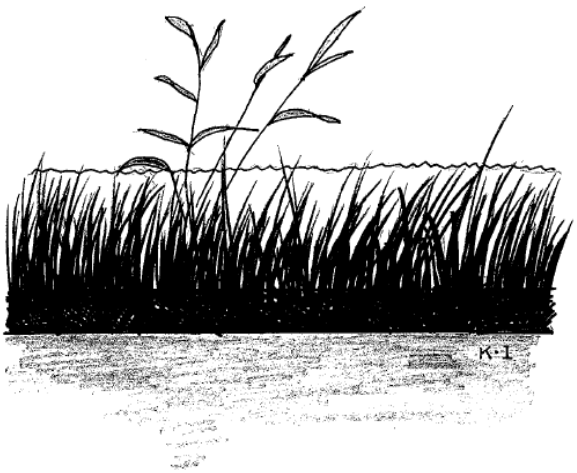
冬の日の別れ

元気でね
握りあった
あなたの力強い手の感触が
まだ　私の中に残っている

枯葦の原に
夕映えがいっぱいに広がって
あなたの　乗っていった電車の音が
遠く　耳元に聞こえてくるようだ

きっと　あなたはやり抜く
きっと　あなたは負けない

◇



失われた年月

畑中康郎

（一）

初夏のある日、片山から田畑に、久しぶりに酒の誘いがあった。田畑の現在の仕事に関する話だという。それは珍しいことである。仕事を話題にして会ったことなど過去に一度もない。

会う場所は決まっていた。馴染みの大衆酒場である。田畑の職場から近く、駅裏の赤提灯の店がたくさん並んだ、そのうちの小さな薄汚れた飲み屋だ。飲み屋の名前は、「すすむちゃん」といった。多分店のオヤジの名前だろう。

彼ら二人は、かつて高校の同級生であった。お互い悪友で三年間を通した。アルバイトばかりでろくに勉強もしなかったから、二人とも偏差値の高い大学には入れなかった。大学も別々である。卒業後片山はすぐに鉄鋼の業界紙記者となったが長続きせず、現在はあまり品のよくない二流週刊誌の記者に転じていた。田畑の方はというと、何とかQ市役所の職員として滑り込むことができた。

田畑は身長一八〇ｃｍで痩せ型、端正な顔立ちに、ふちなし眼鏡がよく似合う。そのためなのか、青白い顔はクールなインテリに見える。一方の片山は、一七〇ｃｍでがっしりとした体つき、色は浅黒く眉毛の太さと大きな眼が精悍な印象だ。この男の性格、一言で片付けるな

らば、金銭欲や名誉欲と無縁ということであろう。根底には正義感が常にあり、社会悪を極度に嫌った。だがこれは田畑にも一部共通するものかもしれない。

飲み屋は座敷があるわけでもなく、二人用、四人用のテーブルが合計七つ、あとはカウンターである。たったそれだけの小さな騒がしい居酒屋だった。田畑が午後八時過ぎに着いたとき、すでに片山は隅っこのカウンターで飲んでいた。

『すすむちゃん　天下一品、うまい安い大衆酒場』という、センスの感じられないフレーズが、紺地に白ぬきの暖簾になっている。その暖簾を掻き分けた途端、数メートル先から片山の野太い地声が田畑に飛んできた。

「おう、田畑。こっちだ。久しぶりだな。元気で生きてたか」

「相変わらず口が達者だし、元気そうだな。だけど上下はいつもどおりよれよれだな。たまには服装にも気を遣ったらどうだ？」

田畑はそう言いながら片山の隣に座り、早速ビールを注文した。ヘビースモーカーの片山の周囲はすでにたばこの煙で充満している。

「おい、すごい煙だな」

堪らず田畑が声を上げた。

「ああ、俺からたばこを取り上げたら、死ねというのと同じだからな。オヤジさん、煙だらけにしちゃって悪いね」

片山はカウンターの中で、忙しく動いている店主に話しかけた。

「片ちゃん、そんなこと気にせず、どんどん吸ってくれよ。客が店のオヤジに気を遣ってどうするんだよ」

店主が笑顔で、煙を自分の方に手招きしている。おもしろいオヤジだな、と田畑は思った。片山に言った。

「片山、お前相変わらず体に悪いことをやっているな。止めた方がいいと思うがね。ケムリを吸い込んでどこがいいんだよ。俺んとこなんか、たばこ吸うと女子職員から総スカンだぜ」

田畑は昨年係長になり、部下の多くは女性である。

「ところで、役所の景気はどうだい？」我感ぜずの片山が訊いた。

「景気か？　あまりよろしくないな。生活保護受給者がどんどん増えている。日本の将来もこのままでは危ないな」

田畑は生活保護の担当であり、ケースワーカーチーム二〇数人をまとめる立場である。

「どう危ないんだ？」続けて片山が訊く。

「モラルハザードだよ。日本人はモラルハザードに陥っている。生活保護を権利だと思っている人たちが多すぎる。利用しなければ損だと

いう感覚だ。俺が以前父親から聞いた話だけど、昔はな、生活保護なんて死んでも受けないと考えていた人たちが大半だったらしい。恥だと思っていたんだ。だから貧乏なんか、気にもしなかった。しかし時代は変わったね。やはり人生というやつは比較なんだな」

片山が話をさえぎった。

「なんだ、その比較って？」

田畑が答える。

「周りの人たちの生活レベルと自分のそれとを比較して見るのさ。昔は皆が貧乏だったから、少しも苦痛ではないんだ。平気で貧乏に耐えられた。ところが周りが少しでも豊かな生活を始めて、自分だけが貧乏だったら、すごく不幸を感じるというわけだ。ついには憲法第二五条の健康で文化的な生活を営む権利というのがお出ましになる。受給申請の判断が自分になく、他人の生活水準との比較にあるというわけだ。周囲の人たちと同じレベルになりたいと思うのさ。だからこれは権利意識なんだ。本来貧乏なんて少しも恥ではないし、生活ができないなんてこともない。ところが権利になっているから、誰もが黙っていない。そしてこの意識が大きな問題を招く。何故か？　原資が血税だからだ。国民が一生懸命働いて納めた金を、ろくに働き口を探さずに、安易に生活保護に頼る。却下されてもともとだ。そんな考えで申請する人が多い。行政もまた簡単に受給者として認定する。行き過ぎた優しさが人間をどんどんだめにする。自立する努力の芽を摘んでいるというわけだ。そうは思わないか？」

「まぁ思うね」片山も頷いた。

「そんな一部の不心得者のために、真に生活保護を必要としている人たちまでも批判の目に晒してしまう。厚労省もまずいんだよ。生活保護費が最低賃金を上回っているケースさえある。これでは真面目に働きたくない、と考える人が出てきても不思議ではない。今生活保護費は全体でいくらか知ってるかい？　国家財政が火の車だというのに三兆七千億円だぜ。桁外れの金額だ。そしてこのうち医療費が半分近くを占めている。これは受給者の医療費を無料にしていることから起きている現象だ。これだって優遇しすぎではないか？　受給者になると、大した病気でもないのに、せっせと病院通いを始める人もいる。受診しなければ損だと思う人もでてくる。これまで受診できなかったものを取り戻すかのように病院通いを頻繁に繰り返す。病院の方だって必要もないのにやたらと高い薬を出して点数を稼ぐ。おかしくないか？　これってモラルハザードだろ？　厚労省もよく考えて欲しいものだよ」

田畑は常日頃疑問に思っていることを、怒ったように吐き出した。

片山も同調しながら言う。
「ウチもさ、今度、生活保護の実態という特集を組むことになった。それでいろいろ調べたよ。ひどいもんだな。人権擁護が前面に出て、簡単に受給を認める実態が透けて見える。行政の方で仮に却下した後何らかの不幸な事件でも起きたら、それこそ行政の責任になるだろ。それは避けたいから安易に受給を認める。面倒なことからすべて逃げたい。これが行政側の問題、そして受給者の方でも、自分の人生なり生活を自分の力で守る気概もない。田畑の言うとおりだよ。なかには働けるのに医者と結託して、病気にしてもらって生活保護にまわる人間もいる。また中には受給しながら、行政にわからないように陰でかくれてアルバイトをしている人間もいる。アルバイトがばれたら、生活保護費からその分を削減されるからだよ。規範もへったくれもない。元手は、みんな俺たちの税金なんだぜ」
「へぇ、お前んとこの二流週刊誌もたまには真面目な特集を組むことがあるんだな。感心したよ」
田畑が茶化した。
「二流で悪かったな。でもな、スキャンダルや事件の裏ばかり追っかけているわけでもないよ。さてと、ところで、今日はちょっとお前にな、記事を掲載する前に調べてもらいたいことがあって声をかけたんだ。俺にちょっとした考えがある」
「ふーん、記事にする前に調べたいこと？　何だ？」
「生活保護受給者に関することだ」
「へぇー、何の権限もない役所の一係長にできることかい？」
「いや生活保護のあり方とか、基準とか、そんな大げさな話ではない。田畑の市役所で生活保護を現在受給している人の話だ」
「俺んとこの生活保護受給者？　だけど個人情報は教えられないよ」
「まぁ待て。最近な、ある芸能人に収入が十分あるのに、その母親が生活保護を受けていたという事件があっただろ。あのネタが売れたんで、編集長のやつが二番煎じをやることにしたんだ。そんな例を探して記事にしろというんだ。いやだなと思ったが仕方ない。俺は探したよ。そしたらな、これがあったんだよ」
「それがたまたまQ市役所の管轄下だったというわけか？」
「そうだ。情報源は明かせないが、今度は親子ではなく、兄と妹だ」
それを聞いたとき、田畑はふと疑問に思った。兄と妹とでは一方に扶養義務は生じるだろうか？
「田畑のところの受給者で、草野さんという人いるだろ？」
「草野？　ちょっとすぐには思い出せないな。えーと、担当のケースワーカーは誰だっけ？」

「それでな、おもしろいことがある。この草野さんの妹が、あのK大学教授の草野史恵なんだ」
「あの草野？　今マスコミにしょっちゅう顔を出している？　世界経済の分析に定評のある、あの有名な草野教授か？」
片山が肯いた。田畑は続けた。
「へーわからないもんだな。なんだ、これってあの芸能人に近いケースだな。ただ扶養義務が妹にあるかどうかは疑問だけどな」
「扶養義務？　そんなものはあってもなくてもいいのさ。有名人というのがポイントだよ。週刊誌は売れればいい。兄妹で過去に何があったか知らないが、二人に格差がありすぎる。その辺が俺には腑に落ちないし、個人的にもおもしろくない。だが記事とすればそこがおもしろい」
片山の記者根性だった。田畑は俄然興味を起こした。
「そうだろうな。草野教授だけに、世の中の同情がお兄さんに集まるかもしれないからな。まあ、ふつうなら教授に扶養義務はないと思う。しかし日本という、義理と人情を重んじる国には、知らん振りを許す土壌がない。自分には大きな収入があるのに、血を分けた兄を扶養しないというのは人倫に外れる。判官びいきの日本人ならそう考える。だから、これが記事になったら週刊誌は売れるよ。そのうえ世間は他人の不幸や有名人のプライバシー詮索が大好きだからな。その辺は俺にもよくわかる。ところで、そのお兄さんという人、どういう経歴？」
「教えてやるよ。この人、実は大変な人。いやちょっと違うな。かつては、というべきか」
横目で見た片山を、田畑がせっついた。
「どういうこと？」
「まあ、待て、そう急ぐな。ゆっくり飲んでからにしよう。勿体無くて簡単に話せないよ」
「ちぇ、勿体ぶって。そうか、でもいいよ。夜は長い。ゆっくりとやるさ」
田畑はビール瓶を取り上げ、片山のグラスに注いだ。会って性急に話し込み、二人はまだ酒の肴も注文していなかった。店主の方も何も訊いてこない。いたって呑気なものだ。こんな店主だから、田畑は好きなのだ。
田畑はメニューからいくつか選び、カウンターの中で忙しそうに動いている店主に注文を出した。店が混んできたから、注文した料理がくるまでに時間がかかった。
その間二人はずっと黙っていた。何も話さないでいることがよくある。二人とも沈黙が気にならないのだ。

ようやく料理がきた。ビールで喉を十分に潤し、肴も口に入れたところで片山が語り出した。

「草野正雄。元官僚だ。それも中途半端ではない。東大法学部卒の大蔵キャリアだよ。まぁ、超エリートだな。でもな、俺なんか、東大だからって、別にいいとは思わないけどね」

「負け惜しみ言うなよ。片山も俺も、何回受験しても東大は無理だよ」

田畑が混ぜっ返した。すぐ片山がムキになって反論した。

「そりゃ、無理かもしれないよ。でも俺は合格がどうのこうのなんて言ってない。俺なんか端から官僚養成機関としての東大が嫌いなんだよ。特に法学部だな。官僚意識を醸成してきた先頭集団だよ。そのうえ日本という国はエリートに特別甘い。国益を損なうことをしても次官にまでなれる。例えば、話は飛ぶが、真珠湾攻撃直前の宣戦布告だ。布告が遅れたために日本は未だに卑怯者呼ばわりされている。でもそのときの外交官は戦後次官になったよ。それが東京帝国大学以来の特権だ。まぁ戦争のことを言うと、陸軍大学出身者だって同じだけどな。エリートは苦労せずに世の中を渡れると考える、そういう鼻持ちならない連中を東大は数多く輩出してきた」

そこで田畑が、過熱気味の片山を抑えるように言った。

「おいおい、手厳しいな。でも東大の卒業生はそんな人たちばかりじゃないぜ。立派な人だって多い」

「それはわかっているよ。でも・・。まぁいいか。ところで何だっけ・・。そうだ、草野さんだ、彼が大蔵に入ってからのことだったな。一般的に一〇年も働きぶりを見れば、その実力や将来性まで大体わかるというよな。入省してからの彼は、ずば抜けて優秀だったらしい。すでに将来を嘱望され、四〇をずっと前にして大蔵のプリンスと言われた。だからその後順調に昇進していたら、少なくも有力局長か、ひょっとしたら次官にもなっていただろう」

「うそだろ。俺、草野なんて名前聞いたことないよ」

「そりゃそうさ。まだ若いころ、そう四〇くらいのとき東北財務局の部長でアウトになったからな」

「アウトって？　くびか？」

「そうだ。よくわからないが、もらったということになっている。それで手が後ろにまわったらしい」

「なんでまた？　収賄か？」

「その辺はまだよくわからない。若いころからあまりに実力を評価されて、有頂天になったのかもしれない。怖いもの知らずで人をあごで使ったらしい。そして金が自分のものだか役所の金だかわからないくらいになった。そこが落とし穴だな」

片山はそう言って、たばこにまた火を点けた。よくたばこを吸う男だよ、と田畑は思う。それでもチェーンスモーカーよりはましだ。

「そこから転落の一途かい？　あまりに気の毒だな。飛ぶ鳥を落とす勢いが、今は昔の物語か。信じられないくらいの落ちぶれようだな」

田畑は、そんな草野をイメージしようとしたが、どんな人物なのか頭に浮かんでこなかった。片山が続けた。

「順風満帆で来た栄光が凄すぎたから、逆風による落胆もひどかったのだろう。もともと小心者なのかもしれない。あきらめちゃった。一切の公職や、その他誘いがあっても断った。自分への罰かな。徹底して日陰の身に甘んじてしまった。といっていまさらふつうの仕事では満足できない。その辺が複雑なところだよな」

ここで田畑の仕事意識が顔を出した。

「それはおかしいよ。働けるのに働かないわけだから、生活保護の受給資格はないよ」

「それがね、しばらく貯えを崩して生活していたのだが、家族からも見捨てられるころにやっと働く気になったんだよ。そしたら運命の皮肉というのかな、今度は病気が顕在化した。腎臓と肝臓の両方をやられていたらしい。すでに彼の体はだめになっていたんだ。すぐに疲労してしまって労働に向かない体になっていた」

「波乱万丈だね。俺だったらこんな人生、選択したくないね」

田畑は、片山の話を聞いて草野に同情した。二人は沈黙してしまい、手酌で何杯かビールをあおった。

しばらくして、片山が続けた。

「さあ、そこでだ。俺はこの兄妹の真実を知りたいと思った。それで教授に面会を申し込んだわけさ。教授の助手が秘書代わりなんだが、その女性を通じて申し込んだ。ところが後日助手から伝えられた返答は、そんな人間は知らないというんだ」

「へぇー、週刊誌の記者が恐くないのかな？　大げさに書くし、場合によっては、事実無根まで作文してしまうのが週刊誌だよ」

田畑は、日頃から週刊誌を恐いものと思っている。

「まあ、今回の目的は教授の出方を見ることにある。だから、すぐには掲載しない。じっくり調べてからだ。もう一度接触してみる。それで田畑の方でも草野正雄がどういう人物で、いまどういう生活をしているかを調べてほしい」

「それでその結果どうするつもりなんだ？」

「草野正雄が俺の思うような人物だったら、彼の力になりたい」

「ふーん、よくわからないけど、草野正雄にあたってみるよ。どういうことになるかわからないけどな」

二人は、その晩ずっと生活保護の問題を議論した。そして分かれ際、まず田畑が草野正雄を訪問し、その結果を持ち寄ることにした。

（二）

翌日、田畑は早速動いた。生活保護受給者の草野を担当するケースワーカーは、夫と二人の小学生を持つ四〇代半ばの地味で落ち着いた江口という女性である。その江口に草野の様子をまず訊いた。

「現在草野さんは一人暮らしをされています。離婚されてから随分経っているようです。そしてご自身は肝臓のほかに腎臓病を患っておられて、週に二度透析を受けておいでのようです」

「なんだ。そこまで悪いのか。辛い人生になっちゃったな。年齢はおいくつ？」

「調書によると、六〇です」

「ということは二〇年間無職でここまできたのか。無為の人生を送ったものだな。何を考えて生きてきたのかな？　その間、世間に知られた学術的な業績もなさそうだし」

草野は受給後すでに五年が経つ。記録によれば、その間目立つような問題を起こしていない。だから田畑にも草野の記憶がないのである。

その日は木曜日だった。透析のための通院が火曜日と金曜日だから、在宅の日だ。田畑は江口に同行し、草野のアパートを訪問した。

そこはQ市役所から徒歩一〇分の場所にある、二階建て六世帯の小さな木造アパートだった。部屋は一階角にあり、六畳と三畳の二間、それにキッチン、バス、トイレ付きである。予告訪問ではなかったが、草野はすぐ顔を出した。

「ごめんください。いつもお世話になっている市役所の江口です」

玄関ドアが開き、六畳間からすぐ目に飛び込んだのは書籍の山だった。小さな本棚には到底収まらない、政治・経済・外交・歴史ほかにも内外の思想家の著作が、畳の上に所狭しと山に積まれていた。何冊か、英語や独語等の背表紙のついた分厚い書籍も散見できた。どうやって買い集めたのか、あるいは持ち続けたのかもしれない。田畑はしばらく見とれた。

草野は恥ずかしそうに、玄関入り口で二人を出迎えた。彼の風貌は病んでいるためか、実年齢よりずっと老けて見えた。やや面長な顔は、顔色が悪く艶がない。染みも浮き出ており、皺も深かった。精神的な責め苦が顔に刻印を残したのだろうか？

「こちらこそ、いつも市役所の方にはお世話いただいて感謝しております。こんなむさ苦しいところで申し訳ございません」
草野は入り口に正座しそこまで言うと、こんどは田畑に目を向けた。
「ところで、そちらの方は？」
田畑は型どおりの自己紹介をしてから、草野の目をまっすぐに覗き込み、単刀直入に言った。
「今日は少し申し上げにくい話をもって参上しました」
聞いた草野の顔がやや翳ったように思えた。面倒な話は御免という顔に見える。
「単刀直入で恐縮です。草野さん、妹さんのことで少しお訊きしたいと思いまして・・」
草野は一瞬顔を赤らめたようだ。が、すぐ平静な様子を取り戻した。
「妹？　私は以前江口さんにも申し上げましたが、家族とも別居し現状天涯孤独の身の上です。もともと妹などはおりません」
そうきたか。ならば却って話しやすい、と田畑は考えた。
「それじゃ申し上げます。あなたが東北財務局の元部長だったことがわかりました」
草野は顔つきが厳しくなり、身構えたように見えた。
「しかしそれが妹と何か関係がございますか？」
履歴を言われて、妹の存在は隠しようがないと判断したらしい。
「仮に妹がいたとしてももう今となっては他人同様です。とうの昔に縁が切れております」
「いえ、プライバシーに抵触するようで心苦しいのですが、妹さんがK大学の経済学部教授だということもわかったのです」
「そうした妹の存在と私の生活保護とはどんなつながりがあるのですか？」
断固とした口調で、草野が疑問を呈した。確かにそうだ、つながりなどない。田畑は、内心で返答に窮したが、
「兄弟姉妹は他人の始まりといいます。妹さんが大学教授だからといって、扶養義務があるとも考えられません」と、言った。
「それなら、これ以上私どものことは詮索しないでいただきたい」
きっぱりと言う草野に、田畑は仕方なく言った。
「実は先日、売れっ子芸人が生活保護の母親を放置しているという事例が問題になりましたね。同じようなことで週刊誌が草野さん兄妹を記事にしようとしているのです。勿論妹さんに扶養義務はないのですが、日本の社会はこの辺が厄介なんですよ。おもしろおかしく騒ぎ立てる。それで発行部数を増やす。今回週刊誌がご迷惑をかけるようだと困るので、前もってお話をしようと思ったわけです。いや、余計な

お世話かもしれません。ですが、どうも私の性格はその余計なことをやりたくなるんです」
しかし草野は冷静だった。
「妹が法的に扶養義務を負っていない以上、時間が解決しますよ。世間がどう騒ぎ立てようと私は構いません」
「そうですか。でもテレビや新聞、さらには著作物で経済批評をされている妹さんからすれば、週刊誌が騒ぐとダメージが大きいと思いますが？」
「それはそうですが、まあこれは妹が考えることでしょう」
草野は妹にやや冷淡に見える。
田畑はここで草野の東北財務局時代に触れてみようと考えた。あまりに早く隠遁生活に入った理由を知りたかったのだ。
「ところで草野さん、これは私の個人的な質問ですが、あなたは大蔵省をどうしてそんなに早く退官されたのです？　どうしてそんなに早く自分の人生に見切りをつけてしまわれたのですか？」
草野は怒ったような顔になった。
「そんなこと、あなたに関係ない！」
だが田畑の性分は一度気になったら、後戻りできない。
「ええ、確かに関係ありません。しかしあなたのために残念で仕方がない。その週刊誌記者によれば、あなたは当時大蔵省のプリンスとも呼ばれていた。それが、何があったのか、早々と退官された。大蔵にとっても、あるいは国家にとっても大きな損失になったのではないですか？」
草野は笑顔を見せ、軽く手を振って否定した。
「それは買いかぶりというものです。私は自分自身を評価していません。第一私は取り返しのつかない失敗を犯したのですから」
そこで田畑は考えていたことを言った。
「その失敗の原因が何であったのか、どうも私には気になって仕方がないんです。頭脳明晰なあなたが、どうして取り返しのつかないほどの失敗を犯したのか？　これが私の率直な疑問なのです」
草野の表情が動いた。話す気持ちになったようだ。
「言いたくはなかったのですが、お世話になっている市役所の人だから言います。当時ある人は、私は陰謀に巻き込まれたと言っておりました。果たして本当にそうなのか。しかしながら、私はその一方で自分の迂闊さと驕りが許せなかった。天下の公僕たる自分が、ほんの一時期であっても私利私欲に走ったことが許せなかった。それで自らを罰したのです」
田畑は勢い込んだ。

「それであなたはその行為を恥じ、後の人生を無価値なものにしてしまったということですか？」

草野は沈黙した。

「いや、これはちょっと言い過ぎでした。ご容赦ください」

田畑があわてて謝罪した。

「いやいいんです。自分が主張してきたこと、自分が信条にしてきたことを自らの手で否定してしまったのですから。その罰は自分で引き受けなければならない。それは、私にとって一切世間の表舞台から消えることでした」

それを聞いて田畑は感動した。今どきこれほどまでに自己を律する人がいたのだ。

「あなたって人は、なんて人だ。世の中にはいくらでも過去の言動と違うことを平気で実行できる人がいますよ。少し例が違うかもしれないが言います。あなたも無論ご存知だと思いますが、ナチスを思想的にバックアップし、その政治的言動を正当化した幾人もの知識人が戦後になってナチスを堂々と批判し、戦後ドイツの重要な社会的地位に留まったという事実がありましたよね。いわゆる変節漢ですよ。この連中をあなたはどう評価します？　人間なんて矛盾だらけの存在ですよ。人間なんて、崇高と愚劣の間を動く存在じゃないですか。それを考慮すれば、あなたはなんという正直でお人好しで、なんというバカなんだ。なんでもっと厚かましく生きられなかったのか」

田畑は話しながら、次第に気持ちが高ぶってしまった。言い過ぎていることも意識していた。しかし草野の方は冷静だった。

「人生は不可解にして理不尽なものです。これは天が私に与えた、いわば試練です。私はそれを甘受したにすぎない」

「それは自己満足ですよ。恰好よすぎる。あなたはそれでよかったかもしれないが、そのとき家族のことをどう考えました？　家族が路頭に迷うではないですか。人間泥にまみれても這いつくばっても、頑張り抜かなくてはならない。そういうものではないでしょうか。人間きれいごとだけでは生きられないと思います。十分おわかりと思いますが」

「わかりますよ。でもこのようにしか生きられなかった。だから家族は去った。これが当然の報いです。仕方のないことと思っています」

「あなたは相当なバカだ。あなたは自分の能力を生かさなくてはならなかった。神が与えた才能を勝手に放棄したんだ。仮に大蔵を去っても、いくらでも拾ってくれる会社や関係組織、あるいは研究機関もあったはずだ」

「もういまさら、どうにもなりません。もうこれ以上私を責めないで

ください」

実際それは遠い過去の繰言でしかなかった。それは心の内側に出口を失ってとぐろを巻く自家中毒にすぎないのである。

「いや、これからでも遅くないと思いますよ。あなたの学識を世の中に生かすお考えはないのですか？　いやそうすべきなんだ。あなたなら、これからだって一流になれる」

草野は微笑したが、田畑の青臭い正義感が逆に面映かった。

田畑はこう言った。

「あなたの中にひょっとしたら、武士道が深く根を下ろしていませんか？　あるいはそれがあなたにとって絶対的な宗教になっていませんか？」

草野は黙っていた。田畑は自分自身、他人事なのにまたしても熱くなったことを感じた。江口は田畑と草野のやりとりを終始無言で聞いていたが、相変わらず田畑らしいと思った。江口の表情に微笑が浮かんだ。

田畑は帰り際、言いすぎを反省したのか、草野に黙って深々と頭を下げた。

それから一週間後のことであった。都合を合わせ、田畑は片山を「すすむちゃん」に誘った。そして草野正雄をアパートに訪問した状況を細大もらさずに伝えた。

「草野正雄さんだけど、あの人意外と男の中の男かもしれないと思ったよ。未練を持たないんだ。確かに過去に自惚れがあって間違いを犯したかもしれない。しかしひょっとしてそれだって何らかの陰謀があって、はめられたのかもしれない。そんな気がしたよ。男の世界にはいつも醜悪卑劣な足の引っ張り合いがあるからな」

「わかった。頭に入れておこう。それを聞いて決心したよ。俺はこれから絶対に草野教授にアポをとるよ」

と、片山は言った。

その日二人は簡単に話を終え、再会を約して分かれた。

（三）

片山はそれから一〇日してついにアポをもらった。場所は草野教授の自宅である。それは渋谷区松涛にあった。敷地一五〇坪、建坪にして八〇坪はあるだろう、大邸宅である。教授との面会は、ある平日の午後一時、草野邸の応接間になった。やはり週刊誌を恐いと思ったの

かもしれない。教授は独身で、何人かの女性を使用人として置いていた。

「お待たせしました」

草野教授が応接室に入ってきた。いつもテレビで見るのと同じ顔がそこにあった。六〇歳に近い年齢のはずなのに、五〇歳前後にしか見えない。顔の色艶もよく、片山には教授の表情が自信に溢れているように見えた。面長の兄と異なり、やや丸顔で大きな眼と、固く結んだ意志的な唇が印象的だ。

コーヒーと洋菓子がテーブルの上に運ばれてきた。

「このコーヒー、トラジャですわ。特別にインドネシアから取り寄せたものですの。とてもおいしいですからどうぞ召し上がって。ま、お好みはあると思いますが」

「お気遣いありがとうございます」

内心、コーヒーを飲みに来たんじゃないよ。緊張感のない女だな、あるいは俺に対して高をくくっているのか、と片山は思った。

「本日はお忙しいところを大変恐縮でございます」

いつもと違う肩の凝るような言い方で、片山は挨拶をした。

「あまりお時間に余裕がないとのことですので、早速本題に入らせていただきます。本日はざっくばらんにお兄様である、草野正雄氏が生活保護を受給されている実態と贅沢な暮らしをなされている草野教授との関係をどう考えたらよいのか、というテーマを持ちましてお伺いしたようなわけでございます」

教授は露骨にいやな顔をした。

「何を突然おっしゃるのですか。あなたの言い方、それ失礼ですよ。週刊誌の記者はそこまで下劣下等なんですか。でも言っておきます。その件でしたら、先日も助手を通じて、草野正雄氏と私とは何の関係もないことを申し上げました」

教授の口調は厳しくなった。片山も負けていなかった。

「いやあなたと草野氏は兄妹の関係にあります。いくらあなたの方で仮に縁を切ったとおっしゃっても同じ両親から生まれた血のつながりを消すことはできません。過去正雄氏側で、あなたにとって恥ずべき行為をあったからといって、兄妹の事実は変わりません」

ふん、と鼻で笑いながら、片山を軽んじるように教授は言った。

「バカなことを言わないでくださいよ。そりゃ生物学的には血縁ですよ。ですが、お互いその存在を認めていないのだから、周囲が何と言おうと解決済みの問題でしょう？　そうじゃありませんか？」

この女、偉そうに何を言いやがる、と片山は思った。

「ほう、そういうことをおっしゃるわけですね。何故あなたはお兄様

に優しく接してやることができないのですか？　お兄様に優しくできないようなら、私はあなたを情け容赦ない人間として、あなた方の現在を過去と絡めて記事にしますよ」

だが教授は少しも冷静さを失わない。

「それはおやめいただきたい。はっきり申し上げて、マスコミでの私の立場がおかしなことになってしまいます。出版物も勿論出しにくくなってしまう」

「多分そうなるでしょうね。日本人というのは公私を分けて考えることのできない国民ですからね。その言動を信ずるには全てが不正と無縁でなければならない」

教授はしばらく沈黙した後、こう言った。

「何故私をそこまで責めます？　私が何をしたというのですか。私はふつうに生活しているだけです。兄自身が親や妹、それに最愛の妻子までを棄てたのですよ。悪いのは兄の方です」

そこまで言うと沈黙した。そしてしばらくしてから続けた。

「幸い兄との関係を知っているのはあなたのところしかない。なんとか、記事にしないでいただきたい。犯罪者の妹がマスコミで世界経済の分析をしても、なにやら胡散臭いものになってしまいます。それらを過去の問題と割り切らないのが世間一般です。口で言ってあなたにご理解いただけないなら、いくら支払えばいいのかおっしゃってください」

それを聞いた途端、片山の正義感に火が点いた。初めから予想はしていた。成功した人間はすぐ金で片をつけようとするのだ。金が動けば、片山の恐喝行為になる。そうなると、金ほしさのあまりに草野兄妹を週刊誌に取り上げようとしていると思われてしまう。もちろん草野教授は絶対に口外しないだろうが、片山自身が自分の心を裏切ることになる。それまで誇ってきた、あらゆる犯罪や諸悪から無縁の境涯に自分を置くという信念に傷がつく。

片山は決然として言った。

「断じてお金の問題ではありません！」

「それでは片山さん、あなたはこの問題をどうしようと考えておられるのですか？」

いよいよ核心だ、と片山は思った。

「それではお兄様の正雄氏を教授はどう考えておられます？　それを先にお尋ねしたい」

すると長年胸の奥底に溜め続けていた澱を、一気に吐き出すように教授は語り始めた。

「つまらない男だと考えていますよ。物事の道理を分析し対処できな

い哀れな人間ですよ。当然その結果として相応の人生がいまあるわけです。第一、検察に逮捕され、マスコミにも糾弾されたとき、すべて自分が悪いと自白し簡単に罪に服してしまった。度を超した潔さと思いますね。仮に不正義があったとしても、一時的な糾弾を乗り切れない弱い人間が世間をリードなどできるものですか。その時間を耐える必要があった。清濁併せ呑むなんてことは、小学生でもわかる話ですよ。闘う必要があったのです。自分を陥れようとする敵と敢然として戦わなければならなかった。ところが彼は逃げてしまった。鼻持ちならないナルシストですよ。敵前逃亡の卑怯者ですよ。それは、ひとりよがりの自己満足にすぎない。確かに自分の人生だから最後は自分で決めればよいのかもしれない。でもね、生きることは周囲に責任を持つことなんです。自分だけの問題ではありません。そんな軽々しく考えられては困りますよ。そんな子供でもわかることがわからない、バカな人間と思いますね。しかも隠遁生活に入るなんて狂気の沙汰です。私は今でも軽蔑していますよ」

教授の正雄氏に対する侮蔑の度は深かった。激しく罵ったのである。

だが片山は反論した。

「でもね、人間は完全ではない。いっときの迷いで失敗することだってある。それをあなたは許せないわけだ。人間なんて誤りを犯す動物でしょう？　そういう人間を許せないのだから、あなたは、すなわち自ら狭量と認めたことになるわけですよ」

それに対し、教授は強い口調で言った。

「問題をすり替えないでいただきたい。ここでは、私が狭量かどうかは問題ではない。草野正雄の問題です。いいですか、これはね、すべてが中途半端な行為ですよ。分不相応の自惚れが招いた自業自得ですよ。悪に徹するなら、徹して戦えばよかったと思いますよ。何故なら世間そのものがそんなことの繰り返しじゃないですか。

いや、そんなことより、お陰で私たち親族はどんな苦労をしたか、あなたにおわかりですか？　犯罪として自らが認めるから、それは犯罪になるのです。認めなかったら犯罪ではない。とくにこういう曖昧な事件はね。収賄に当たらないかもしれない。だから認めたらダメなんです。私はね、当時大学の研究室で非常に肩身が狭かった。厳しい状況に置かれたのです。あげく妻子も家を出ていった。それがいまの彼の姿です。それ以上でもそれ以下でもない、そう思いますよ」

その断固たる、やや感情的な様子に片山は言葉も挟めなかった。

「わかりました。教授あなたの考えも、妹として兄の窮状を無視されるということも。それでは仕方ない。あなた方のことを記事にしましょう」

「いや、それは繰り返しになりますが、ご勘弁いただきたい。あなたは一体何をしようとしているのですか？　あなたは間違っている。おかしい。私には理解できません。私にとっていまが重要なんですよ」

教授は苦渋に満ちた表情になった。

「あなたのそんな都合はこちらの知ったことではありません。人の情けというものを理解できない人に対してはこちらもそれに見合う自然の出方をしたい。よくわかりました」

片山はそれだけ言って、応接間を出ようとした。教授はあわてた。

「ちょっと待ってください。週刊誌に取り上げる理由ですが、それを確認したい。あなたは、私が貧困のままに兄を放置している態度を非難しているのですね？」

「教授であるあなたは確かに頭脳優秀、かつ冷静であって的確にすべてのことを対処できる。経済評論も立派だ。ただあなたの心には血が通っていない。私は正雄氏がたった一度の過ちで二度と陽の当たる場所に出なかった。この男らしい行為に感じるものがあります。もっとお兄様を大切にされたらどうですか。あなたに決定的に不足しているものは弱者に対する思いやりです。しかも正雄氏は現在腎臓病で苦しんでおられます。助けてやったらどうですか」

「私にとって、あなたの言いようは理不尽ですよ。人間は自ら選択した道を歩くんです。それが選択し、決断した責任というものじゃないですか。私が兄の不始末をどうして面倒をみなければならないのですか？　あなたは私に兄を経済的に援助せよ、というのでしょう？　金銭面ではそんなことは容易です。しかしそのことは再び、あの軽蔑している兄と兄妹の関係に戻るということになる。すなわち兄の行為を認めたことになる。それはできない。兄は兄の道を行けばいいのです。そんなこと簡単に受容れられませんよ」

一方片山の言葉は熱を帯びた。

「教授、いいですか。私は経済的な援助だけを言っているわけではないんです。お兄さんは、いまたった独りで生きているんです。肉親のぬくもりを必要としているんですよ。経済的援助はその第一歩です」

教授はそこで黙った。しばらくしてから続けた。

「片山さん、あなたの突然の言い分は、私の価値観からすると、到底受容れがたい。もう少し私の状況も考慮していただきたい。いまは気持ちの整理がつきません。時間が必要です。軽蔑している兄を受け容れることができるかどうか、それは他人が考えるほど容易ではないんですよ」

教授はそう言い、片山との話が平行線になっていることを意識した。

「そうですか。そうおっしゃるのでしたら、少し待ちましょう。です

が、もしも受け容れることができないのなら、そうおっしゃってください。ご返事は、一ヶ月もあれば十分でしょう。私はこれで失礼いたします」

片山は一方的にそう言って、草野邸をあとにした。

二週間後、田畑と片山は「すすむちゃん」にいた。例のカウンター席である。

「妹の教授だけどね、自分のやっていることは絶対に間違いはない、という感じだったな。いい感じではなかった。少し脅した。実際お兄さんに対する思いやりが示されないなら、週刊誌に載せるよ。教授のマスコミでの立場など、俺の知ったことではない。あと二週間連絡がなかったら掲載する」

と片山が言った。田畑は首を傾げた。

「だけどさ、この兄妹の件はすでに編集長に報告しているんだろう？掲載しないわけにいかないと思うよ。　第一お前のところ、最近発行部数が落ちているというじゃないか。ちょうどいい話題だろ？」

「いや、編集長にはまだ話していないんだ。もうひとつ別の事例があってね、そっちは話した。だから草野教授の出方によってはボツにしても差支えない」

「そういうことか。それはよかった。それに、もしも教授が正雄氏の面倒をみるようになったら、彼は生活保護受給者でなくなるし。自信を持って世に出たらいい。世間へ自らの主張なり、思想なりを再度公表していくべきだと思う。それだけのことが出来る人だよ」

「あと二週間さ。二週間待つ。それで決断するよ」

「多分、教授は承諾の連絡をしてくると思うよ。だけど片山、お前相変わらず商売が下手だな。今回はどこでそうなっちゃったの？」

「どこかな、多分草野正雄さんの生き様がわかったからだろうな」

（四）

片山と田畑が二度目の情報交換をしてから、さらに二週間が経った。その日、待っていた連絡が田畑に入った。また「すすむちゃん」で会いたいという。田畑には先約があったが、丁重にキャンセルして片山に会いに行った。

仕事を終えて店に入った田畑が、カウンター席に目をやると、すでに片山が手酌で日本酒を飲んでいた。

「おお、来たか。待ってたよ」

片山は田畑の顔を見ると、嬉しそうな顔で開口一番に言った。
明るい表情の片山に、田畑は少し安心した。
「その顔は事が思いどおりにすすんだ証拠だな」
「まあそうだ。教授から連絡があった。お兄さんの生活費の件、真剣に考えると言ってきた。兄妹の間でこれからどういう話になるか、それはわからないがね。だから田畑の方でも続けてウォッチングしてくれよな」
「わかった。これで落着となれば、週刊誌の掲載もストップだな？」
田畑が週刊誌掲載を気にした。
「勿論、掲載は止めるさ。約束だからな。ところで、そんなことより草野正雄さんの東北時代の話、あれわかったよ。いろんな伝手を使って調べたんだ。その結果、俺の想像だが、あれは草野さんを陥れる陰謀だと思う。衆に抜きん出れば足を引っ張る人間が必ず出てくる。目立ち過ぎることはリスクを負うことだと思ったほうがいい。それを田畑に話すよ。今日はこの話だ」
田畑の方でも、草野正雄に面会して以来、彼がどんな人生を辿ったのか気になっていた。
田畑は、店主に酒や肴を一度にたくさん注文した。話が始まってからの中断は避けたい。
「田畑はどう思う？」片山はそう言って、この話しを始めた。
「つまり、人間ってやつは、どんなに頭のいい冷静な人間でも周囲が自分を称賛し続けると判断力を失ってしまうのだと思う。有頂天になって、周囲が見えなくなってしまう」
「それはわかるな。草野さんもそうだったのか」田畑が肯いた。
「彼はとにかく優秀だ。それは自他ともに認めるレベルだったな。頭は切れ、弁が立つ。文章力にも優れている。経済論文もよく書いた。ある時には、その論文が次官の目に留まって、直接電話で質問があったくらいだ。前々からプリンスの名をほしいままにしていたし、東北の財務局長なんかも彼には一目も二目も置いていたから何も言わない。勿論それ以外の周囲の人間も同様だ。となるとどういうことになると思う？　大抵の人間は天狗になる。恐いものなしとはこのことだよ。草野さんも例外ではなかった。そこが判断力に優れている彼でさえ、周囲が見えなくなる原因だったと思う。
そのうえ彼の周囲には人が群れた。なにしろ将来の次官候補だ。今のうちから関係を作っておきたいと考える銀行や証券会社やその他諸々の金融機関がたくさん出てきて不思議はない。そのとき間違いなく、周辺は彼を中心に動いていたな。天狗だよ、彼は間違いなく天狗になっていたと思う」

田畑も同意した。
「確かにそうだな。草野さんはいろんなものを見失ったかもしれない。絶好調は諸刃の剣だな」
「そして取り巻きの金融機関の連中が入れ代わり立ち代わり、ご機嫌とりに夜のご接待に及んだ。人のいい草野さんは、毎晩付き合った。日付が変わらないうちに帰宅することは稀だったと思う」
「へーいいな。俺もそんな身分になりたいよ」と、田畑が半分羨ましそうに言った。
「いいと思うかい？　俺はそうは思わないよ。これが結構大変なんだ。接待を受ける金融機関を公平に扱わないといけない。彼には人のいいところがあったから、どことでも平等に付き合う。これが結構体力を必要とする。健康を損ねることだってある。草野さんの現在の病気は当時に遠因がある。俺にはそう思えるな」
片山が当て推量に近い分析をした。田畑が質問した。
「毎晩の接待はわかったよ。それで、足を引っ張った奴はどんな奴だ？」
「それだ。さっき草野さんがたくさん論文を書いたという話をしただろ。その論文の中には革新的なものが非常に多かった。イギリスで始まった金融ビッグバンのすぐ後を追いかけるように、それまでの金融界に根強くあった各種規制の撤廃を主張し始めたんだ。第二次橋本内閣ではじめて提唱される、その八年前のことだよ。日本版の金融ビッグバンだ。銀行の護送船団方式についても、批判を加えていたし、バブルについてもその危険性を喝破していた。彼は慧眼だったよ。
さてところでだな、G銀行、知っているだろう？　東北では老舗の銀行だ。地銀としては規模も大きい。だが、そのときすでに金融の自由化を問題なく受容できるほどの体力が意外にもなくなっていたんだ。ここが問題だ。規制なしのまったくの自由では逆に困る。それでどうしたか？　G銀行は何とか草野さんを排除できないかと考えた」
「おいおい、危ないな。そんなことで排除されちゃうの？」
「そんなことで、はないだろう。大変なことだよ。誰が言い出しているかが問題なんだ。プリンスが言っているんだよ。次官にも影響力のある人物が物申している。G銀行が懸念するのも無理もない」
片山の灰皿はすでに山のようになっていた。話が佳境に入って、またしてもチェーンスモーキングになってきた。そのとき料理がカウンターに次々と並べられた。それは田畑が大量注文した料理だった。しかし二人とも、料理にも、そして大量のたばこの煙にも無関心になっていた。
田畑は片山をせかすように訊いた。
「すると、陰謀の犯人はG銀行か？　何をやったんだ？」

「草野さんの当時腹心の部下に話を聞くことが出来た。それによるとG銀行関連の証券会社が主幹事となって、ある企業を東証に上場させることになったそうだ。その企業を仮にA精機工業としよう。当時はバブルの兆しが徐々に出始めた頃だ。A精機工業の規模は小さかったが、技術力はあるし将来性に富んだ一流の会社だったから、上場すれば株価上昇は間違いなしだ。さて、ここからは俺の推測だ。草野さんはその未公開株をかなりの株数を受け取ったように思う。思うというのは確証がないからだ。いろんなことを突き詰めていくと、未公開株はその証券会社からG銀行経由で草野部長に渡ったようだ。だが何故彼は受け取ったのか。何故そんなバカなことをしたのかがわからない」

片山はたばこを消し、今度はコップ酒を飲み干した。

「さっき片山が言った、冷静な判断力の欠如がそんなところに現れたんだろう」

田畑がそう言うと、片山が続けた。

「草野さんという人は、競争の激しいエリートコースを歩む人にしては結構無防備だったね。疑わなかった。ふつうなら、どんなに親しい人間からも金品は受け取らないし、疑ってかかるものだ。それに国家公務員たる者、天下の公僕だ。私利私欲で動いてはならない。ま、そうは言っても、現在は私利私欲ばかりの人間が跋扈しているがね」

そこで田畑が念押しした。

「ところが、彼に魔が差した？」

「そうなんだ。草野さんは多分感覚がマヒしていたんだ。事の重大さを認識していなかったに違いない。まったく屈託がないんだ。不正の認識がなかったのだと思う。その証拠に上場後暴騰した株を換金していない。つまり目的は金ではなかったのだ。こう言っては語弊があるが、ほんのお付き合いのつもり、そんな感じで受け取ったのではないかな。犯罪行為と思っていないから、罪の意識が初めからない。そしてその後数ヶ月は何事もなく過ぎたんだ」

ここで、片山が沈黙した。田畑は片山に酒を注いだ。

「それで？」

「動いたのは地元新聞だった。その社会部が動いたんだ。『A精機工業未公開株を複数の大蔵官僚が不正取得か？』　という見出しのスクープになった」

「なんだ新聞かよ。これは厄介だ。草野さん、窮地だな」

「そしてだな、記事によると不正取得は草野さんだけではなかった。草野一派と彼の主張に同調する高い地位の人物もいた。だが、それにしてもそれらの事実がどうしてわかったのか？　情報漏洩の犯人は誰か？　内部告発かもしれないが、そこがわからない。永遠の謎だ。新

聞はニュースソースを絶対に明かさないからな」

ここで田畑にひとつの疑問が生じた。

「ただ、ここで疑問が生じるよ。検察からの追及があったとき、草野一派はともかく、草野さん自身の口から、株を手渡したG銀行側の具体的な人物の名前は、何故暴露されなかった？」

「そうだね、草野さんは一切言わなかった。何故か？　おそらく頭取かそれに準じる役員クラスが下位者に命令して手渡したと思う。草野さんは手渡した人間の名前を言っても仕方ないと考えたに違いない。大物は絶対に表面に出ない。手渡した事実が後で露見しても、そうした連中は全く知らぬ存ぜぬを通すし、部下が勝手にやったことだと言うだろう。首を切られるのはその下位者なんだよ。どうせトカゲの尻尾切りになる。草野さんはそれを見通して、黙秘したんだろうな」

片山の説明に、田畑は納得した。

「わかった。そう言われれば、草野さんの沈黙も理解できるな。それにしてもさっき片山が言ったとおり、陰謀だと俺も思うよ。G銀行による草野一派の追い落としだ。多分内部告発ではない」

「そうだろう。確証はないが、そのように思えるよな。残念だよ。だから結局は不正によって弱みを見せた方が負けなのさ。悪いのは株をもらった草野部長ということになる」

片山は残念で仕方ない様子であった。二人は黙って、コップ酒を飲み始めた。

そして片山が沈黙を破って、ポツリ呟くように言った。

「田畑も言っていたけどな、草野さんは神から与えられた才能を道半ばにして自ら放棄してしまったんだ。彼にとっても、大蔵省にとっても大きな損失だったな。そう言って間違いはないだろう」

片山はまた黙り込んだ。そしてまた手酌で飲み始めた。

田畑が考え込むように言った。

「草野さんのことを思うと、実に残念で仕方ない。それにしてもバブル崩壊後の日本は惨めだったな。ひょっとして草野さんが大蔵に残っていたら日本は違っていたろうな」

「うーん、でもそれは、なんとも言えないけどな」

片山がそう言った。

二人にとって、その夜は長くなりそうだった。

外気は、日中の真夏日の暑さをそのままに、熱帯夜となっていた。

〈了〉

みんな笑え

いんば華子

これは、銀河系を離れた遥か宇宙の彼方に、ちょうど太陽系の第三惑星〝地球〟とまったく同じような環境にある星系があり、偶然にも生命誕生から人類の歴史までほぼ同じ歴史を辿った、あたかも近接したパラレルワールドかと見紛うほど類似した地球型惑星上での逸話です。実在の名称と同じものが多く出てきますが、銀河系の端にある太陽系第三惑星〝地球〟での出来事ではないのです。宇宙に神秘がつきもののように、宇宙には天文学的数字の偶然もあるのです。

こちらの世界では、私たちの世界でのいわゆるおとぎ話、フィクション、ファンタジーといった類のものが一部現実化し、史実として認識されています。複雑な螺旋を成し、現実と幻想の行き来を繰り返す様相を見せますが、これが彼らにとっての現実なのです。

チェーザレ・ロンブローゾが『生来的犯罪人説』を発表したのは一八七六年のことである。

説によると、罪を犯す人間には身体的・精神的特徴があるという。例えば大きな顎、狭い額、異常な歯並び、鷲鼻（わしばな）、長い腕、小さな脳、刺青を彫っているなどがあげられる。その顔つきは、ヒラメに似ているという。また精神的特徴として痛覚の鈍麻、強い自己顕示欲などがあげられる。

このような特徴を持った人間は、文明社会に適応できず、将来犯罪者になる宿命にあるという。

この説は発表後の調査において、犯罪者とそうでない者との間に有意な差は認められなかった結果が出ている。ダーウィニズムへの傾倒があった当時、犯罪者の内約七〇％が生来的犯罪人とされたが、後に三五％～四〇％に修正されている。

現在『生来的犯罪人説』は、僅かな信奉者が残るのみで、世間一般には疑似科学として受け入れられている。

『生来的犯罪人説』発表後、百年以上も経った現在の印西市が、人類のコペルニクス的転回の起点となった。

木下恵介は、十九歳のどこにでもいる一般家庭の大学生である。

ある日、大学の授業が午前だけで、バイトも友達との約束もなく、暇を潰すあてもなく、仕方がないので家に帰った土曜日だった。少し昼には遅い時間だが、家には両親がいた。母はスーパーのパートの仕事が休みだった。父の仕事も土日が休みになる。高校生の妹、八重は、部活で家を空けていた。

ＪＲ木下駅で電車を降りた恵介は、自宅まで徒歩約十分の道を気だるそうに歩く。冬の厳しい時期は終わったが、日の高い昼間も厚手のコートは手放せない。そうなるとこのたった十分の平坦な距離も、険しい山道のように感じられてしまう。

昼間に帰ることは久しぶりだった。帰宅途中すれ違う人々は、ほとんどが昔からの知り合いである。自転車に乗ったおばさん、庭の木に水を与えるじいさん、誰もが恵介を赤ん坊の頃から知っている。

恵介は、近所の人と挨拶をするのが常だった。近所からは良く可愛がられ素直に育ったので、元気よく挨拶をすることは習慣になっていた。しかし今日に限って近所の雰囲気が違っていた。デキシーの工場がある角を、郵便局の方へ曲がってから既に五人は知り合いとすれ違った。しかし、誰も恵介に話しかける人はいなかった。こんな日も珍しくあるのだろう、と恵介は考えた。そうこうしているうちに自宅は目の前だ。

古い住宅地の一角、瓦屋根の一軒家。インターホンは壊れていて、回覧板を持った近所の人は玄関前で呼び掛けるのが通例である。この鄙びた昭和の空気を纏った瓦屋根の家が恵介の自宅だ。

玄関扉を開けてただいまと言ったが、物音一つなく、屋内に人のいる気配はなかった。車庫に車が残っていたから、両親は出かけてはいないはずだ。

「父さん、母さん、昼ごはん食べてないんだけど、なんか残っている？」

恵介は廊下を通り、居間の扉を開けた。するといつも食事をするテーブルには父と母が向かい合って座っていた。窓が東向きの部屋には、もう僅かばかりの太陽光しか差し込んでいない。薄暗く、二人の表情も陰っていた。

「どうしたの？　電気もつけないで」

壁のスイッチを押すと、蛍光灯の光で部屋全体が満たされた。

「恵介。帰ったのね」

「恵介、お帰り」

光センサーの付いた人形のように、母と父が顔を上げて、帰ってきた恵介に反応した。

「なんだか二人とも怖いよ」

父と母は顔を見合わせた。そして父は深呼吸をすると、腕を組んだ。

「恵介、大事な話がある。少しここに座りなさい」

「なに？　どうしたの一体？」

木下家は、家族仲がよかった。笑いは絶えず、それぞれの誕生日会も欠かしたことはない。このような重苦しい空気が漂ったことは一度もなかった。

ありがたいことに父の仕事はそれなりに順調で経済的に困っているほどではない。母のパートも、子育てが終わって時間を持て余していることから始めた小遣い稼ぎだった。恵介のバイトも、小遣いぐらい稼いでやるという、男の面子からの理由だった。このような状況をもたらす原因を思いつくことはできなかった。家族の心配事は、今後の恵介の就職先や、八重の受験だ。しかしこのような心配事は、子のいる家庭では当たり前のことだ。別段、木下家に限られたことではない。

「今日、市からお前宛てに郵便が届いたんだ」

「郵便？　あ、年金とか、かな」

「年金じゃないわ。年金のことは日本年金機構からくるのだから。学生納付特例制度の手続きは、市役所の国保年金課でも出来るけどね」

「じゃあ、なんだって言うの？　二人とも本当におかしいよ」

父は開けるぞと言って、木下恵介様、親展と印刷されていたＡ３定形封筒を切った。印西市のロゴとカラー刷りならヴィヴィットピンク色をしているサイのゆるキャラがプリントされた封筒からは、いかにもお役所的なお知らせのプリント一枚と、甲乙や署名欄のある用紙が二枚、表面が滑らかに加工されたイラストが一枚出てきた。

「恵介、ここにサインして、拇印を押しなさい」

父は、万年筆と朱肉を目の前に置いた。

「これって、どうして？　僕が、そんなこと」

文書を読んで理解ができなかった恵介は、無意識に母の顔を見た。

「恵介、あなたは理不尽って言葉を知らないでしょう？　だから戸惑うと思うのだけど、ここに書いてあることはすべてあなたの宿命なの」
「でも、どうして、どうして僕なの？」
「少しは落ち着きなさい。驚いているのだろう。しかし、これから先は今以上だ。時間がないから、早く書くんだ。署名と印が押されないと、この先を話すことはできない」
　恵介は震える手で万年筆を掴んだ。自分の名前を書き、言われたとおり拇印を押した。
「よくやった。よくやったぞ、恵介」
「あなたの勇気、見せてもらったわ。もう立派な大人ね」
「そんなに褒めないでよ。照れるから。……そうじゃなくて、一体これは何？」
　父は、席を立って置時計の隣に置いてある鏡を持ってきた。恵介はその鏡を覗いた。
「お前が、その顔をしているからだよ」
「僕の顔が、一体なんだって言うの？　なんでそんなことに市が首を突っ込んでくるんだよ」
「恵介、印西市に首はないわ」
「母さんは黙っていてよ。父さんと話しているんだからさ」
　恵介は鏡に映った自分を見つめた。ナルシストほど気に入っているわけではないが、自分の先についていてアイデンティティの象徴として恥ずかしくない顔だと思っている。
「その説明文書にも書かれていると思うが、これは印西市が定めた『青少年保護育成条例』と『迷惑防止条例』による粛清だ。印西市に住民票を置き、ここで生活する限り、この条例に逆らうことはできない」
「逆らうことはできないって、僕は二人の息子だよ。こうやって十九年一緒に暮らしてきたじゃないか」
　戸惑う恵介に、父は口調を厳しくして言った。
「バカ者。鏡をよくみろ。お前の顔、死んだ親父にそっくりだ。いわゆる隔世遺伝だ。あの親父は警察に捕まりこそはしなかったが、とんだ迷惑者だった。下着泥棒、女子中学生へのストーカー行為、早朝の騒音、犬の糞の不始末……」
「父さん、それは捕まえておいた方がよかったよ」
「とにかく、当時はそれほどこれらの条例に馴染みがなくて重視されていなかったんだ。ところが現在はどうだ？　社会に適応できていない人ばかりじゃないか。世間は異分子が堂々と街を闊歩している事が不安でしょうがないんだ」
「わかったよ。その～この顔が、その迷惑防止条例に触れるってこと

は。でも、青少年保護育成条例ってのはなんで？　本来は守られる方じゃないの？」

恵介はひとまずは納得した態度を示した。この先を聞くにはこちらがわかった後でなければ、きちんとした説明が聞けなさそうだ。けれどもそうやすやすと受け入れるつもりはない。話の進みから何とか突破口を見つけて、この流れを変えなければならない。理不尽にも限界があるというものだ。

「恵介、あなたはもう一九でしょ。対象外よ。もう守られる存在ではないわ。あなたたちのような、生来的犯罪人者から、私たちは青少年を保護しなければならないの。『セーラー服の中の秘密』とか『たべごろ黒ストＯＬ、丸木戸課長とアフター５』とか『男の汗～魅惑のコロン』とか、イケないＤＶＤ作って資金繰りの温床にされてしまっては本末転倒だからね」

「だからって、息子をそうやって放り出すの？　信用しろよ。そんな映像作らないよ。いつも見てんのもそんな寸止めどころじゃないよ。今年で僕二十歳だよ！　てか、『男の汁』……って毛色違くない？　なんだよ、今までは家族ごっこかよ」

全身から力が抜けた。そして同時に憲法に記された言葉を思い出した。最近憲法論議が全面的に再開されたせいだ。ニュースや新聞をちらりと見ただけでも、情報の断片は届く。

「公共の福祉。基本的人権」

「なあに、やだ、どうしたの恵介？　それより、『汁』じゃなくて、『汗』よ。『あーせー』」

母は恵介の肩に手を置き、正気を疑った。

「ねえ、僕が公共の福祉に反しない限り、僕は普通の生活を続けていいんじゃないの？　それに、僕の基本的人権はどうなるの？　それに地方自治体の条例は、憲法や国の法律と矛盾してはいけないはずだ。民主主義国家の日本でそれはないでしょ」

恵介は勝ち誇ったつもりだった。二人を論破したのだ。すぐに目の前の文書は無効となる。市役所に文書を持っていって、文句を言ってやる。根拠があってもの申すのだから、市役所職員を悩ますクレーマーではない。

どや顔になって鼻息を荒くしていると、暫し沈黙の後、二人がせせら笑った。

「ははは、民主主義国家か。恵介も、少しは勉強しているみたいだね。しかしだね、この日本に一度でも民主主義があったか？　選挙の投票率は国政、地方に関わらず低迷し、民主主義なんて掲げているつもりでも、結局は国のお偉いさん達が民衆の意見を踏み倒して国の中枢だ

けで決めているようなもんだ。我欲と保身のために、名もなき市民が倒れるのを平気で見ているんだ。それは火縄燻ぶるバスチーユ、フランス革命期のパリ市でも、二十一世紀の印西市でも同じことだ」
「なんだよ、偉そうに」
「その証拠に、お前はここにサインした」
恵介はようやく自分の犯したろくでもない失態に気づいた。驚かされて、サインをした後の身の保障について文書を読んでいなかった。恵介は文書を声に出して読んだ。
「本日の日没より、粛清を開始する。ここにサインをし、印を押した乙は、日没より日の出の間、印西市民の資格を失効する。なんだよ、これ」
「昼間は人目があるが、夜は大変だからね。君たちに監視が付くんだよ。しかし監視するために、我が家のプライバシーが侵害されては困るからね。その家の中での公共の福祉に反するから、家から出ていってもらうよ」
「それが一番ねって、話していたのよ。ほら、ここにあなたたち用の宿舎もあるから」
母は、添付されていた地図を出した。印西市のニュータウンから離れた滝野の里山に、アパートが用意されているそうだ。いつ建設したのだか知らないが、そこには二百人は収容できそうな無機質なコンクリート製の建造物の写真が写っていた。小さな窓がぽつぽつと等間隔についている。ハチの巣のようにも見えるそれは、都会のカプセルホテルを彷彿させた。
「もちろん、費用は印西市の税金から出ているのよ。無駄にしないでね。それに、昼間の間は堂々と市内を歩くことはできるのよ。贅沢を言ってはダメね」
「それじゃあ僕の基本的人権はどうなるんだ」
「住む場所もあって、昼間は印西市民、大学だってもちろん卒業してくれよ。学費高いんだから。これだけ条件がそろっていたら、人権も権利もなにもないだろう。少しばかり、行動が制限されるだけさ。もちろん、夜間は印西市民ではないのだから、他の市に行ってくれても構わないよ、いやむしろそれがファイナルアンサーだ」
父と母がこの条例をいとも簡単に受け入れていることが信じられなかった。可愛い息子のために動いてくれよ、と訴えるような歳ではないが、両親の冷酷な態度に打ちひしがれた。
「二人はそれでいいのかよ」
「私たち、もちろん辛いのよ。この条例はおかしいと思うわ。けれどもそれで守れるものの方が多いのよ」

母は悩める乙女のように、目じりに涙を浮かべた。一昔前の少女漫画のように頬に右手を寄せ、小指を立てている。親の涙は卑怯だ。

「非科学的だ。条例の裏付けにされているロンブローゾの説なんて」

恵介は母に言い返せる言葉を持たなかったので、客観的事実を見せた。リビングに置いてあるデスクトップパソコンを起動させて、ググってみた。ウィキペディアをクリックし、ほら見ろとばかり二人に液晶画面を見せた。少し前、大学の講義でとったノートも引っ張り出して来て、二人の前に並べた。

「いくらそうでもな、この条例、違反するとそれなりに罰金やら懲役やら、困ったことになるんだよ。まだ二十歳にもならないお前に強いるには厳しい条例だと思う。でもこの国には民主主義がないから、過半数のお偉いさんが、統計的に効果がないと認めるまで、頑張るしかないんだよ」

父は恵介の肩に手を置いて言った。

「それにお前の顔、左右非対称でなんかヒラメに似ているぞ。ほら、ここにも罪を犯しやすい人物の特徴として描かれている」

極めつけとばかりに父は鏡も横に置いた。

恵介は印西市が送ってきたイラストを見つめた。『左ヒラメに右カレイ』と太字のゴシック体で題字が書かれ、その下方には自分自身が描かれていた。

恵介は二階の部屋まで駆け上がり、早速荷物をまとめた。日没まで時間はまだあったが、悠長な行動をとってはいられなかった。ボストンバッグと旅行用のキャスター付きスーツケースに一週間ほどの衣類や生活に必要そうなものを詰め込んだ。

市内の里山に用意されたアパートにも電話をして、今夜から入れるか確認をとった。電話を受けたアパートの担当者は、まったく急で困るよと、恵介だか条例の決定だかに不満をこぼしながら部屋番号を伝えてきた。恵介も担当者同様、好きでこんな状態に陥っているわけではない、と誰かに言いたいものだが、生憎それに同意してくれそうな人々にはアパートでないと会えなさそうだ。

ふと、夜中に出歩いて捕まって、警察にこの条例の決定について不満をぶつけようと思った。しかし、そんなことをしては公務執行妨害だとして、余計に相手方の権力のままになってしまう。

自宅から歩いて五分ほどの所にある市役所に乗り込んでみようとも思ったが、一体どの課に向かって『頼もう』と叫んでよいのかもわからない。受付で聞く方法も選択肢にあったが、あのイラストが市から送られてきたことを考えると、市内の掲示板や施設は恵介の顔で溢れ

ているに違いない。そんな場所にどう行けるというのだろう。恵介に残された今日の過ごし方は、アパートに大人しく収まる事だった。

夕方、四時になって日もだいぶ傾いた。今日に限って斜陽が温かくも、また憐憫を帯びた照明効果を持っていた。日没を考えると余裕を持って家を出た方がいいだろう。市の防災無線からは『家路』が流れた。ドボルザークの交響曲第九番第二楽章だ。この曲を自宅で聞いて、これほどの悲壮感を味わう日が来るとは思ってもみなかった。

一階に下りて重い荷物を肩にかけ、スーツケースを引いた。玄関まで父と母が見送りに来た。

「今日は行ってらっしゃいを言うわね」

「これからはこれが日課になるだろうが、慣れるまでは頑張れよ」

妹の八重はまだ帰っていなかった。

「八重には、また会おうと言っといて。荷物はまた取りに来るから」

「八重はあなたに似なくて本当によかった」

母は安堵し意図せず呟いた。しかしこの一言は、恵介をどん底に陥れた。かろうじて薄明かりで足元の見えていたところに、一本の紐を引いただけで暗幕が下り、漆黒の世界に塗り替えてしまった。親の言葉は激しく子を動揺させる。

「ほれ、早くしないと一日目から厄介なことになるぞ」

玄関を閉める時、母の肩を抱く父の姿が見えた。恵介がいなくなったことで、三人の絆は深まるのだろう。しかし恵介にとっては、血縁も糞もない。

すっかり条例を遵守することを決めた両親と違い、妹の八重は温かく兄である恵介と話をしてくれるのではないかと僅かな希望があった。血を分けた兄妹だ。もう身内と言える可能性のある人は、妹を除いていないのだ。八重は幼い頃お兄ちゃん子だった。彼女なら、きっと冷たくあしらうことはないだろう。そうであると考え、その空しい願望に縋るしかなかった。

恵介は、足が鉛のように重くなろうとも、また自宅に戻らなければならない。荷物を取りに行かなければならないし、昼間だったらご飯を食べに帰り、貧乏学生は小遣いを節約しなければならない。結局家はここにしかないのだ。

恵介は、毒虫に変身して家族から捨てられたグレーゴル・ザムザの最期よろしく、冷たい影を背負ってひっそりと家を離れた。

アパートに着くと、ヒラメのような顔をした人間が二十人ほど屯（たむろ）していた。

滞在者は部屋に行く前、一階のホールに集まるように指示されてい

た。どの人もまるで、恵介の両親で、恵介の兄弟で、恵介の従兄や親戚になりそうな人ばかりだった。皆お互いに顔を見合わせて、親戚の葬式や結婚式にいたのではないかとしげしげ観察し合っている。目を合わせては、見ていなかった風を装い、誰もが空中に舞う見えない蝶々を追いかけているような、夢遊病者に集合がかけられたような、なんとも異様な光景だ。

これからこんな人たちと生活を送るのかと思うと、少しうんざりした。しかしどの人も、切り裂きジャックやハンニバル・レクター教授のように犯罪史に残る凶悪犯のような、あるいは万引きのような軽犯罪をするような、あるいはオレオレ詐欺の組織を作るような、銀行で人質をとって金を要求するような人々には見えなかった。アメリカのＣＩＡやロシアのＫＧＢにハッキングを仕掛け、敵対する国家に情報を売り渡す、ミッションインポッシブルな人間も見られない。クレプトマニアやパイロミニアのような精神病を持った人は、外見からは分からない。

しかし彼らはみな恵介と同系統の容貌で、印西市の印西市による印西市のためのむちゃくちゃな条例によって個人の生活を壊された人々だ。人民を印西市に変えるだけで、これほどにも腹の立つ体制になるのだ。同情するなという方が無理だった。

恵介も他のヒラメと同じように、親戚がいないかと周りを見渡した。すると、目の合った同い年ぐらいの男が、ずんずんと走って近づいてきた。

「キミ、もしかしたら小学校で一緒だった恵介君じゃないかい」

誰だか見当がつかず、どう反応していいのか困った。失礼にならないように、恐る恐る答えた。

「ごめん、誰だかわからないんだけど」

「ああ、俺は中学から私立行ったから、覚えてないのも無理ないか。覚だよ。覚」

恵介は口から覗いた覚の八重歯を見て気がついた。小学校の時の、クラスで成績優秀だったやつだ。決して聡明とは言えない顔つきをしていながら、塾の全国模試で上位に入っちゃったりするいけ好かないタイプだった。その顔つきは、ヒラメに似ていた。

「覚！　ああ、覚えているよ。お前、住所はまだ印西市だったんだな。本当に厄介な条例だよな。それに、お前が除外されるわけがない」

「仕方ないさ。生まれつきだもの。でも、俺は住民票を移すことを決めているんだ。すぐに出ていくよ」

「僕は、実家しかないから動けないんだ。外に出られればいいんだけど。それより家族はどうしてるの」

「市外の親戚の家さ。市村合併のせいで、ほとんどの親戚が市内だろ？苦労したぜ。場所がないから俺だけはここで世話になるんだ」
「そうか。おまえんちはみんなヒラメだもんな」
「そういえば恵介君、市が配ったイラストにそっくりだよね。モデルにでもされたの？」
恵介はむっとした。自分がヒラメのような顔つきになったのは、覚より後のことだったと思う。小学校の時、誰も覚と僕の顔が似ていると言った人はいなかった。恵介は役所の正式な手続きにより、そんな奴と同じ仲間にされて胸糞悪くなった。
「知らないよ。偶然、似ていたんだ。僕だってびっくりしたよ」
「まあ、キミの顔が平均的ってことなんだろうね。俺は少し面長で瓜実顔だし。ところで、思いもよらず、自分の顔が市内に張り出されるってどんな気分だい？」
「最高だね」
恵介はありったけの皮肉を込めて言い放った。しかしここでギスギスしたって何も変わらない。市内は恵介の顔でいっぱいで、暫らく恵介の顔を平均値として、多種多様なヒラメ顔人間と過ごすしかないのだ。

ある日、八重からメールが届いた。恵介は一階のホール横にある百人は収容しうる食堂に一人で座って、日が落ちる時間を待っていた。恵介が市の宿泊アパート住まいを初めて半年たったころだ。恵介は何度か実家に帰ったが、大抵昼間の時間、八重は学校か部活、友達と出かけているとかで家にいることがほとんどなかった。
こんなにも、妹に会いたいと思うのは、初めてのことだった。普段は何気なしに暮らしていた妹に、こんなにも同情が欲しいと思ったのもはじめてだった。相変わらず両親は善良な市民の顔をして、息子を市内の里山に押し込めていた。八重からのメールに、恵介は涙が出そうになった。
『お兄ちゃんが私の不幸ももってくれていると思うの。お兄ちゃんがいるからどんなに嫌なことがあっても頑張ろうと思える。だから、お兄ちゃん頑張ってね』
八重、君に会いたい。恵介は携帯電話を握りしめた。
外界をまったく意識していなかった恵介に、眉間に皺ができているよ、と声をかけてきたのは覚だった。切実な想いが募り、表情にまで出ていたようだ。
「覚、僕はどうしても妹に会いたいんだ。見てくれよこのメール」
恵介はメールの画面を見せた。

「恵介君、キミはこれを見て感動しているのかい？　これ、キミへのあてつけだとわからないのかい？」
　蔑む笑いを浮かべた覚に、恵介は苛立った。やはりこいつとは馬が合わない。
「なんてことを言うんだ。僕の妹はね、そんなひねくれた性格をしてはいないんだよ。優しくて、小さいころから兄想いだった。覚はそんなふうに考えるから、ヒラメのように不格好な造形になったんじゃないのか」
「失礼なのはキミの方じゃないか。癇癪起こさないでくれよ。俺の方が冷静沈着で、社会に適応してゆける性格と能力をもっているんだから」
「そんな誇大な自己顕示欲を持ったところが、罪を犯す人間の特徴だと更生プログラムで習ったぞ」
　恵介をはじめアパートの住人たちは、時々更生プログラムという、千葉県警や印西市の企画した講演を聞かされることがあった。いずれは隔離ではなく共生を目指すためであるという。しかしアパートの住人はポツリポツリと増え、また、住民票を移す手続きができたものからいなくなっていくという、いたちごっこが続いていた。早めに退去すると言っていた覚は、何故だかまだ残っている。他に知り合いもいないので、恵介と覚は小学校の時以上に話をするようになっている。
「おっと、不毛な議論はここまでだ。俺はね、キミに一目置いているんだよ。アパートの中にはたくさん人がいるけど、俺と恵介君は若手でこんな所にいて不自由な生活を続けるわけにはいかないだろう？　恵介君はそのお優しい妹に会いたいだろうし、俺だって自由になりたい」
　恵介はその点には同意した。僕たちは自由になりたい。条例に縛られず、日の落ちた時間も自由に印西市内を闊歩できる権利が欲しい。
「僕もそうだ」
「それで提案なんだけど、少し印西市をおちょくってみるのはどうだろう？　あいつらがどれだけ本気なのか、試してやるんだ」
「試す？」
「こっちだって馬鹿じゃないんだ。いいか、このアパートで協力してくれる人を集める。それから、夜に抜け出す。後は市内を歩いてやればいい」
「そんなことすれば、条例違反じゃないか」
「だから試すって言っているだろう？　本気なら俺たち一人残らず捕まえて、警察に連れて行くさ」
「前科になるって聞いただろう？」

「本当はこんな条例なんか無くて、ただ脅されているだけかもしれない」
「そんなこと、市が税金かけてするようなことないと思うけれど。けれども、優秀な覚が言っていると、本当のような気がしてくるから不思議だ」
覚は満面の笑みで答えた。
「俺の言う通りなんだって。本当に生来的犯罪人説をとるなら、市の規模じゃ有効かわからないだろう。県、いや、全国規模で実施しないと本来の効果はわからない。なんの証拠もなく、ただ見た目や性格から、犯罪を起こしやすいと条例を使って言いがかりをつけられているだけなんだ。俺たちは、屈しないぞ」
「そうだ、そうだ」
恵介が同調すると、覚は得意げな顔をした。
「実は、この計画を実行する準備はできている」
「なんだって？　結構人を集めなきゃだめだろう？」
覚は声を低くして説明を始めた。共同のスペースには、市が委託した民間の契約警備員が見回りをしている。しかし予算の関係で人員は限られており、夕食後には退勤する。
「俺が今もここに残っているのは他でもない。この計画を実行するために、外部の協力者を募り、毎晩のようにここの滞在者を集めてスクラムを作ったのだ」
「覚、お前はすごいやつだよ。もっと小学校の時から仲良くしていればよかったなあ」
「あとは、お前も一緒になってこの計画を手伝ってほしい。リーダーは俺。後はここの滞在者三十人が協力してくれる手筈だ。今夜、夕食が終わったら決起集会だ」

夕食の時間が終わると、施設の担当者は施錠をして帰宅してしまう。食堂のおばちゃんたちも、夜八時を過ぎるといなくなってしまった。敷地内には監視カメラと赤外線センサーが多数設置されていて、外に出ようものならすぐに印西警察署の出動がかかる。宿舎内は最低限のプライバシーの観点から監視カメラなどの設置は見送られていた。
食堂にはテレビも一台置いてあることから、夜更けまで誰かは残っていることが多い。食堂にいた二十人ほどは、テレビの前に集まって、バラエティ番組を見ていた。
その食堂で、決起集会は開かれた。
「みんな、集まったか？」
覚は辺りを見回した。三十人ほどのヒラメ顔が鮮魚コーナーに並べ

られているようだ。恵介は他人と自分の顔を比較してみたが、やはり自分の顔が平均的だといえた。ある人は少し丸顔で、ある人は馬にも似ていた。恵介は自分自身で帰納法を試み、納得してしまったことに諦念が湧きあがった。

「覚、本当にやるのか？」

多々羅田という青年が聞いた。多々羅田は、小柄だが身軽で動きが俊敏そうだ。

「ああ。もちろんだ」

覚は座っていた食堂の椅子から立ち上がり、ローラーの付いたホワイトボードを引っ張ってきた。

「やめるってんなら、今が最後のチャンスだ」

集会から去る者はいなかった。覚は満を持して作戦の説明をはじめた。

「あらかじめ、俺は何人かに作戦についての説明をしていた。そのメンバーは君たちだ」

覚はホワイトボードに『レジスタンスリーダー』と大きく板書すると、名前を書きだした。小林、萩原、中根、大森、瀬戸、滝野、平岡、別所、多々羅田、吉高、木下と書いた後、それに俺だと付け足した。

「ここに挙げたメンバーが、本作戦の中心となる」

覚が言いきると、辺りからは拍手が起こった。

「これ、うまくいくのかな？」

そう弱音を吐いたのは中根だ。厳しい視線と同じように弱気になっていた一部メンバーとの視線とが絡み合った。

「いったい何が心配だってんだよ。覚さんが実行するんだぞ」

恵介たちの一つ歳下の瀬戸が粋がった。覚とは幼稚園からの先輩後輩になり、その主従関係は未だに根強い。

「言い訳がましいけど、宿舎から抜け出すことだって、出来るかわからない。僕たちには情報が少ない。市内の監視体制は十分に分からない。夜間は外出不可、昼間に僕たちが集団で動くのは目立ちすぎる。移動手段だってないし、いざって時に身を守れる術がない。これは危険な賭けだよ」

冷静に状況を分析してのけたのは、吉高だ。二二歳の大学四年生で、八月現在、就職先が決まっていない。少なく見積もっても、危機的状況である。

「ありがとう、吉高さん。俺もそこを無視して皆にこの話しを持ちかけたわけじゃない。その答えをこれから話そう」

覚は視線を遠くへ向けた。覚に気づいて、テレビを視聴している集団の中から、一人こちらに気づいて近づいてきた。

「説明は終わったのかな？」
声は、低く落ち着いた声だった。遠くからは二〇代にも見えるが、三〇代半ばの声だ。スーツ姿のその男は、覚の横に立った。
「うそ……だろ？」
その場にいたみんなは硬直した。何よりもその男の容姿にだ。
「全然似ていない。一体誰だ？」
静かだった集会は、一気にざわめきだした。そのスーツの男は、ヒラメの顔をしていなかったのだ。
「覚、この人は誰？」
恵介が尋ねると、覚は男の紹介をした。
「強い味方を紹介しよう。印西市唯一のフリーメーソン、共同溝管理組合のメンバー、佐藤さんだ。佐藤さんは印西市役所でスパイ業務にあたったこともある方だ。彼の協力で、俺たちは印西市の警備体制を始めとする多くの機密情報を手に入れることができる」
辺りは興奮して一気に熱を帯びはじめた。
「只今紹介に預かりました。佐藤です。今、共同溝管理組合は印西フィルムコミッションとも連携を深めていてね。なかなか手ごわい相手だけれど、他にも協力関係の輪を広めているんだ。僕らは限りなく、友好的な団体でいたいと考えているんだ」
共同溝とは、千葉ニュータウンにあるライフラインが張り巡らされた地下空間である。電気・通信・下水道管などをともに収容している。その共同溝への入り口は正方形のブロックを集めたような近代的デザインで、洗練された街の景観に花を添えている。
佐藤はレジスタンスの周りを机間巡視しながら説明をはじめた。
「僕たちの活動は、文化の継承、人類の監視、預言書の管理、情報の収集と操作と的確な運用、入会式の企画、共同溝の管理、その他多岐に渡っている。強いて言えば、人類の知らぬ所広大に広がる地下社会の中枢。なお且つ街の便利屋ってところかな。そして僕たちの活動を邪魔する者があるならば、これを全力で排除する」
佐藤は凄んで睨みを利かせた。ヒラメたちは佐藤と目があった順番に身を竦めた。
「しかし、こちらと合致する活動をする団体や、協力し合えると判断できた時は、手助けを惜しまない。互恵的利他主義だ」
そう言い終わると佐藤は再び覚の横へ戻った。
「そのためなら、こうして厳しい監視網も抜けて施設内に侵入し、君たちに会いに来ることもある。そして、ほら」
佐藤は車のキーをポケットから取り出して、揺らして見せた。そのキーホルダーには、公用車の番号が記されていた。この施設の職員専

用になっている大型のバンだ。
　辺りからは驚嘆の声が上がった。マジックともいえる侵入と何もかも朝飯前というような佐藤に、実力と信頼を感じはじめた。
「今回の作戦には、佐藤さんはじめ共同溝管理組合の協力が欠かせない。なお、佐藤さんは俺たちの方について共同溝管理組合との連絡をしてくれる。みんないいな」
「もちろん」
「それなら、前科をかけたっていい」
　レジスタンスは、渡りに船とばかり喜んだ。作戦参加に対し、僅かに残っていた蟠(わだかま)りも解消されたようだ。
「ところで、共同溝管理組合としては具体的にどんな支援をすればいいかな」
「俺たちは、市に対して抗議する。それに市民にも加わってもらいたいんだ。たとえるならば夜間百鬼夜行だ。俺たちが出歩く時間に、市民も多く出歩いている。捕まえる方も翻弄されるはずだ。ビラを作って市内には配っている。効率よく市民を誘導するためにも、共同溝の地下道を使わせてほしいんだ。共同溝はニュータウンをはじめ、木下駅、印旛日本医大駅、他にも市内様々な所まで整備されているとある情報筋から聞きました」
「市民への呼びかけと地下道か……。うーん、でも地下道は、首都圏私鉄各線のように様々な団体や企業が乗り合っているからね。それに市庁舎とも繋がっていて……っと」
　佐藤は口が滑ったと慌てて塞いだ。しかしその場にいるメンバーは、はっきりと聞きとっていた。
「何だって？　市役所と共同溝が繋がっている？」
「一体どうして……」
　口々に疑問が発せられた。覚は思いもよらぬ佐藤の情報に、下唇を噛んだ。市長が共同溝にまで手を出していたことは知らなかったのだ。
「何故市長は市庁舎との道を作ったのですか？」
　吉高が尋ねると、佐藤は自身の舌を呪いながら、しぶしぶと答えた。
「それはもちろん、市長が逃げるためさ。昔の城にはよくあるだろう？戦があって城が落ちるって時に、殿様を早く城外へ逃がすシステムさ」
「なんて卑怯な。一自治体の長とは思えない」
　吉高は立腹し、歯ぎしりした。
「まあ、逆にいえば怯えているんだよね。市民の反乱に」
　佐藤の言った言葉に、今度は覚が反応した。
「少しおちょくる位じゃ足りない」
「え？　覚どうしたの？」

恵介が覚を見やると、眼は血走り、怒りに燃えていた。
「みんな、この前ボヤがあった時の事を覚えているか？　その夜、平賀の部屋の近くの給湯室でボヤが起きた。多くの人は廊下に出ただけで、廊下の消火器で鎮火できた。しかし、一階の自分の部屋にいた平賀は慌てて窓から外に出た。小さい頃火事に遭って、そのことがトラウマになっていたんだ」
　続きは多々羅田が引き継いだ。
「平賀は無我夢中で建物から遠ざかった。柵を越えて敷地から出たことにも気付かなかったんだろう。全力で走り続けた平賀は、ジョイフル本田の駐車場で大の字になり、気を失ったまま失禁していた所を逮捕された」
　レジスタンスはみんな肩を落とし、悲壮を露わにした。
「あれは明らかに不可抗力だった。俺たちは、市に彼を釈放するように要求した。けれども市は聞く耳さえ持たなかった。それが許されなかったから、俺たちは協力者を募った。署名、待遇改善を求めるためにも、ビラの配布と集会をしたんだ」
　宿舎の不穏な動きを感じ取った市長は、事前連絡もせずに直々に視察へ来た。鳩に豆鉄砲という状況に、宿舎は混乱した。そして、その日施設内にいたすべての人を集めて、講演を行ったのだ。覚たちはその場にいたが、恵介は大学の授業で外に出ていた。
　市長は宿舎の住みやすさと早速現れはじめた条例の効果について一連の説明をした後、最近宿舎内でよろしくない噂があることについて話しだした。
「近頃、宿舎内の一部に、集会を開き市への反逆ともとれる行動をする者がいると耳にしました。みなさんには、このように素晴らしい住居を提供しています。身をわきまえるという、常識を御存じの方でしたら、このような行動をとるはずはないのですが……これは私の考えすぎでしょうか？　どうもリベラルな活動を目的として集会を開いているという噂が……」
「ちょと待ってください」
　手をあげて立ち上がったのは吉高だった。
「憲法二十一条で集会・結社・表現の自由は保障されているのではないですか？　僕は大学で憲法を勉強しています。立憲主義の観点から申しますと、憲法は国家権力を制限して、国民の自由を守る為のものです。市長の主張は、明らかにゆきすぎた公の権力乱用ともとれるのではないですか？」
　吉高の質問に、市長はうすら笑いを浮かべて答えた。その時の様子を、覚が真似て言った。

「『御託をよくも並べたもんだ。いいか、これは政治的フライングゲットだ。演習ではない』市長は、そう、言ったんだ」

風が食堂の掃き出し窓を激しく打った。閃光が辺りを昼間のように照らし、稲妻が闇夜を走った。ガラガラドーンという爆音と急激な豪雨に、みんな口を噤んでしまった。

このまま抵抗をしては、施設内に監視カメラを設置されてしまう可能性もある。これ以上に監視の目が強くなることは誰も望んでいない。市長の訪問によって、手も足も出ない、シュプレヒコール一つあげられない状況になってしまったのだ。

「おちょくるだけだと説明していたけれど、実は、それどころで収まりきれない怒りが俺の中にはあるんだ」

感情が高ぶった覚は、頬と耳を赤く染めていた。そっぽを向き、表情を隠した。

「協力は惜しまないって言っただろう？　君たちがやるというのなら、武器や火薬も準備できる」

佐藤は覚の肩に手を置いて耳元で吹き込んだ。それは悪魔の誘惑とも、救いの天使の囁きともいえる、蠱惑的なものだった。一体どのような繋がりを持っているのか誰もがソースは分からぬが、佐藤は自信たっぷりに言った。

「旧ライフの二階。そこも僕らのアジトだ。大体、閉店後の空き店舗やテナント募集中の不動産の利用と管理をしているのも僕の所だからね。そして旧ライフの二階は、我々の武器庫になっている」

「佐藤さん、いいんですか？」

「もちろん。最近の市政の横暴ぶりや公の圧力で共同溝使用を乗り合いしてきたことには不満たっぷりさ。根幹を揺すぶり、体制を変えてやる。あとは、君の仲間の同意があれば」

佐藤と覚がレジスタンスを見やると、みんなすがすがしい眼で覚を見つめていた。本気でやれると信じている目だ。

覚は佐藤に頭を下げた。

「お願いします！」

覚に代わって、佐藤は作戦会議を引き継いだ。

覚は高ぶった感情を落ち着かせようと、食堂の外にあるテラスへ出て外の風に当たった。恵介は覚のあとを追って表へ出た。

「覚、少しは落ち着いたか？　いやぁ、火薬とか実戦は小６ぶりかもな」

一生のうちそう何度もあることではないが、国内での武力衝突は時々発生していた。市長が抜け道を作る理由も、ある程度理にかなっ

ているのだ。ルサンチマンの標的となりやすい力のある者は、フレキシブルな機動性を備えなければならなかった。
覚は無言のまま、市役所のある方の空を見つめていた。
先ほどの荒天が嘘のように空には雲一つなく、夏の星座が天空に広がっていた。肌をかすめてゆく風は、程よく体温を奪って気持ちがよかった。
「覚？」
「恵介、いよいよなんだな」
「きっとうまくいくよ。覚がリーダーで、佐藤さんもついている」
「恵介、市のスローガン覚えているか？」
「ああ、覚えているけど」
「目には目を、歯には歯を。それを掲げている所とやり合おうって俺は言ったんだ」
「さ、覚……」
覚は細かく身体を震わせていた。その恐怖に慄く姿は、普段のいやらしい性格の覚とは思えなかった。
覚は誰よりも本作戦に尽力していた。しかし、その分市に向かってゆく恐ろしさも知っているのだ。知識を持たず不安のまま怯えている者よりも、市の力量が見え、遂行しようとしていることの困難さも手に取るようにわかるのだ。その責任を背負ってゆくのは覚だ。
「誰にも言うな。これは、武者ぶるいだからな」
「うん」
まだ中に戻ろうとしない覚に、恵介は話しを続けた。少し話した方が、落ちつけるだろう。
「それにしても。覚すごいよな。フリーメーソンの事や、共同溝が市内全域を網羅していること、何でも知っているな。素晴らしい人脈だよ。一体、どうやって情報を掌握しているんだい？」
覚は歯が噛みあわないながらも、一笑してから答えた。
「盗むのは簡単だよ」
二人は市役所方面の空を見やった。里山の木や辺りの建物で、数キロ先の建物は見えない。しかしそこには打倒すべき相手、印西の権家が、首長の椅子にでんと座っているのである。
恵介は心の中で、その腐敗した椅子から市長を引きずり下ろしてやると、夏の大三角に強く誓った。
それから一週間後の正午きっかり、ヒラメ専用宿舎から一台の大型バンが発車した。
酷く蒸し暑い日だった。長々と天頂に居座っているように思われる

灼熱の太陽は、地上を歩く者たちの思考と動きを鈍らせ、何もかもを奪い去ろうとしているかのようだった。
　ぬるい冷房の利いた車内はピリピリとした空気が漂い、誰も口を開かなかった。十分スペースはあるのに、酸素が足りなくて息苦しいような錯覚を起こす。車内には、多々羅田、吉高、佐藤、覚、恵介が乗っていた。佐藤がハンドルを握り、バンは一度国道４６４号へ出て、草深まで行き、大森交差点から市役所入り口へ向かおうとしていた。佐藤の連絡により、旧ライフからは武器とバリケードに使う机や鉄板を組合のメンバーがトラックで運搬する手筈だ。ニュータウンの市民の協力へは、木下駅から通じる共同溝を使ってニュータウンまで行き、そこから市民の応援を得ることになっている。
　市役所に先制攻撃を仕掛けるために先陣を切るのは、バンで直接向かうメンバーとそれぞれ自宅からこちらに向かっているレジスタンスである。あまりに大人数の行動は目立ってしまうので、リーダー以外のメンバーは自宅に戻り、そこから各々自前の武器を持参で市役所前へ集合する。
「小林たちからは連絡あったか？」
　覚が、口火を切った。やっと空気が動き出す。
「さっき、これから木下駅の共同溝に入ると連絡がありました。地下は、携帯繋がらないから、あとはニュータウンで外に出た時、市民を集めて市庁舎内部から破壊行動を開始するときに連絡があると思います」
　多々羅田は通信担当になっている。佐藤の持つ共同溝組合だけでなく、こちらでも連絡経路を作り、いざという時も機能を果たすためだ。
「先陣切るっていっても、本陣は市民を連れ立った小林や瀬戸、中根たちだ。市民に情報は渡っている。条例の不可解さにみんな気づいているはずだ。きっと彼らは僕たちの味方になる」
　吉高はレジスタンスのブレーンだ。話し合いの場を持った時、彼の存在は心強いだろう。そこに持ち込むか、徹底的に市を潰すか。二つに一つだ。
「みんな、こんなにも協力してくれてありがとう。悔いを残さないよう、思いの丈をぶつけてくれ」
　覚が言うと、車内のメンバーは覚の右手に合わせた。バンの後方、トランクのスペースに、小さな円陣が出来上がった。
　市役所前に着くと、そこには既に大型トラックが一台駐車されており、大量の積荷が降ろされていた。バリケードに使う机や鉄板、廃棄物が山のように市役所入り口付近を埋め尽くしていた。いつも静かで小鳥の囀りが響き渡る市役所前は騒然とし、野次馬が集まっていた。

一方の市役所自体は、昼休みにも関わらず、外に出てくるものはいなかった。静まり返り、まるで休日のようだった。
「おかしい。静かだ」
バンを降りて各々の武器を手に身をかがめていると、覚が零した。
市役所に宣戦布告はしていなかった。入口を塞ぐという行為を注意しにくる職員もいない。外から帰ってくる職員もいない。
覚たち一行は、低姿勢のままバリケードに背を付けた。間隙から市役所の動向を窺う。
野次馬の中からは、レジスタンスのメンバーが人の間をぬって出てきた。共同溝組合の支援者たちはバリケードの廃材を出し終わると、愛想のない引っ越し業者のようにそのままトラックで引き返して行った。いよいよ戦いがはじまるのだ。
「みんないるな」
レジスタンスは最後の作戦会議だ。
「いきなり銃を向けるような真似はしたくない。市に向かって、俺がまず攻撃開始を宣言する。そうしたら攻撃開始だ」
「了解、リーダー」
レジスタンスは、覚の下、心を一つにしていた。
「俺たちの目標は、市の注目をこちらに向けておいて、なるべく時間を稼ぐことだ。途中からはニュータウンから市民をひきつれて仲間が来る。共同溝を抜けて市役所内に続いている出口に来る。そこからは、本陣が内部から破壊する。外とばかり思っていた市は、意表を突かれて壊滅するだろう。市は俺たちを管理するヒラメ課を新設している。デスクワークに特化している肉体派でないからといって、油断はするな」
覚は勢いよくバリケードをよじ登り、市庁舎に向き合った。右手には中学まで稽古を受けていた薙刀を持ち、不安定なバリケード上でわざわざ目立つように仁王立ちした。風が吹き、覚の髪と服をふわりと揺らした。
「聞け！　俺たちは、宿舎に閉じ込められ、自由を制限された者たちだ。市の横暴、これ以上は許すことができない。俺たちは立ち上がる。これは俺たちの怒りだ」
覚が言い終わるか否かという時に、市役所屋上の窓が開き、二人の男が出てきた。一人は恰幅の良いタヌキおやじといった風貌で、もう一人は佐藤と同年代の背の高い男だった。
「スズキ、向こうに見えるのは何かね？　私には、ゴミの山が呻いているようにしか見えないのだが」
タヌキおやじは拡声器を携えていて、それを使って覚にも届く声で

言った。
「あれ……が……でも……ですね。わたく……邪魔……ヒラメ課……で……う……よ」
スズキはマイクを受け取ると、そのマイクに向かって話した。しかし、マイクの具合がよくないのか、スズキの声はレジスタンスに聞き取れなかった。スズキは眉根に皺を寄せた。
「そうだ。このために新設したヒラメ課があるのだ。彼らは臨時編成となるが、何よりも特権がある。彼らは印西市の防衛隊だ。市役所職員の中で、彼らだけには武器の使用許可がある。さて今日はそのヒラメ課の仕事ぶりが試される日かな」
「わ……そう……ね」
わざとらしく会話が聞こえるようにしたいらしいが、スズキと拡声器の相性はよくなかった。スズキはおでこにも皺を寄せた。
「よく見てみろ。入口には何人配置と報告を受けたかな」
恰幅のいい男が言うと、声に出さず覚がハッと叫んだ。足を後ろに向け尻目に見た所、三十人は武装体制で攻撃に備えていた。キャノン砲も二台待機してあった。
「伏兵！　数三十！」
覚はバリケードを転がるように降りてきた。
「覚、一体……」
恵介が言い終わる前に、バリケードのすぐ向こうで炸裂音が響いた。ドンドンと間を開けずに弾がバリケードに当たる。ついにはじまったのだ。
「なんで、いつの間に待ち伏せしていたんだ？　俺たちの行動は筒抜けなのか？」
「そんなこと今は関係ないだろう。行くぞ」
寝耳に水となったのは、レジスタンスだった。動揺は隠せないが、ここで引き下がるわけにはいかない。手榴弾、ライフル、火炎瓶……レジスタンスは持ってきた武器を間髪いれずに市役所の敷地内へ撃ち込み、投げ込んだ。
「恵介、佐藤さん、援護してください」
「よし、わかった」
覚、恵介、佐藤は市役所前一帯に作られたバリケードの間を潜り抜け、少しずつヒラメ課との間を詰めた。
「覚、さっき屋上に出てきた二人は誰なの？」
「恵介くん、あの恰幅の良かった方が印西市市長だよ。君知らなかったの？」
「……すいません」

恵介は市政に興味を持ったことはなく選挙権もないので、市長の顔を知らなかった。
「佐藤さん、隣にいた人は？」
覚の問いに、佐藤は眼の色を変えて答えた。
「あいつは、秘書課のスズキだ。あいつ、本当に目障りな奴で僕の恋路を……あ、ごめん。スパイに入っていた時に、僕の仕事を邪魔してくる奴でね。あの監視網を抜けるのに一苦労したよ」
佐藤は額に浮き出た汗をぬぐった。佐藤の焦りを隠せない表情を見た恵介は不可解に感じたが、今はヒラメ課からの攻撃への対処を考えなければと邪念を振り払った。
「それ、今だ！」
恵介たちは複数のバリケードを経由して、ヒラメ課の前衛のすぐ側まで接近していた。多々羅田が投げたと思われる火炎瓶に驚き、キャノン砲付近にいた職員の隊列が崩れた。これをチャンスと、三人は走り出して見事に奪い取った。
「あ、この野郎。市民の血税で購入したんだぞ！」
迷彩服に身を包んだ若いヒラメ課の職員が追ってきたが、レジスタンスに銃を構えられ、足を止められてしまった。その隙にキャノン砲一台はレジスタンス側に取り込まれ、鹵獲（ろかく）に成功した。
「おい、最後まで踏ん張れよ。ボールは最後まで追うのが基本だろ」
ヒラメ課の課長から先ほどの若者に檄が飛んだ。
「そんなこと言うなら課長が行ってくださいよ！」
「言ったな！　これだからゆとりは。今度の暑気払いで覚えていろよ」
「パワハラっすよ、課長～」
「主任から伝言です。みなさん業務中は、私語は慎んでください」
戦場は混乱を極めていた。
戦闘は一進一退という様子だった。ヒラメ課の職員は人員と武器は揃っていたが、実戦不足で十分な戦力にはなっていなかった。市役所に勤めはじめてからは、デスクワークが中心となっているからだ。一方レジスタンスには、明白な目的があり年齢層も若かったので勢いがあった。気迫では押していたが、人数と武器の性能ではヒラメ課に劣っていた。
覚は無駄弾を撃たないようレジスタンスに周知していた。共同溝管理組合から受け取れた武器もそこまで十分な量ではなかった。佐藤からは、他からも依頼があって、供給量はこれが限界だと弁明を受けた。覚たちは苦虫を噛み潰した。みるみる少なくなってゆく銃弾の山を視界に入れる度、先行きの不安が募った。
ガキンと鈍い金属音を鳴らしたのは、吉高の旧式自動小銃だった。

「くっそ、またジャムだ！　新市街からの市民の支援は？　この時間なら共同溝を使って、市庁舎内部から破壊行動をはじめているはずだ」
　痺れを切らした吉高が多々羅田に聞いた。二人は最前線でヒラメ課のヘボスナイパーを相手していた。どうやら新人らしく、支給された市の銃を使いこなせていなかった。
「市民は来ない……」
　多々羅田は携帯の液晶画面を開いて呟いた。目ばかりは見開いていたが、口元には力が入っていなかった。
「何だって？」
　吉高も画面を覗き込むと、小林のメールにはこうあった。
『ニュータウンの住民は、（車があれば）日本一住みやすい街印西市の甘い蜜を享受している。彼らに今現在の生活を変える気はほとんどないのだ。それに、不審者が多いのもニュータウンだ。新市街の人間のほとんどが市長の支持者だ。指定の場所に市民はいなかった。このままでは覚さんたちに多くの犠牲が、』
　メールは不自然な所で切れていた。この後、まだ報告があってもいいはずだ。
「多々羅田、電話は？　電話で連絡は来なかったのか？」
「俺も重要事項は電話でって……それにこのメール、続きなんて伝えたかったんだ？　電話ができない状態だったのか？」
「とにかく覚にこのことを」
「吉高さんお願いします。俺は、持ち場を離れられませんから」
「わかった」
　吉高は多々羅田の携帯を持って後退した。多々羅田は最前線の最も優秀な戦力だ。小柄な彼だからこそ、身を隠し効率的な攻撃も可能としている。疾風迅雷の多々羅田を戻すことはできなかった。

「人を見たら泥棒と思え」
　延々と続くかと思うような地下道を歩きながら、中根が呟いた。辺りは非常灯程度の電球がいくつか付けられていた。十分歩ける明るさだが、所々灯りのあたらない部分もあった。空気は湿っぽく、水が溜まっている場所もあった。数日前の雨水がコンクリートの壁を伝って滴っていた。共同溝の中は雨だけでなく、腐敗したゴミやジュースの入ったペットボトルなども散乱し、時々鼻を刺すような臭いがした。マナーの悪い利用者もいるようだ。
「何だよ中根。また怖気づいたのか？　今更逃げるとか言うなよ」
　瀬戸が強く足を踏み込んだ。人数分の足音だけが高く響き渡る。丸くアーチ状になったチューブは、距離感や方向感覚を鈍らせた。明り

も少ないので、一気に夜の帳が下りたようだ。
共同溝内には、大小様々なパイプも張り巡らされている。中身は見当つかないが、何かの液体が空気と混ざり合いながら市内のどこかへと流れてゆく気配がする。
佐藤の仲間という体格のいい共同溝の組合員三人が小林たち一行に連れ添っていた。途中でいくつもの分岐点を通り過ぎ、その度にどちらへ曲がったか、はじめて共同溝に足を踏み入れたものには見当が付かなかった。
「おい、緊張感がないぞ。これから大役だというのに。覚さんたちはもう戦っているんだ。俺たちが駆けつけるのを待っているんだから」
小林は本陣のリーダーだ。瀬戸と中根という正反対のメンバーを抱え悩むことも多かったが、すべてを仕切る覚を見て、自身の士気も高めていた。覚の抱え込んでいるものに比べれば、自分の責任などゴマ粒ほどだ。
「小林さん、『人を見たら泥棒と思え』」
中根は再び繰り返した。
「何だって？」
中根の声は蚊の鳴くような小声で、聞き取りにくかった。最も、共同溝内では少しでもボリュームをあげると共同溝を歩く十五人すべてに聞こえてしまう。中根は、何かに気づいたのだ。
「中根、もっと詳しく……」
小林は歩きながらゆっくりと中根に近づいた。先頭を行く共同溝の組合員はペースを崩さない。後ろにいる二人は、少し距離を開けてメンバーの後ろに付いていた。発言や行動を見張られているような感覚はなかったが、中根は多くの人に聞かれたくないようだった。レジスタンスは近くで話しながら歩いている者もいたが、大体はこれから大役が待っていることを思案しながら、一人歩いていた。
瀬戸は大丈夫。小林も、中根の話を聞くことができる。小林は他の人との距離も開けながら歩いた。
「小林さん、あの人たち、小声で市民は助けに来ないって言っていた」
「あの人たち？　共同溝の人たちってことだろ？　まさかそんなわけは……」
用心深い中根のことだ。伝えなければならないと十分考えての行動だろう。小林も共同溝管理組合に対する信頼は薄かった。少なくとも、覚が信頼していた佐藤に対しては人を見ることができたが、今一緒にいる三人は今日会ったばかりの赤の他人だ。この人たちは、多くを説明することなく、メンバーを引き連れていた。中根の言う通り、時々三人で集まっては小声で何か相談事をしていた。携帯の電波が通じな

い地下空間で、彼らはトランシーバーだか専用の機材で外部と通信していた。共同溝管理組合に対する小林の疑心暗鬼は頂点に達した。
小林は前を歩いていた瀬戸とぶつかった。
「いて。なんだよ、前見て歩けよ。……瀬戸？」
瀬戸はおろか、一行は全員立ち止まっていた。小林は状況把握が追いつかずも、メンバーが全員いるのか目で数えた。大丈夫だ、取りあえず十二人一緒にいる。
「全員大人しくしろ。これから外に出る。いいものを見せてやろう」
先頭を歩いていた組合員が言った。レジスタンスはゆったりとした間合いで歩いていたはずなのに、今は全員と身体が触れそうなくらい小さな円になっている。
小林が薄闇の共同溝を見まわすと、組合員の三人は銃を構えてレジスタンスに対峙し、灯りの届かない暗闇や三十メートルほど先にある分岐点から、人影がいくつも迫ってくるのが見えた。
吉高はキャノン砲の装填をしていた覚に駆け寄った。メール画面をみると覚も蒼白し、頭を抱えた。異常に気づいたレジスタンスは、いつの間にか攻撃を止め、覚の周りに集まっていた。
完璧に思えていた作戦が、本陣が来る前に中倒れとなったのだ。
戦場の動静に気づいた市長は、拡声器を使ってレジスタンスに呼びかけた。その表情には喜悦が滲み出ていた。
「やっとわかったようだな。共同溝と我が市庁舎が地下道で繋がっているのを知ったのは、私が放ったスパイの功績かな。フリーメーソンなど架空の団体を信じよって。はじめからそんなもの存在しないのだ。共同溝は抜け道であり、街の景観を保つために作られた空間だ。それを管理しているのは、利用している企業と管理委託されている企業だよ。もちろん、印西市が一枚噛んでいるがね。こちらの誘導作戦と、市民の協力を得られなくておたおたしていたリーダー格のほとんどを捕まえることができた。見ろ、愚民の姿を」
市長の言葉に合わせて、ヘボスナイパーが三十センチくらいの筒を投げ入れてきた。
「危ない！」
多々羅田が叫ぶと、みんな身を屈めて頭部を守った。しかし予想していた爆発は起こらなかった。代わりに多々羅田のすぐ側に筒状に輪ゴムでとめられた茶封筒が転がっていた。多々羅田は赤面してその封筒を掬いあげ、導火線や爆発物が付いていないことを確認して恵介に投げた。
「こ、これは。小林、萩原、中根、大森、瀬戸、滝野、平岡、別所、

その他計十二名！　捕まったのか！」
　封筒を開けると、中には小林たちを捉えた写真が数十枚入っていた。写真には丁寧にも撮影時刻も印字されていた。たった三十分ほど前に市民により取り押さえられた彼らが映っていた。作戦を遂行しきれず、無念と絶望感に表情を歪ませていた。
　逮捕直後の写真に、メンバーはファインダーに向けて口惜しさと申し訳なさが滲み出た瞳を晒していたが、恵介は、後から拾った他の写真を見ると次第に彼らから別の感情を向けられていることに気がついた。彼らの瞳には再び光が宿り、強い意志のこもった二十四の瞳が恵介やここに残っているレジスタンスを見つめていた。
『道半ば、勝機を逸した我々を許してください。けれども、まだ僕たちは終わっていません。覚さんたちなら、旧市街の市民とともに、印西市の悪政を覆せるはずです。また会えると信じています』
「畜生！　大事な仲間が！」
　恵介は慟哭した。二十人そこそこのレジスタンスは、拾った写真を握り締めた。
「今、スパイと言ったよな。　佐藤さんあんた……」
　覚は、後方から援護していた佐藤を振り返った。
　佐藤は、覚の視線を受けて下を向いた。唇を震わせながらも、辺りに通る声色で朗々と告白した。
「そうだ。組合ＮＯ．〇〇一六、佐藤ではない。僕は共同溝管理組合のメンバーではない。印西市役所元秘書課、今年度から国保年金課窓口担当、佐藤だ」
「俺たち、信じていたのに。一緒にこの街を変えてやろうって言っていたじゃないですか」
　覚は佐藤に詰め寄った。胸ぐらを掴もうとしたのを見て、恵介は覚の腕を掴み行為を留まらせた。後ろから羽交い絞めにして、覚が落ち着くまで押さえていた。
「覚、抑えろ。お前の気持ちは、佐藤さんを殴ったところですっきりする程度なのか？」
　佐藤は後ずさったが、覚が向かってこないことが分かるとそのまま立ちすくんだ。
　前線で『６０年代』と白ペンキで手書きされた深緑のヘルメットを被り、手榴弾と火炎瓶を投げつけていた多々羅田が後退してきた。
「佐藤さん、何でですか？　一緒に戦うって言っていたのに。大人ってこうやって嘘つくんですか？　汚い。大人なんて汚い」
　失望した多々羅田は、佐藤の正面から言葉を投げつけた。佐藤はすぐに『大人の都合』の言い訳をしようとした。しかし、多々羅田に言

われた汚いという言葉、レジスタンスや市庁舎からの多数の視線に晒されていると感じた時、自分が田植え時期の水田に落ち、水分を含み質量感のある泥で覆われている様な気がした。汚い。人々の視線は、心の中で隠れていたはずの本当の自分自身の姿を可視化させた。

「まっさら綺麗な人間なんていない。けれども、どんな人間にだって評価できる側面がある。大人はそれを使って生きてゆくんだ。いずれ、君たちもわかる時が来る」

佐藤は視線を下に向けたまま地面に語った。居直った佐藤に対し、レジスタンスの目は冷ややかだった。

佐藤はいきなり頭を振った。

「僕は、社会から疎まれている。仕事をしても失敗ばかりだ。一年目から『使えない』のレッテルを貼られている。後輩は僕だけには朝の挨拶がない。けれども、そんなことに屈しない雑草魂が僕にはあるんだ。取り返す機会があったら、そこはがっちりと抑える。そして、伏線の回収は完璧にこなすのだ。今回の任務も名誉挽回のためだ」

佐藤の力のこもった主張に、辺りの聴衆は説得力さえも感じはじめ、納得の表情で頷き、興味を示す者もいた。

「伏線の回収って何だ？」

多々羅田の疑問には、市庁舎からスズキが拡声器で答えた。

「あーテステス。自分の失敗を取り返すために、必死になって修復をすることさ。佐藤のお得意だよ。つまらない余興に振り回されるこっちの身にもなってほしいね」

市役所勢に笑い声が波紋のように広がった。窓際にいる職員も、外を指差し、笑っている。

「これが同僚の姿と言えるのか？」

恵介は、怒りのあまり拳がわなわなと震えた。これが、社会の姿なのだろうか。ヒラメ顔の人間が集められなかったとして、自分が卒業後に足を踏み入れただろう未来は、こんなにも冷たく殺伐とした所なのだろうか？

「佐藤さん、あんた、黙っていてはだめだ」

落ち着いた覚は恵介の腕を外して前に出た。

「俺たちと、この市を変えてやろう。スパイなんて辞めて、こっちに来るんだ。頼みにしていた市民は来ない。旧市街は人口が少なく、まさか年寄りに武器を持たせるわけにはいかなかった。人口の多い新市街は、市長の支持者で埋め尽くされている。今は一人でも惜しい。それにあんたは、俺たちの仲間となって戦う理由がある」

覚は熱意を持って佐藤を諭した。しかし、佐藤は首を縦には振らなかった。

「そんな、どうして？」
「この不景気だよ。他に就職のあてもあるわけではないし、それにもう十年以上も勤めている。そんなに若くないし、公務員をとってくれるような企業が、そうそうあるわけではないからね」
佐藤は、覚が薙刀を握っていない左手と合わせて、握手をした。
「気持ちは本当にうれしい。ありがとう。お礼とはならないが、君たちに、冥土の土産……にならないことを祈って僕の持っている情報を教えよう」
「……なんか複雑な言い方だな。佐藤さんは、日本中で行われた先の鬼ごっこでも生き延びたというのに、今は市役所内でのサバイバルってわけか」
「ああ。先のリアル鬼ごっこも結構応えたな」
佐藤は遠くを見つめ、しみじみと昔を顧みた。
「けれども今、僕の戦場はここだ。どんなに白い目で見られたって、月曜日には出勤して両腕に腕抜きはめて窓口業務と書類作成、課長決裁さ。元々はスパイの任務だったんだ。けれども市庁舎の屋上にいる市長や憎き好敵手、スズキを見た瞬間に、僕はこちら側だと思った。少しの間だったけれど、僕なりに足掻けてよかったよ」
佐藤は、胸ポケットから白いハンカチを出して手を高く振った。先を読んで準備するのが、大人の行動だ。
「じゃあな」
佐藤はゆっくりとバリケードから出て行った。
「見ろよ、あれが大人の背中だ」
若年層からなるレジスタンスは、必死に現代社会を生き抜こうとする男の勇士を見て目に涙を浮かべた。
「あ、冥土の土産」
佐藤はミスに気がつくと、踵を返してバリケードに戻ってきた。
「大事なことを伝えるのを忘れていた。市長がこの条例を思いついた理由だ。印西市はこの条例を周辺にも推し進め、千葉県内で千葉市に次ぐ第二の政令指定都市になろうとしているのだ。それを最大目標としている。安全な街印西の捩じれた思想を押し広げようとしているのだ。やがては国政へ進出し、歴史に名を残そうという魂胆だ」
佐藤は臍を噛んだ。出来るものなら、まだここに残っていたい。しかし、仕事としての使命を受けた自分は、その役目を終えて戻らなければならない。そして佐藤が陣営に戻ることにより、市は本気で潰しに来る。佐藤の帰りを待つのは、万が一の時は労災になるからだ。
佐藤は喉まで出かかった、逃げろという言葉を飲み込んだ。覚悟を決めた彼らに真実を告げることは、決して易しくはなかった。

「僕が言えたものじゃないが、僕みたいにはなるなよ。矛盾は矛盾として受け止めろ。一度流されると、それに抗うことはほとんどなくなってしまう」

佐藤は今度こそ足早にバリケードを離れ、市役所庁舎へと入って行った。

「畜生。安全は全市民が求めているというのに、俺の中からはもう恨みつらみしかでてこねえ。行くぞ市民諸君（シトワイアン）、武器を取れ！　狙いは市庁舎本体だ。ヒラメ課職員を蹴散らして行くぞ」

覚は、これが最後の一斉攻撃とばかり士気を高めた。残ったヒラメたち二十人あまりは、各々手近にあった武器を手に取った。竹刀、ヘルメット、ポンプアップ式ライフル、ダイナマイト……決死の覚悟をした若者たちは、自らの手で権力に抗う手立てに武力を選んだのだ。作戦実行の今日まで、彼らはユゴー作『レ・ミゼラブル』を熟読し、革命の精神を作り上げた。華麗、絢爛たる美しい文体に感化され、情熱的で急進的な行動に唆された彼らは、革命期の燃え上がるパリの若者と同じ精神状態だ。だれも扉裏のユゴーのはしがきを読んでいなかった。レ・ミゼラブル、〝惨めな人々〟とは、物語の登場人物すべての事を指しているのだ。

市役所に勤務している人数、市役所内に眠る武器・火薬の保有数、何をとっても勝るものはない。しかし彼らには、彼ら自身にも止めることのできない神々しく気高い精神があった。魂が燃え尽きるまで、志も持ち続けるだろう。

「ははは。シトワイアン……片腹痛いわ！」

動きを見せたレジスタンスに、再び市長の声が拡声器から降り注いだ。

「市民とは、安全な市を私と目指す同志のことだ。痛みを伴わない変革はないのだ。我々は、ここに君たちというある程度尊い犠牲を払って、この市政の道を前進するのだ。私こそが印西だ！」

言うまでもなく、市長の言葉は、ある程度という部分が強調されていた。

そのあまりもの大声に気押されて、ヒラメの一人が銃の引き金に指を引っ掛けてしまった。パンと乾いた音が空を裂き、市庁舎の窓に当たった。抜かりのない印西市は、もちろん防弾ガラスにしてあった。窓際のデスクで仕事をしていた中年女性がぬめりとした粘着質な笑みを返した。市庁舎の業務は、通常通り行われていた。市役所にやってきた市民たちは、正面の入口を避けて敷地内に入ってきていた。

「少し傷になったと思うよ。復興予算付くかな。ただでさえ防衛費がかさんでいるというのに」

スズキが手元の予算書を広げて言った。
「目には目を歯には歯を。この言葉を身体に教えてやる必要があるな。こちらの本領を見せるまでもないと思っていたが、少しはサービスしてやろうか。正面はもうボロボロだなあ」
市役所の正面入り口を見ながら、市長はサディスティックな歯医者のように言った。コンクリートの壁は、ほとんど瓦礫と化し、目の前の市道も割れ、月のクレーターのような穴からは土が露出している。このようなことをされて、軽いお仕置き程度で済ます市長ではない。恍惚とした表情で、なまめかしく囁いた。
「ああ、少し痛くなるぞ」
万人に悪寒をもたらす俗悪な声が、拡声器から漏れ出た。
「うわっ。なんだこの、耳から足の指先まで全身を凌辱されるような未だかつて経験したことのない感覚は！」
「怯むな！　いくら市長の家が歯医者だからって、ここで君たちの歯を削ることは不可能だ。我々の白く清らかなエナメル質に、悪しき毒牙が突き刺さることはない。痛くない！」
「そうだ！　そして痛くなくても、手を挙げろ。その手に持った武器を掲げるのだ。こっちにはワルサーＰ９９、キャノン砲だってある」
「一般市民をなめんな。倍返しだ！」
レジスタンスは百年に一度の鳥肌を抑えようと必死に声を張り上げた。
「甘い！　甘い甘い甘い甘い甘い！　甘すぎる！　君たちが見ているのは、氷山の一角だ。この印西市市庁舎地下に何があるか知らずに挑んでくるとは愚の骨頂。腐ったルサンチマンを投げつけるだけの荒唐無稽な行為に気づかぬか。印西市の鉄槌を浴びるがいい！　職員はみな、第壱戦闘配備だ」
市長は右手を振り上げた。すると、市庁舎が轟々とうなり声を上げはじめた。地面が揺れ、低い地響きの音がゾウの大移動のようだ。市庁舎周りの草木や、背負っている里山も崩れんばかりにどうどう動いた。
「見ろ！」
吉高が市庁舎を指した。
窓と白壁で覆われた長方形の建物が、二十もの大砲を正面に向け、鋼鉄の攻撃要塞と化していた。
「トランスフォーメーションしやがった……」
レジスタンスは開いた口が塞がらなかった。覚でさえ、驚愕に表情を失っていた。あまりにも想像しがたい現実を突きつけられたのだ。
これには誰もが想定外だった。

窓が人一人分開けられ、そこからは市の職員がスナイパーとなり、アサルトライフルの長い銃身をレジスタンスに向けていた。
「市長、予算の問題で大砲は撃てません」
「つまらん。議会の腰ぬけどもめ、予算を渋ったな。仕方がない、撃ち方に機関銃を許可しろ。すぐに一掃してやる」
「心得ました、市長」
スズキは内線を使って、すぐに各攻撃班に連絡をつけた。
一五〇〇、前線部隊のヒラメ課職員が後退した報告を受け、市長は静かに右手を高く上げた。
「撃てー」
市長が右手を振りおろすと同時に、要塞から一斉攻撃が仕掛けられた。
「こちらは防災いんざいです。市役所正面入り口は、只今強制執行中です。別の入り口をご利用ください。市民の皆さんにはご不便をおかけします。なお、流れ弾にはくれぐれもご注意ください」
市内には、柔らかな女性の音声で防災無線が流された。しかし、市役所正面入り口は、弾が空を切りコンクリートや金属に当たる音やキャノン砲の爆音によってかき消されてしまい、誰一人として聞けた者はいなかった。辺りは、石油や火薬のにおいが充満し、砂埃や細かい瓦礫片が薄墨色と褐色の濃霧を発生させている。
市役所側のお役所仕事とは思えぬ容赦のない攻撃に、多数のレジスタンスが苦戦を強いられた。隙のない弾幕に、次々と負傷者が現れた。その様子を、高みの見物としていたのは、他でもない、印西市市長である。
「見ろ！　人がごみの……」
野太いドスの利いた声で市長が続けようとした所、スズキがその先を遮った。
「お言葉ですが市長、それ以上は」
市長は口に手を当てて、シチュエーションにぴたりと合致した名台詞をギリギリのところで飲み込んだ。
「いけない。これからの地方自治は、前例を覆してゆかなければならないというのに、失態を演じるところだった」
市長はスズキを睥睨（へいげい）しながら前へ出た。
「お前が息子ならば、よかったのにな。スズキ、お前は私の人生の、最大で唯一の汚点を知っているか？」
市長はスズキに問いかけた。
「私の一族がみな、ヒラメの顔をしているということだよ。私だけは劣性遺伝だったようでね。そして、私の息子、奴もヒラメの顔なのだ

よ」
いいえ、と応えようとしたスズキよりも前に市長は説明しはじめた。
「その息子が今どこにいるか知っているか？」
スズキは市長の横顔を見つめた。まさか、信じられないという表情のまま、市長の視線を追った。市長は、弾幕の張られた入り組んだバリケードの中を、少しずつ最前線へ向かっている一人の青年を見つめていた。
激しい爆音が辺り一帯を支配している。大量の煙が覚の姿を隠した。
市長は唇を重そうに動かした。
「覚だ。私の愚かな息子だよ」
「市長、あなたは……」
息苦しいほどの毒気のある空気と爆撃音に飲まれ、スズキは言葉が続かなかった。あらためて市長の決意の強さを感じ取り、心情を慮った。
「市長、ライトセーバーを二本用意いたしましょうか？」
父と子の直接対決は、スターウォーズに倣いライトセーバーを使用することが伝統となっている。スズキは、レジスタンス殲滅にかかわらず、二人の対決が行われると予想した。
「いいや。そんなものは必要ない。一人の人間として、向かいあう価値さえない愚息だ」
「あ、あなたは、ここで誰が撃ったかわからないような銃弾で、御子息の命が失われてもいいとお考えなのですか？」
「それが一番いい。生き残っている時間が長ければ長いほど、肉親の情が生まれてきてしまう。困ったな、私も血の通った人間なのだ」
市長はさらに屋上の淵へ寄って、情勢を詳しく窺おうとした。
「私は、市政だけでなく、いずれは国や国際社会の上に立ちたいと思っている。生を受けたからには、その辺の市井の人間で終わりたくはないのだ。今ちょっとかけたんだけど、わかったかな？　世の中には、自分の生活だけうまくいっていればよいという低次元で生きている者がほとんどだ。その様な人間は屑だ。早く切り捨てなければならない。そして、愚民らしく、下層市民として社会を構成する一部にならなければならない。人は、ほとんどが下層市民。家族、地域、国……より大きな存在のために、自身の人生を捧げ、貢献できる者こそ、真の、上に立つ価値のある人間というものだ」
「市長……」
スズキは、市長の熱弁に感涙した。神の啓示を受けたような気がした。この人についてゆき、この人のために尽くそう、と強く誓った。彼にとって身内を失うことは、越えなければならない試練なのだ。犠

牲を払って、安全な市民生活、国民生活を作り出そうとしているのだ。
「あなたの英断に感服しました。私は、どこまでもあなたについてゆきます。あなたの構想する社会を、私も一緒に目指します」
スズキは市長の前に片膝を着き、その手をとって自分の額を擦りつけた。
「ちょ、君、気色悪いからやめたまえ！」
市長はグイッとスズキから手を振り払った。そして脂ぎった額をてらてらと光らせ、さらなる構想を説明した。
「あまり明かしたことはないが、私の腹心となるお前には教えておこう。私が抱いた、社会構想実現のための根拠となる柱だ」
「ありがたいお言葉です」
「スズキ、お前はアイヒマン実験を知っているか？」
「いいえ。聞いたことのない名前です」
「アイヒマン実験、正しくはミルグラム実験だ。これはアメリカの心理学者ミルグラムが、権力者に従う人間の心理について実験したものだ」
市長は権力により社会構造を作り出す説明をはじめた。
アイヒマンは、第二次世界大戦時、ユダヤ人を収容所へ輸送する責任者であった。しかしアイヒマンは、どこにでもいる平凡な公務員であったという。その様な人間が、また多くの戦争罪を犯したナチス戦犯たちが、特殊な人物で残虐行為ができるのかという疑問が浮かんだ。そこで行われたミルグラム実験では、人は権力のあるものの指示に対して、そう簡単に抵抗できず、言われたがままの行動をしてしまうことが証明された。
この実験は、まず教師役と生徒役に別れ、教師役が生徒役に対して電流を流すことを説明される。そして、権威のある博士が教師の側につき、電流を流すよう指示するのだ。すると教師役のほとんどは、生徒役を十分に死に至らせる電流を流しても、生徒役が悲痛な叫び声を上げたとしても、「続けてください」という博士の言葉に従ったという。長いものに巻かれろとはよくいったもので、人には元々、力のあるものに追従する傾向があるのだ。拗(こじ)らせると媚び諂(へつらっ)う可能性も出てくる。
似たものに、スタンフォード牢獄実験というものもある。こちらは、同じくアメリカの心理学者、ジンバルドーが行った実験である。
学生を看守役と囚人役に分け実験を開始した所、時間が経過するにつれ、看守役はより看守らしく、囚人はより囚人らしい態度をとるようになったという。
囚人は屈辱感を与えるために、パトカーで逮捕したりＩＤの書かれた衣服を着せられたりした。実験を進めるうちに、看守たちは、指示

もされていないのに自ら囚人に罰則を与え始めたという。実験を始めたジンバルドー自身も実験にのめり込み、実験の行きすぎた状態に気づかなかったという。この実験結果では、役割が与えられることで人は非個性化し、性格に関係なく役割に相応しい行動をとるようになってしまうことが証明されたという。

「ここではあくまで閉鎖された空間で、実験としての結果だが、これは社会構造でも同様だ。人々は権力のある者の下で役割を与えられ、その役割らしく生きることが最も容易で最も生きやすいと言えるのだ」

市長はスズキの目を見た。ここでもなお尊敬の目をしていては、スズキは腹心とはならないだろう。少なくとも、少しくらいは自分で考えることのできる人間でなければ、信頼のおける部下にはならない。一から十まで面倒をみるようなことはしない。権力者に従い、同じ選択肢を選ぶことができ、自分の役割のみを全うできる者こそ相応しい。

「市長、私は、先ほどのことすべてには賛成はできません。何よりも、このような明け透けな主張をしては、市民の支持は得られないでしょう」

「ははははは」

市長は高らかに笑った。正解だ。スズキは残しておくべき部下だ。これから、誰よりも頼りになると確信した。

「もちろんだよ。巧妙に隠して説明してゆくのだ。この社会構造以外にも、知らない所に市民層が確実に出来上がってきている。しかし、多くの人々は、自分は中間層だと信じ切っている。そこでだ、さらに中間層であるということを意識させてやるのだ。それが、このヒラメ顔を『生来的犯罪人説』によって集めることだったのだ」

市長が右手をあげると銃弾の音が止んだ。砂塵が分散し、戦況が市長たち市役所職員の眼前に映った。多くの若者が、バリケードのあちこちで倒れていた。鉄や火薬の他に、たんぱく質の焼け焦げる臭いや、口腔にねっとりとへばりつくような血生臭さが辺りを満たしている。

「十分たったか。これ以上は予算の無駄だ。市からの攻撃はここで終わりにする。労災申請を希望する職員の有無を確認しろ。予算超過分は補正予算へ回せ。残りは警察に任せよう。それと、私の息子はここで逮捕してもらってくれ。他は逃しても構わない。あいつは目障りだ」

「はい、承知しました」

スズキが屋上に繋がる窓を振り返ると、ちょうど同僚の大塚が子機を片手に顔を出した。六年前の大塚の入庁以来、スズキと佐藤が密かに思いを寄せている女性だ。

「スズキさん、内線です」

第壱戦闘配備が解除されると、職員は通常業務に戻り、何事もな

かったかのように仕事を続けていた。
大塚とスズキは、今年度の異動で見事同じ課で働けることになり、その恋のトライアングルの軍配はスズキにあった。
「折り返ししますって伝えてください。あと、印西警察署に、首謀者を確実に逮捕するよう連絡お願いしま〜す」
スズキはでれでれと鼻の下を伸ばし、市長には未だかつて向けたことのない気の抜けきったコーラのような顔をした。
「は〜い」
三十代半ばで独身、市長の懐刀として将来を約束されたも同然の市役所随一の好物件に、大塚も満更ではなかった。
市役所入り口では、衛生兵、俺の屍を越えて行け、などと叫ぶ者、ピクリとも動かない者、武装解除し通常業務に戻るヒラメ課職員、市役所に手続きに来た市民とが混在し、市役所前は未だかつてないほど混沌としていた。
覚はこれでもかとばかり、残った僅かばかりの武器で市庁舎向けて攻撃を続けていた。武器も尽き、もうガラクタばかりしか残っていない。間もなくするとその勢いもなくなり、レジスタンスは悲嘆にくれてすすり泣きばかりが響いた。死屍累々の図とまではいかないが、十人以上の若者が銃弾に倒れた。命拾いした者たちも、自身の止血もままならず、呆然自失と空を見ていた。
整えられていた築山やロータリーも、取り壊しのため乱雑に重機が作業した跡のようだ。まさに戦場と呼ぶに相応しい。赤い血がそこかしこで滞留し、剥き出しの地面がそれを吸った。凄まじい攻防が繰り広げられた場所、血生臭い修羅が通り抜けた道。破壊された姿こそが戦争だ。
市長は屋上で語り続けた。
「ヒラメ顔の市民は、犯罪者というレッテルを張られることで、一気に下層市民となるのだ。すると、どんなに自尊心の低いものも、自分の人生は最低だと思う者も、彼らよりはまし、彼らよりは尊厳のある人間であることを意識するようになる。犯罪は、ヒラメ顔市民のものとなる。自分が中間層で分別のある人間であることの証明は、罪を犯さないことによって成され、そして自ら下層市民を取り締まるようになる」
市長は、スズキに向いてゆったりと言った。
「いいか。私は、条例を作っただけだ。私の野望は表には出さず、人の特性を利用して、たった一つの条例を作っただけだ。群衆とはこれほどにも無能なものなのだ。民衆が自ら権利を勝ち取ったことのない我が国の歴史、民衆の中に蔓延(はびこ)る無知、自己中、無関心……大多数の

傍観者たちを作ったのは、自らを教育することを怠った彼ら自身なのだ。少数が一時的な目醒めを経験したところで結果はこれだ。つまらん。実につまらん」

スズキはブリキのように固い動作で頷いた。自分の意思で頷いた様な気もするが、戦場にいる興奮のせいか、両手が震えていた。震えを抑えようと力を入れると、震えは全身に広がっていることに気づかされた。これは、市長に対する畏怖の念なのかもしれない。既に権力に雁字搦めになっていて、自分の意思で判断している思考や行為はほとんど残されていないのかもしれない。市長の言葉は、否応なくスズキの心に染みわたり、内側から出でて自身の意識となって浮上してくる。

早鐘を打ったように動悸が激しくなり、高揚した気分になる。不思議な感覚だった。今、自分と市長は、魂という一番崇高な部分で一体化しているような感覚だ。

市長を拠り所とするスズキだが、なおも一抹の不安が残っていた。度の過ぎる興奮状態で身体が浮遊し、足元の覚束ない気がするのだ。しかし、これは大きな問題ではない。スズキも佐藤と同様、職場はここなのであって、いかなる自己矛盾や喉に詰まったサンマの小骨の存在を確認しようとも、秘書課の職員として市長の下で職務を全うする覚悟である。

「離せ！　父さぁぁぁぁぁぁん」

耳を劈くような覚の叫び声が市役所敷地内一面に響き渡った。

「恵介、絶対父さんたちに捕まるな。どこまでも逃げろ。俺たちは間違ってなんかいない」

市長の指示通り、警察官が三人がかりで覚をパトカーに押さえて乗せようとしていた。後部座席で揉み合いが起きたあと、覚が車内から再び叫んだ。

「みんな、恵介を守るんだ。今から俺たちのリーダーは恵介だ！」

覚は敢え無く警官たちに奥へ押し込まれた。

「息子を何だと思っているんだ。それでも親かよ！　そんなに俺が社会に出ると危険な人間なのか？　権力がそんなに大事か？　市政や国や、大義のために尽くし認められることが、あんたにとっては余程価値があるってことかよ！」

覚は最後の地団駄を踏んだ。

市長は取り押さえられてからもなお叫ぶ覚に閉口した。

「うるさいな。早くそれを退けてくれ。若い政敵は早く摘むに限るのだ。度々私の部屋に忍び込み何をしているかと思えば。これは父親としての最後の思いやりだ。お前の命の保証だけはしてやろう。ただし、

人としての存在は抹消される。覚悟しろ」
市長が手首を返すと、警察官たちは敬礼をしてすぐにパトカーを発進させた。
「覚！　そんなこと聞いてないよ！　なんで僕がお前の跡を継ぐんだよ」
突然の指名に驚き、異を唱えたのは恵介だ。しかし痛切な訴えは覚には届かなかった。こんな責任を被るとは微塵も考えかなかった恵介は、生まれてはじめて氷上でスケート靴を履いた小鹿のように四つん這いで全身を震わせた。全身が強張り血の気が引き、思考も停止する。
「ひつじのショーンかよ！　恵介、行くぞ。俺たちはどうやらとんでもない親子喧嘩に巻き込まれちまったようだ。慙愧（ざんき）にたえない……。残された道は、こっちしかない」
多々羅田が恵介の腕を掴んで引っ張った。がくんと身体が揺れる。ハッとして周りを見ると、レジスタンスの残ったメンバーは、今まで覚を見ていた目で、恵介を見ていた。リーダーに向けられる目だ。しかし覚のような統率力がないと思われているのか、中には不安や不満を隠していないメンバーもいた。
「今日からは、恵介がリーダーだ。覚の敵（かたき）をとる」
「リーダー！」
「恵介さん」
仲間が恵介の背を叩きながら、先へ走った。
「盗んだバンがある。それで逃げよう。行こう！」
多々羅田の指示に従って、市役所駐車場へみな走り出した。後方からは、ヒラメ課の職員と少数の警察官が鬼気迫る表情で近づいてくる。残った僅か八人のレジスタンスは、追手を何とかかわしきり、瀬戸際のところで運転席についた多々羅田がバンを発進させた。
騒然としていた市役所一帯は、あっという間に静寂の廃墟と化した。市庁舎への被害は免れたものの、市役所の入り口はヒラメ課とレジスタンスとの抗争で、コンクリートが割れ、周囲を囲っている塀も壊され『印西市役所』の文字も粉々に崩れ落ちていた。
市長は拡声器を使って残った人々に呼びかけた。レジスタンスが去ってしまうと、戦渦を避け遠くで見ていた野次馬や周辺の市民も多く集まりだしていた。市長にとって市民の支持を集める大きなチャンスだ。
「市民の皆さん、被害を最小限に抑え、抵抗勢力を印西市から駆逐できたのは、優秀なヒラメ課職員による業績だ。彼らを称えようではありませんか」
どこからともなく万雷の拍手が起こった。ぴゅーぴゅーと指笛を吹

く者もいた。シャイな日本人とは思えない行動だ。嬌声をあげる若い女性職員もいた。

市長は一度拡声器を離し、スズキに耳打ちした。

「早く今日の事を県に報告するのだ。ヒラメ顔の下層市民ども、奴らはやはり市民として生活する資格はないのだ。これからは、これがグローバルスタンダードだ。オール印西で取り組んでゆくぞ」

スズキが深く頷くのをみて、市長は気持ちがさらに晴れやかになった。両陣とも派手にやったので、被害が小さいとは言えないが、これも必要な犠牲であったのだろう。市長は再び拡声器のマイクを口にあてて言った。

「しかし、この戦いははじまったばかりだ。安全な印西市、この政策をオール印西でさらに広めていこうではないか」

市長の呼びかけに、再び大きな歓声があがった。

「市民諸君、諸手を挙げて喜べ！」

あちらこちらで、手を大きく振りかざし市長への支持を訴える掛け声が発せられた。中に混ざって『目には目を、歯には歯を』と市のスローガンを掲げて歓呼する者もいた。まるでワールドカップの会場にいるかのように熱狂に包まれていた。市庁舎前は、狂喜乱舞する市民で溢れかえっていた。

男がデスクを平手で叩いた。バシンと金属と生身の人間とが衝突する音が小さな部屋に反響する。部屋の中は鉄格子窓と鏡が一つずつあり、他に余計な物は置いていない。厚い窓を通して、夏の日差しが室内を灼いている。日は既に傾いていたが、その威力は衰えることを知らない核エネルギーのようだ。

その男は予想以上の手のひらの痛みに顔を歪ませた。少しパフォーマンスが過ぎたようだ。

「どうしてこんなことを企てたんだ。いつまでも黙秘していられると思うなよ。この『自白の亀山』にかかればなあ……」

覚は市役所から交差点を一つ越えた印西警察署の取調室に連れて行かれた。

取り調べ室でいかにもしつこそうな刑事にこってりと絞られた覚は、長い沈黙を破りこう答えた。

「太陽が眩しかったから……」

「は？　おちょくっているのか？　ママンでも呼ぶか？　カツ丼食うか？」

覚の眼は座っていて、焦点があっていなかった。たび重なる尋問にドロドロに疲弊し、一時はある志に目覚めた若者らしくも勢い任せの

行動に出る人物には見えなかった。
覚の出生など彼の存在に関する情報はすべて抹消され、一生印西市役所の地下室に幽閉されることが議会で決定された。
後世この出来事は、印西市史上甚大な人件費と復旧工事費を浪費させた事件として語り継がれることとなった。
残ったレジスタンスは、検問を設けるも人手不足だった印西警察署の包囲網から難を逃れ、バンで北上を続けていた。街中で指名手配のポスターを見ては怯え、次の街へと急いだ。行く先々で、印西市と同様の条例を作り出した自治体に出くわした。聞くと、ヒラメ人間は関東地方のほとんどの地域を昼夜問わず屋外に出られない状況だという。
リーダーに祭り上げられた木下恵介は、実際の役職はないも同然だった。動画サイトを使って声明を発表するときなどに、作られた原稿を読まされるだけだった。収録前日には徹底したスピーチ練習を強いられ、カリスマ性と並はずれた統率力があるかのごとく演じなければならなかった。撮影の時の衣装も決められた。アラブ諸国の民族衣装にほっかむりをして銃を抱え、視聴者に呼びかけるのだ。アルカイダさながらである。抵抗勢力、異分子、武力闘争というと、行き着くのはテロリスト集団なのだろう。短絡的な思考に恵介自身も呆れかえる。そこまで真似なくても、と恵介自身は思うのだが、誰も聞く耳を持たない様子だった。彼らは市長の政策からなのか、既にステレオタイプ化した人間なのか、自ら型にはまっていた。
恵介は、レジスタンスたちの目を忍んで一通の手紙を八重に宛てた。もちろん差出人は記さず、すぐに離れる街のメッキも剥がれた丸型ポストに投函した。以後、恵介一味の足取りは掴めていない。

八重へ

兄さんは本当の日陰者になってしまった。この手紙を書いている場所も教えることはできない。印西市にはじまった条例が全国ほとんどの地域で施行されている今、僕たちのような人間は、人気の少ない所で怯えながら肩を寄せ合って生きてゆくしかないのだ。一体何がどこで間違って、こんなバカげた条例を、みんながおかしいと思いながら全国に広げることになったのだろう。僕たちが反対しようも、今では昼間に街を歩いているだけでムショにぶち込もうと人々がやってくる。夕方にはおちおち歩いていられない。日が落ちるのを見計らって、警察に通報されてしまうのだ。幾度も、鬼ばかりの街を死に物狂いで駆けまわった。日本は変わってしまった。
父さんは昔、何かの折にこの言葉を教えてくれた。『地方自治は民主主義の学校である』と。いや、もしかしたら、高校の現代社会の授業

だったかも知れない。これはジェームズ・ブライスの言葉だ。僕は、この言葉を信じている。悪い意味でも、良い意味でも。

自由のために、僕たちは果たさなければならない責任があることに、まったく無自覚であったのだ。

八重、僕らは二度と会えないかもしれない。祭り上げられて、レジスタンスの長だ。成り上がりじゃない。そんな器でないことは僕が一番知っている。けれども、全国に張り出されたヒラメ顔のイラスト、ムショに送られた覚が言い残したことで、まるで追いやられるかのように最後の袋小路へたどり着いた。誰も僕の立場に近づこうとしない。僕はただの看板だ。長く使える方がいい。それだけの人間だ。僕はなりたくてリーダーになったんじゃない。これを信じてくれる人は、世の中に誰ひとりいないだろう。ここまで追い詰められてしまったら、窮鼠のように猫に噛みつくしか方法がない。結局僕は、どこに行ったとしても、思い切り羽根を伸ばせる自由には、二度とありつくことはできないのだ。

八重、どうか僕たちが生きている間に、人々が間違いに気づいてくれるのなら、また会おう。印西市民の、日本の、人権意識と民意の力と、何よりも良心を信じたい。僕たちはもっと人を、個人を信頼できる世界に生きているはずなんだ。

自由であることの素晴らしさと、その自由を守るために果たす責任に無自覚だったあの頃に、あの場所に、僕は戻りたくてしょうがない。そのために、僕がやらなければならないことが今ならわかる。後悔という言葉が、毎日僕の人生を蝕んでゆく。未来を断たれた今も、残り少ない僕の歩く場所を黒く塗りつぶしてゆくのだ。

恵介

日本全国は、暫らくアノミーとなった。一部からは悪名高き印西市市長の行政は、道半ばである。日本一平和な自治体を掲げる印西市の方針に賛同する全国各地の地方自治体は跡を絶たない。フラットな社会が形成されはじめたのだ。

全国的に条例が施行された後、美容外科にかけ込む人が増え、日本社会に思わぬ経済効果を生み出したという。

日本は圧倒的大多数の印西市長支持者で溢れている。

〈了〉

【編集後記】

一昨年の秋に創刊号を出してから二年になるが、その間に会員も順調に増えて、ここに第五号を発刊する運びとなった。冒頭に掲載した中川とら「シトラスの秘密」は、姉妹が苦難にめげずに成長するさまを妹の視点から瑞々しく描いている。行間から少女の初々しさが香り立つような短編である。

唐瀬 光の「青いみのり」は、性同一性障害の主人公が男子禁制の女学院に入れられて、違和感を抱きながらも伸び伸びと生きる青春ドラマで、二年前に出版した『日見子たちの城』の続編に当たる。香取淳の「アプとズコ」は、家畜のホサピに混じって生まれてきた人間の子たちをいかに見分け、いかに育てるか……という難題に主人公の少女と少年が挑む。

畑中康郎の「失われた年月」は、エリート官僚が自身の奢りにつけ込まれて道を踏み外すが、己の行為を恥じて隠遁生活に徹するという筋書き。潔い生きざまに共感……というモチーフは面白いが、小説らしい文体を工夫すれば読みやすくなる。

いんば華子の「みんな笑え」は、『宇宙の遥か彼方に存在する地球に酷似した惑星での物語』という設定で始まる冒険作。ある地方自治体の市長が『ヒラメ顔の人間』を危険人物と決めつけ、犯罪者予備軍の烙印を押す。専用の施設に収監されたヒラメ顔たちは理不尽な仕打ちに抗って武装蜂起を図るが、戦闘場面に少し難がある。折しも国会で『特別秘密保護法』が強行採決された時期と重なるが、反逆を企図しただけで重罪に科せられるとした方が、リアリティが増すかもしれない。前出の「青いみのり」に関しても、性を変更して結婚した男性が、体外受精で得られた子の父親として認められる最高裁の判決が出た。会員のフィクションが、妙に世相と絡み合ってくる。

ほかには、中川とらが詩を二編発表、土方 杳が短編を書き上げたが掲載規定に合わず、今回は見送りになった。次回に力作を期待したい。

以上、第五号の掲載作を紹介して、短い批評を加えた。新たな会員が加入してくれることを熱望して止まない。

〈香取 記〉

草の丘 第五号

発　行　二〇一三年十二月二十二日

編集兼発行人　印旛文学の会 香取 淳

連絡先メール katorijun27@gmail.com

携帯　so3_higu1@ezweb.ne.jp

URL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp